かならず眞理を覺るべし』

こと。されば佛を念ずるものは、自分は今すでに佛のみ名を聞くことが出來たから、願はくば佛となつて十方世界の諸の佛がたのやうにならうこの念ひをなせよ。

佛の相好については『六波羅密經』に『過去未來現在の三世にわたつての世の中のあらゆる衆生の量りなく際涯のない功德も、如來の一毛の功德の百千萬分の一にも及ばない。かように一つ〳〵の毛の端はみな如來の量り知られぬ功德から生へ、すべての毛の端のあらゆる功德が寄り集つて一つの髮の功德をなし、かくて八萬四千の髮の一つ〳〵の中に量り知られぬ功德が具はり、それが寄り集まつて一のこまかな功德をなし、すべてのこまかな功德が一の相の功德をなし、すべての相の功德が百千倍に寄り集まつて、眉間の白毫相の功德をなして、その相は圓かに、右に旋りうねつて水晶のように輝き、これまた百千倍して肉髻の相となり、かやうに肉髻の千倍の功德もまた遙かに梵音聲の相の功德に及ばない』と云ひ、また『大集經』には、『かようにこの世界を初め十方の量り知られぬ世界のあらゆる衆生がよしやみな一時に佛となり、これらの佛がたが無量劫の長い間佛の一の毛の功德を讃めたへても嘆へつくすことが出來ない』と。されば「願はくばわれは佛の際涯ない功德の相を見奉りたいものである」との念ひをなせよ。

次に阿彌陀佛の光明については、『平等覺經』には、『無量清淨佛の光明はいとも尊く、他に比ひなく、諸佛の光明のみな遙かに及ぶところではない。ある佛の頂の光明は或は七尺を照らし、或は一里、或は五里、二十里、四十里、八十里、乃至二百萬の佛の國を照らされるけれども、無量清淨佛の頂の中の光明はよく千萬の佛の國を照らし給ふ』（以上取意）といひ、『大無量壽經』には、佛が阿難に告げたまふて、『阿難よ、無量壽佛の光明は最もあたたかで、自餘の諸佛の光明の及ぶところではない。その佛の光明は百佛世界を照らし、或は千佛世界を照らされる。これを要するに東方恒河の砂の數ほどの佛の世界をしらされ、西、南、北、東南、東北、西南、西北ならびに上下に於けるも同じいから、無量壽佛をまた無量光佛、無邊光佛、無碍光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛とも名づけたてまつる。もし人あつてこの佛の光明にあひまつれば、三の惡世界に惱み苦しんでゐるものでも、みな安息を得てまた惱みも苦しみもなく、死後いづれも迷ひを離れることができる。このことはひとり私ばかりがその佛の光明を讃め

嘆へるのでなく、あらゆる諸佛もみな悉く讃め嘆へてやまないのである。もし人あつてその佛の光明のあらたかな功德を聞いて、一心不亂に日夜景仰するならば、かの無量壽佛の國に生れることができる。けに私は一劫の間を晝夜にわたつて說きつゞけることしても、かの無量壽佛の光明の尊さ、あらたかさを說きつくすわけにはゆかないのである』（以上取意）と。また『華嚴經』の歌に

『一々の毛孔より光現はれて
遍くみ空に照りわたり
光の至らぬきわもなく
地獄の苦をも拔き給ふ』

と。されば人々よ、「願はくば佛の光明がわれを照らして、生死の苦しみから離れしめたまへ」との念ひをなせよ。

また何ものにも害はれることのない佛の力のあらたかさは、『寶積經』によるに、三千世界のあらゆるもろ〳〵の大海、大山を初め、天上界の諸の宮殿までも悉く吹きあげられ、微塵に打ち碎かれてしまうやうな大暴風も、如來の衣を毛筋ほども動かすことも出來ないことであり、また『十住論』によれば、十方世界の衆生に惡魔のやうな力があつて、一緒になつて佛に危害を加へやうとしても、佛の毛一筋すら動かすことも出來ないから、まして佛を害し奉るものゝある筈はないことのことである。されば、「願はくばわれもまた佛のかやうな金剛身を得たいものである」との念ひをなせよ。

次に佛の自由自在の相は、『十住論』に、『佛は虛空を歩まれるにも、起居の上にも自由自在で、一日に五十三億二百九十六萬三千大千世界をすぎる神變不思議な力を具へた大音聲聞が百年かゝつて過ぎるところを一瞬間の中に過ぎ給ひ、寶の蓮華の上を踏んでゆかれることも自由自在である』といひ、『觀佛三昧經』には『虛空で足をあげ給ふときには足の千輻輪の相から八萬四千の蓮華を雨ふらし、その一つ〳〵に數限りのない佛が在しまして虛空を歩まれ、虛空を踏んで行かれるときには、千輻輪の影が大地に現れて香りのゆたかな*鉢曼摩華が自然に湧き出て佛の足を受け、如來の足にふれたあらゆる畜生は七日七夜の間いろ〳〵の快樂を受けて、命が終れば人間や神々の間に生れる』といひ、『華

嚴經』の慧林菩薩の歌には、

『佛の自在神力は
無量にしてぞ議られじ
去來し給ふことなくて
法を說き衆生を度し給ふ』

といふてある。されば「願はくばわれもまた自由自在な力を得て、心のまゝに諸の佛の世界に遊びたいものである」この念ひをなせよ。

また佛の神變不思議な通力については『十住論』に『佛はよく恒河の砂の數ほどの世界を微塵に碎いてまたそれを合はされ、或は金銀と化し、或は恒河の砂の數ほどの限りない世界の大海の水をみな乳蘇となし給ふ』といふてある。また『維摩經』に菩薩の不思議な力を說いて、大千世界を陶工の用ひる輪のやうに斷ちとつて掌の上にあげて恒河の砂の數ほどの世界の外へ投げすてゝも、その中の衆生はこれを知らずにゐる、またもとに還しても還つたことも思はない。その他須彌山を芥子の中に納め、四大海を一の毛孔に入れることも自由自在であるが、その中の衆生は毫もこれを知らずにゐるのであるとのことがいふてある。菩薩にすらかやうな神變不思議な力があるが、まして佛にはいふまでもないことである。『華嚴經』の眞實幢菩薩の歌に、

『なべてもろ〳〵のみ佛は
神力自在にましませり
過去未來現在に
求めてしかも得ざるべし』

と。されば「今自身は佛の神變不思議な力によつて、ごの佛の世界に住んでゐるのか、それとも毛孔の中に在るのか知らないが、いつかはこれを覺り知りたいものである」この念ひをなせよ。

また佛が種々に身を化現し給ふことについては、『十住論』に『佛は一念の中によく恒河の砂の數ほ

ごの十方の量り知られぬ世界に、無量の佛身を化現し給ふて、その一々の化佛もまたよくいろ〳〵の佛のはたらきを現し給ふ』こいひ、『華嚴經』の夜摩天宮會の歌には

『佛の御身ははてもなく
あまねく十方を究むれば
この座を離るゝことなくて
終に至らぬかたもなし』

こ。又いはく

『智慧甚深の功德の海は
十方無量の國に現はれ
もろ〳〵の衆生のねがひのまゝに
光明遍く、法を說きます』

こ。されば「願はくば宇宙に遍滿する佛身を見奉らう」この念ひをなせよ。

次に佛の自由にすべてのものを見徹す力については、『十住論』に『力のすぐれた聲聞は自由にすべてのものを見徹す天眼でよく小千國土こ、その國土の中に棲む衆生の生れる時こ、死ぬ時こを知るが、力の劣つた辟支佛は十の小千國土こ、その中の衆生の何れに生れ、何れに死するかを見、力のすぐれた辟支佛は三千大千國土こ、その中の衆生の何れに生れて、何れに死するかを見るが、諸の佛がたははてしなく量り知られぬ不可思議の世界こ、その世界に棲む衆生の生れる時こ死ぬ時こをよく見徹されるのである』こいひ、『華嚴經』の歌には、

『み佛の眼は邊りなく
十方世界をみそなはし
無量の衆生をば

通力をもて調伏します』

こ。されば「彌陀如來はかやうな不思議な力がおはしますから、自分のなすこゝの一々を遙かに見透してゐられるこゝであらう」この念ひをなせよ。

また佛の自由自在にあらゆるものゝ聲を聞き、あらゆるものゝ心を知りつくして、自在に衆生の前生のこゝを知りつくし給ふ力については、『十住論』に、『よしや恒河の砂の數ほどの三千大千世界の衆生が一時に聲を出し、また一時に百千種の伎樂を奏でゝも、自由自在に聞きわけられ、その中のたゞ一の音聲を聞かうと思はれゝば、それも思ひ通に聞かれて、更に餘の聲も聞えなければ、また遙り知られぬ遠い世界の糸のやうに細い聲をも聞きわけられ、あらゆる衆生にも聞かしめられる』こされば「彌陀如來は定めし自分のあらゆる言葉をお聞きなさるこゝであらう」この念ひをなせよ。

次に佛のあらゆる衆生の心をよく知り透されてゐることについては、『十住論』に、『佛はよく量りなく際涯しらぬ世界の現在の衆生の心こその心の欲ひの一つ〳〵をも知りつくされ、はては天上界の衆生のいろ〳〵の心までも知りつくされてゐる』。『華嚴經』の文殊菩薩の歌には

『なべての衆生のこゝろこそ
普く三世にわたれども
み佛はよく一念に
みなこゝろ〴〵くさとります』

こ。されば「彌陀如來はよく、自分の心の欲ひの一々を知りつくされてゐられるこゝであらう」この念ひをなせよ。

また佛の前世でのいろ〳〵のこゝゝもを知りつくし給ふについては、『十住論』に『もし佛が自身を初め、あらゆる衆生の量りなくはて知れぬ宿命のこゝゝもを念ぜやうと思はせられるならば、一つこして知られないこいふこゝなく、恒河の砂の數ほどの限りない昔のこゝでも、その衆生はどんな形相をし、何を食ひ、何を求め、どんな果報を受けたかこいふこゝまでも一々知りつくし給ふのである』こ。同論の『懺悔品』の歌には、

『佛の宿命智には量りなく
天眼をもて見給ふにほこりなし
すべての人こ天人も
そのきはまりを知らざらん』

こ。されば「願はくばわが前生の業を清らかにして下さるやうに」この念ひをなせよ。

また佛の智慧は障碍なくあらゆるものを知りつくし給ふことは、『六波羅密經』によるに、菩薩の施しの智慧は三千大千世界の衆生のあらゆる智慧にすぐれて比ひのないものであるけれども、第十地の菩薩の智慧には遙かに及ばない。また十地の菩薩のすぐれた智慧こ雖も彌勒菩薩の智慧には及ばない。更にこの三千大千世界のあらゆる衆生の智慧がこゝ〳〵く彌勒菩薩の智慧のやうになることが出來ても、佛の智慧の百千萬分の一にも及ばないのであるこのことがいつてある。更に『華嚴經』の『如來現相品』の歌には、

『み佛のいこ深き智慧は
あまねく法界に入り給ひ
過去未來現在に從ひて
世の人のための道こなる』

こ、また同經の普明菩薩が佛を讃め嘆へてうたへる歌には、

『すべての諸法のその中に
佛の法こそはてもなし
さこりの智慧に入りぬれば
遍く法界に障りなし』

こと。されば「今彌陀佛は自分の身こと口こと意の所作を一々明かに照らされることであらう。願はくばみ佛のやうに清らかな智慧の眼を得たいものである」この念ひをなせ。

また佛のみ心は安らかに、よくあらゆるものを自由にならされることは、『十住論』によるに諸佛はよく心の自由を得させられて、御意のまゝにならぬことゝてはなく、心は安靜で少しも動搖し給ふことはなく、あらゆる煩惱をはなれて、大海のなみ〳〵こと水を湛へたやうに安らかであるこのことであるされば「み佛よ、私にごうか佛の智慧をお與へ下さい。ごうか私の心のごよめきを滅して下さい」この念ひをなせよ

次に佛のよくあらゆる衆生を慈しみ給ふことは『大般若經』に『十方世界には一人として如來の大きな慈しみの光に浴さないものがない』といひ、『寶積經』に、『よしや衆生がたゞ一人恒河の砂の數ほどの諸佛の世界を過ぎてその外にあつても、そのものゝために如來は行かせられて教法を說いて誇りを開かしめられる』といふてある。『華嚴經』に文殊菩薩が佛を讃め嘆へてうたへる歌に、

『一々の地獄の中に
量りなき劫を經めぐりて
衆生をすくはんためにこと
無量の苦をば忍びます』

こと。『大智度論』に『佛は佛眼を以て晝夜六時にあらゆる衆生を觀ひ浮べさせられて、一人もその救ひにもらされることいふことがない』といひ、ある論には『雌魚がよくその卵のことを念はないならば、卵は壞れ爛れるがやうに、佛もまた衆生を憶ひ念べられないならばその積みあげた善根は壞れるであらう』といひ、『涅槃經』によるにあらゆる衆生の受けるいろ〳〵の苦しみは、これ悉く如來御自身の苦しみであるとせられるが、衆生は佛のこの大きな慈悲の心も知らずして、佛を謗り、教法を謗り、教團の和合を破るやうなことを嘗てするのであるこのことがいふてある。されば人々よ「佛はいつもわが身を照らし、わが善根功德を護り、やがて來んことを觀察し給ふであらう。いよ〳〵時が來るならばその時期を外さずに佛の御手引きを被らねばならぬ」この念ひなせよ。

佛の辯說のさわやかに自由自在であることは、『十住論』に、『三千大千世界に充ち滿つるあらゆる

衆生がみな悉く舍利弗や、辟支佛のやうなすぐれた智慧を得て微塵數の長い間、身受心法の四念處の義についての難問に答へ給ふにも言葉の重復はなく、その辯舌に窮まりはなく、その說かせられるところは皆ことゝく利益を與へられて虛言はなく、衆生を敎化するために說かせられた言葉の一々は、よく異端邪說のものにも了解せられて量り知られぬ衆生を敎化せられるから、佛をこの上もない世を導く師匠と名けたてまつるのである』といふてある。『華嚴經』の歌には、

『諸佛の廣大の御聲は
くまなくいたらぬこころなく
菩薩は了知し給ひて
みな音聲海にぞ入り給ふ』

と。また『譬喩經』の第三によるに、阿育王がまだ佛の敎へを信ぜなかつた頃、海邊で佛の音聲にさも似た鵠隨といふ鳥の聲を聞いて、歡んで道を求める心を發し、七千の宮女もまた道を求める心を發して、厚く三寶に歸依するやうになつたといふが、鳥の聲でさへかやうに人を敎化するのに、まして妙なみ聲の佛に於ては尙更のことである。されば「私はいつになればかの佛のさはやかなみ聲に接することが出來るのであらうか」との念ひをなせよ。

また眞理を體とする佛身を觀想するに『大般若經』の文殊之利菩薩の言葉によれば、『私は如來を念ひ浮べてみるに、如來は眞理そのもので、動作もなければ、彼此といふ差別もなく、有でもなければ無でもなく、常住不變なものでもなければ、斷絕のあるものでもなく、過去未來現在に卽してあるのでもなければ、消滅することもなく、淨不淨の別もなく、あらゆる言語と思惟とを超絕してゐるので、佛の上にこの眞理の相を念ひ浮べてこそ、眞に佛を見奉り、如來を禮敬し、佛に近づき奉るものといふことが出來るのである』と。『占察善惡業報經』に地藏菩薩が眞理の相と說いて、『衆生の心の本質は本來生ずることもなければ、滅することもなく、淸淨に、大空のやうに障碍もなく、無差別平等であつて十方世界に至らぬくまなく、增減し變異することなく、あらゆる衆生の心も、あらゆる聲聞、辟支佛、あらゆる佛菩薩の心もみな生ずることもなければ、滅することもなく、れのない

靜寂そのものである。あらゆる世界の上に、心の形狀は求めても得られないものである。すでに何等かの形狀のあるものは、衆生の煩惱の然らしめるもので、我こ執着を起すことも、これみな妄念の然らしめるものである』こいふて居られる。『華嚴經』の一切慧菩薩の歌に

『法性もこより空寂に
ころべきもなく、また見べくなし
性の空なるはこれ佛ぞ
思ひはからむことを得じ』

さ。されば「私はいつ本來の眞理の證を得られるのであらうか」この念ひをなせよ。

次に佛の德のあらたかなことについては、『華嚴經』に普賢菩薩は『如來の功德は、よしや十方世界のあらゆる諸佛が量り知ることの出來ぬ長い年月の間、佛の德を說き演べても、演べつくすことが出來ない』こいひ、『大無量壽經』には『無量壽佛の威德や功德は極まりなく、あらゆる世界の數限りない佛がたは一人として彼を讃めたゝへたまはぬものはない』こいふてある。龍樹菩薩の歌には、

『その德を稱めたゝへんこて
諸佛は量りなき時を經るも
遂に說きつくすこと能はざらん
この淸き覺者に歸命しまつる』

こ。されば「ごうか佛こ等しくなりたいものである」この念ひをなすべきである。

また『般舟經』には、『この三昧は値ひがたく、求めることも難くて、百億劫にもその名をすら聞くことも、これを學ぶことも出來なければ、更にまた人に敎へることも出來ないことはいふまでもないことである』こいひ、『大無量壽經』には、『たこひ大火があつて三千大千世界に充ち滿つることも必ず通り拔けてこの敎をきゝ、信じ歡び、經法を熟讀翫味して、說き示してある通りに修行すべきである何故ならば多くの菩薩達が聞きたいこ思ふても、聞くことの出來ない敎へだからである。人もし敎を聞くならば、この上もない佛の道に於て再び退轉することはないであらう。この故に專心に信じ、經

法を熟讀翫味して、說の如く修行すべきである』といふてある。されば「大千世界の大火に充つる中をすぎても、或は億劫の長い間を經ても、無上の眞理こそは求むべきである。然るに今既に私はこの深い眞理の教法に値ふてゐるのに、どうして怠り油斷して求めはげまないでゐられやうか」この念ひをなすべきである。

人々よ、これらのいろ〳〵のことゞもについて、それ〴〵に自分の心の樂ひに順ふて憶ひ浮べよ、もし憶ひ浮べることができないならば、よく本書を披いて文の一々の意味をときはめて、或は讀誦し、或は淨土を憧憬し或は恭々しく禮拜してこれを楷梯として佛を見奉る緣を結んで、身に、心に、口にしばらくも佛の境涯を忘れてはならぬ。かやうに佛の種々のあらたかな功德を心に信じ歡びたもつて、つねに憶ひ浮べるならば、『度諸佛境界經』に『十方世界の數限りない諸の佛や聖者の群に百味の飲食や微妙な天衣を供養し、その一々の佛の入滅せられて後に、一々の世界に數限りのない堂を建て、日々に供養し、更に量り知られぬ衆生にいろ〳〵の供養をすることを敎へるよりも、如來の智慧や功德の不可思議であることを信ずるもの、受ける功德にまさるものがない』とあるがやうに、量り知られぬ功德を受けるのである。されば『華嚴經』の歌にも

『み佛の自在の力には
無量劫にも遇ひがたし
もし一度も信ずれば
無上道をぞ證るべし』

こ。さればその起居動作こ時こ處こにかゝはりなく、專心に心を淨土にかけて、無量壽佛を憶ひ浮べまつるべきである。

四、止惡修善

惡心を斥けて善事を修むべきことは『觀佛三昧經』に、『一心に佛を念じて三昧の境涯に入らうこ欲ふならば、よく戒行を守り、邪しまな見解をすて、憍慢こ憤りこ、嫉みの心を起すことなく、頭上に燃えうつる火をうち拂ふがやうに努め勵んで退轉せず、眞實の經典を讀誦するならば、この功德で佛

のみ力を念ずるから、直ちに無量壽佛を見奉ることが出來るのである』と。

今この五つのつとめについて列證するに、『大智度論』によれば『佛は醫王のやうであり、その教法は良藥の如く、僧は看病人の如く、或は服藥禁忌のやうである、いくら教法の藥を服用しても、よく佛の禁ぜられた戒律を守らないならば、煩惱の疾病を癒やすことが出來ないのである』といつてある。

また『觀佛經』によるに、『邪しまな見解の人や、傲慢な人や、教法に背いて殊更に異說をたてゝ他人を惑はすやうな人々は、よしや佛を念じても、念佛の甘露は味ひを失ひ、賤しい家に生れて、量り知られぬ惡業で身を飾りたてゝ、諛ひをこゝせねばならぬ』と。

また『六波羅密經』によるに、『無量劫の長い間、もろ〳〵の善事をつとめても、よくこゝに耐え忍ぶ力と智慧の眼がないならば、一念の瞋りの焰のためにみな燒きつくされてしまふのである』と。『遺敎經』には憤怒の心を、功德の法の寶を掠奪するに喩へ、『大集經』には瞋りの心を起さないものは、よく賢者と相會して三昧を成就すると說いてある。

また『大無量壽經』には『この世では僅かばかりの憎みや嫉みであつても、後の世では段々劇しくなつて、終には大きな怨敵となるやうになる』と說き、他人を嫉み毀つ罪は極めて重く、『寶積經』によれば、釋尊が鹿野苑にまし〳〵た頃、罪の障碍が重くて佛の說法を會得することの出來なかつた六十人の比丘が世尊の前に跪いて身の暗愚さを嘆いたので、世尊は彼等に對して、「比丘等よ、起ち上るがよい、そして二度ここの嘆きを繰り返してはならぬ。汝等は昔拘留孫佛の世に出家して道を求めたが、博識によく戒律を守り、慾心の少いことを誇りとしてゐたが、たま〳〵時の人々の歸依の厚かつた二人の比丘を嫉んで、これを謗つた罪によつて、長い〳〵間三の惡世界の苦しみを受けて今に至つたものである」といはれた。すると、これを聞いた六十人の比丘は身の毛もよだつ位に後悔して涙を流して、以後他を謗ることを愼み、よく謙虛つて、自分のつくつた罪業を懺悔することを誓ふたので、世尊は、かくてこそよくあらゆる業障が消え失せて善根功德が增進するのであると讚め嘆へられたといふことが出て居る。

また『大智度論』の歌に

『馬師井宿の二人の比丘は
懈怠のゆゑに惡趣に墮ちぬ

佛を見奉り、法を聞きしかど
猶悪趣は免れじ」

こ。つとむべきをつとめないで悪世界の報を免れることが出來ないばかりでなく、努力を怠るならば、そのつとめは成しとげ難いものである。

また眞實の教の經典の讀誦にもまた量り知られぬ功德があるのである。

『般舟經』には一心に佛を念じて三昧の境涯に入るについて、他人の名聲を妬まず、よく人を敬愛し、年長者に順ひ、恩を忘れず、出放題な言葉をつゝしみ、邪しまな教を離れ、常に食を乞ふて特別の供養を受けず、よく努め勵んで夜中こ雖も横臥せず、他人にものを施しても惜しみ悔いることなく、深い智慧を磨いて心に誇ることなく、常に佛に仕へるこ同樣に善き師匠を敬ふここの十種のここがらをあけ、その他、この經の上に更に十六種の法をあけ、『十住毘婆沙論』の第九に四十餘種、『念佛三昧經』、『華嚴經』、『觀佛經』の上には幾多の悪事をやめて善事を修めるの法を列擧してゐるが、今はここに省略する。要はたゞ專心に、生死の世界の苦しみは火宅の中にゐるかのやうに、しばらくも安

穩でないここを心に想ひ浮べて、無益な言葉をやめて、み佛を憶ひつゞけて念ずべきである。

さて上述のやうに念佛にはよく諸の罪悪を消滅する功德のあるのに、尙も努めはげんで戒行を守るのは、終日佛を念じても清淨な心がすくなくて野犬のやうに心が濁り亂れて、心の亂れを恣まにすれば更にその悪を深めるからであり、未來永劫に絶えることのない心の放縱は、かの『次第禪門』にいふが如く、先づ應身佛の一つ〳〵の相好を浮べて次第に三十二相に及んで心の眼を明かにして、道を求めるに障碍こなる睡眠こ心の散亂を除き、次に報身佛の量り知られぬすべての功德を念じて、悪しき念ひこ思惟こを破り、次に萬有はその本質の上には平等であつて、生起することもなければ、消滅することもなく、形もなければ、たゞ空寂そのものである佛の報身を念じて、事物の相に對する執着の心を除くべきである。さればよく萬有の空寂であることを觀じて、事物に對する執着の心を除いて、專心に佛を念ずるならば、その功德は量り知られぬ位になり、極めて重い罪障をも滅するのである。

またよく煩惱の根源を明かにして、悪賊を追ふがやうに心に鞭を打ち、油のなみ〳〵盛られた鉢を捧げて歩むやうに、身こ口こ意の散亂に留意すべきである。かの『六波羅密經』にいふが如く、足を組

んで端座し、正しい念ひに落ちついて觀ひ浮べ、大悲の心を以て落ちつき場所こし、皷を打つて盜賊を追ひたてるがやうに智慧を皷こし、心の臍をかためて、煩惱の賊を驅逐すべきである。またあらゆる煩惱の根源を推求するに、煩惱は心によつて生起するものであるか、それこも外緣によつて生起するものであるか、また心こ外緣こが一緒になつて生起するものであるのか、それこも何等の關係なしに生起するものであるのか、もし心によつて生起するものであるこするならば、更に外緣を待つここなしに生起するであらう。さすれば何等實體のないものに對しても貪りや怒りの心が起るここであらう。然しかやうなここはあり得ないここであるから、煩惱は心によつて生起するものであるこいふここが出來ない。もし外緣によつて煩惱が生起するものこするならば、心そのものに何等のかゝはりもないここであるから、睡眠の中にあるものも、死者も、煩惱を起すここゝなるであらう。然しこれはあり得ないここである。然らばもし心こ外緣こが一緒になつて煩惱が生起するものであるこするならば、未だ心こ外緣こが一緒にならない以前には、心にも外緣にも煩惱がないから、別々の時に煩惱のないものであるならば一緒になつても煩惱の生起する筈はないのであつて、それは恰も胡麻を絞つてこそ油は出るが、砂や石を絞つても油の出さうな筈のないのこ同じやうである。またもし心こ外緣こに何等のかゝはりもなしに煩惱が生起するこするならば、既に心を離れ、外緣こ關係がないのにごうして煩惱が生起するここがあらう。心も外緣もないのに煩惱が生起するこいふならば、虛空こそ常に煩惱を生ずるものこなるであらう。かやうにその根源についてよく觀察するに、煩惱は實の生もなければ、去來もなく、內心に求めても得られねば、外部に求めてもこれを把むここが出來ない。さればもこより中間にあらう筈もなく、すべてが幻のやうである。單にこれは煩惱の心ばかりでなく觀察し、推求する心そのものも求めればまたその根源はないのであつて、宇宙には實に諍るものもなければ、諍られるものもないのである。かやうに惑ひの心を推求するならば、惑ひの心は自然に消滅するのである。されば『中論』の歌にも、

『諸の法は自ら生ぜず
　他より生ずるこもなし
　自他共ならず、因なきにもあらず
　この故に無生なりこ知る』

こあるのである。

また自分の心に何ひとつ不足なく具へたる八萬四千の煩惱と、阿彌陀佛の具へさせられる八萬四千の眞理とは本來空寂で、同一の體であつて何等の障碍もない。煩惱もなければ、菩提もなく、煩惱がなければ求むべき菩提もなく、菩提がなければ斷ずべき煩惱もない。故に貪りも瞋りもそのまゝに道であり、氷を別にして水もなければ、水の外には氷もないが如く、本來空寂なものであると念ずべきである。さればこそ經には、『煩惱と菩提とはその本質に二つなく、生死がそのまゝに涅槃である』と說かせられるのである。さればかやうに道理を聞けば明かであるけれども、自身に智慧がないから煩惱の氷を融いて功德の水となることが出來ない。よつて、「み佛よ、どうか私を哀れませられて、み佛の智慧の力で解脫を開かしめて下さいと」念じ、聲をあげて佛を念じて救ひを請はねばならぬ。もし惑ひが心を覆ふて妨害をするならば、よく迷ひの心を知つて常に心の師匠になつて、心を師匠とするやうなことがあつてはならぬ。またよしや戒行を破るやうなものであつても、一心に佛を念ずるならば、念佛はよく罪惡を消滅せしめ藥となるのであるが、常に戒行を犯すならば、念佛三昧は成しとげ難いものである。

五、罪障懺悔

煩惱に心をかき亂されて禁ぜられる戒行を犯したならば、時をうつさず直に懺悔すべきである。『涅槃經』には『罪惡を犯して覆ひかくせば愈罪を深めるが、これを懺悔するならば、悉くその罪は消え失せるものである』といひ、また『大智度論』には、『身や口や、意で犯した惡事を悔いることなしに、佛を見奉るといふことはあり得ないことである』と說かれてゐる。

この懺悔については種々の方法があるが、それ〴〵に心の樂ひのまゝに順ふべきである。或は全身を地に投げて汗を流して彌陀佛に歸依し、眉の間の白毫を念じてこの念ひをなせよ。「佛は往昔空王佛の、眉間の白毫相を敬ひて、罪をほろぼして佛をえたまへり。われ今彌陀佛を禮したてまつり、またみ佛の如くならん」と。

また佛の光明を仰いでこの念ひをなせよ。「み佛よ、何卒施しの光を放つて貪りの罪を消し、戒の光を放つて戒律を破る罪を滅し、忍辱の光を放つて瞋恚の罪を消し、精進の光を放つて怠惰の罪を滅

し、禪定の光を放つて散亂の罪を消し、智慧の光を放つて愚かな惑ひの罪を滅して下さい」と。かやうに念ずるならば一日或は七日の間百千劫の長い間の煩惱の重い障りが消え失せ、しばらくの間も坐禪して定に入り、佛の白毫を念じても、九十六億那由他劫の長い間の生死の罪が消え失せるのである。或はまた一心に阿彌陀佛の*陀羅尼を念ぜよ。一度稱へれば四種の重罪や五種の逆罪が消え失せ、七度稱へればよく根本の罪が消え失せるのである。

また『心地觀經』には事物の裏に流れる道理についての懺悔を明して、『あらゆる罪惡の本性は眞如でありて、一切の罪は顚倒の妄念から起るのであるが、妄念は本來その實體がないからその罪惡もまた空なものであつて、過去、未來、現在に求めてもその實體を把握ことが出來ない。眞如の妙な道理は言語や思慮を超絶して、生ずることもなければ、滅することもなく、實在するものでもなければ、實在しないものでもなく、宇宙に遍滿して生滅のないものである。諸佛は本來同一體であるから、唯「もろ〳〵の佛がたよ、願はくば加護を垂れさせられて、よくすべての顚倒した心を滅し給へ、願くば私は早く眞理の源を悟つて速かに如來の無上道を證りたいものである」と念ぜよ』とあるが、抑もこの事物の裏に流れる道理についての懺悔は、人々の心の樂ひに順ふて修めるものであつて、あらゆる罪の本質は空なものであり、所有するといふことのないものであると觀ずるならば、これこそ眞に佛を念ずる念佛三昧であつて、その他の空三昧、無相三昧、無願三昧の三種の三昧もまたみなこの念佛三昧の中に攝入せられるのである。而してかやうな懺悔にすぐれた功德のあることは『心地觀經』に、

『在家の人は煩惱の因を招き
出家の人は清らかな戒を破る
もしよく法の如く懺悔せば
すべての煩惱は除かれむ

懺悔は三塗の獄を破り
またよく菩提の華を開く
懺悔は佛の圓かなる鏡を見

またよくさとりの果に至る』

こうたへるが如くである。

懺悔がかやうによくもろ〳〵の罪悪を滅するならば、『大智度論』に、『戒律の中の戒はよしや如何に微細があるにしても、懺悔すれば清淨になるが、十善戒を犯せばよしやその罪を懺悔しても三塗の苦しみを受ける罪は消え失せない』といひ、『十輪經』に『十悪罪をつくれば、すべての諸佛の救ふところとはならない』といへるは如何といふに、『觀經』には十聲の念佛がよく逆罪を滅し、『觀佛經』には佛の一の相好を念ずるならばよく十悪と五逆罪とを滅すといふことをいひ、『涅槃經』によれば阿闍世王が王を弑逆した罪を懺悔したことを明し、『般若經』には『經を誦み、これを解説するならば、よく欲界色界無色界の衆生を殺害した罪が消え失せて、悪世界に墮ちない』といひ、『華嚴經』には『普賢の願を誦すればその一念によく十悪や、五逆罪を滅する』とあるによつても、明かに眞の教は何れも懺悔によつて罪の消え失せることを説かせられたものなることが知られるのである。こまれ佛を念ずるものは夜晝六時に、もろ〳〵の罪を懺悔し、諸佛の説法を請ひ、あらゆる善事を隨ひすべきである。

この懺悔の文は一々こゝに列擧するの煩に堪えないが、要するに彌勒菩薩、『本願經』に

『われすべての過ちを悔いて
もろ〳〵の德をこゝ明し
諸佛に歸依し禮しまつり
願はくば無上の智慧を得しめ給へ』

といへる歌につきるのである。彌勒菩薩はもこ道を求めて、いろ〳〵こ人に施をせられたが、その功德によつて佛の道を得られたのではなくて、實にこの懺悔によつた無上の正眞道を得られたのである。

六、魔障の驅逐

日常に起る病患こいひ、種々の邪しまな見解こいひ、觀念の妨げこいひ、心の憂ひ、悲しみも、

歡び、憎み、苦しみ、強し弱しといひ、過ぎたる心も及ばない心も、一として正しい道を求める障碍とならぬことゝてはないが、たゞ念佛によつてのみよく驅逐せられるのである。この佛を念じてすべての魔障を對治するには、先づ言葉と行爲の上に表裏なしに一心に佛を念ずるならば、あらゆる諸佛の護念と念佛の威力とによつて、もろ〳〵の魔障を斥けることが出來る。されば『大般若經』に『よく言行が表裏相應するならば、諸佛に護念せられる』といひ、『般舟經』には『*夜叉と雖もよく念佛するものを打ち破ることが出來ないものである』といつてある。また、『止觀』の第八にいへるが如く、惡魔の世界も佛の世界も、ともにこれ平等であつて、一の相であり、二つあるものではないのに、衆生はこの道理を知らぬことから、佛の世界に迷ふと惡魔の世界を起し、菩提の中に煩惱を生ずるがこれは煩惱のそのまゝに菩提であると知るべきである。本來惡魔の世界とか、佛の世界とかは、まことの體のあらう筈もなく、まことのすがたもないのである。このあらゆる事物のまことの相のないことこそ、佛のまことの體であり、魔界そのまゝに佛身であり、また我身であつて、事物とその本體とはたゞ同一である。然るにもろ〳〵の衆生は妄想の夢がさめきらずに、まことの體相を解ることが出來ないで、是だの、非だのといふ想ひを起して五の惡世界に輪り廻るのである。されば限りない大きな慈悲の心を起して、佛のみすがたを觀想しても、空、無相無願の三昧に入つて、事物に執着をしないならば、魔障に妨げられることがないのである。故に『大般若經』には、『萬有はつまるところ空寂であると觀じて、よくあらゆる衆生を棄てないならば卽ち魔障を斥けることが出來る』といつてあるのである。

これを要するによく道を求める心を發して、身と口と意の所作をつゝしみ、深く心に信じてまごゝろこめて常に佛を念ずるならば、その願ひのまゝに必ず極樂淨土に生れることが出來るが、更にこれを助成する餘の諸の妙な行を具するに於てはいふまでもないことである。その故は、道を求める心については上に述べた通りであり、身と口と意の所作の重い惡事は、正しい道の障碍となるから、これをつゝしむべきである。淨土へ生れるにはだゞ念佛をもつて根本義とするが、その念佛には深く信ずる心と、まことゝ、常に佛を念ずるこの三の事柄が具はらねばならぬ。善業は淨土に生れたいと願ふ心によつて、轉じて往生の行となるから、これを隨願往生といふが、これを概括するならば身に口に意に惡業をつゝしむは*止善であり、佛のみ名を稱へて念ずるはこれ*行善であり、道を求める心と、願ひとはこの二種の善をたすけるものである。故にこれらの法を淨土へ生れるための肝要と

するのである。

第六章　日時を限りての念佛

日々に佛を念ずるこゝき努め勵むこゝが出來ないならば、一日二日、或は七日、十日、九十日ゝ日時を限つて專心に念佛の行を修むべきである、これに就て善導和尚は『觀念法門』に『般舟三昧經』を引いて次の如く云ふて居らるゝ。

『佛、跋陀和に告げたまふやう、「かゝる行法を持てば、卽ち三昧を得て、諸の佛が悉く現在その前に立ち給ふのを見るこゝが出來る。たゝへば出家のものでも、在家のものでも、教の如く戒律を完く持ち、獨り靜かに居て、西の方なる阿彌陀佛が十萬億の佛の刹のかなたなる須彌提こいへる御國に在すこゝを、一心になつて、一日一夜、若しくは七日七夜の間、念ずれば、七日を過ぎて後、これを見るであらう。それは恰も人が夢のうちに見る所、晝も、夜も、內も外も、暗い所でも、障礙のある所でも、何等の妨げもなく見得るやうなものである。跋陀和並びに諸弟子よ、常にかくの如く念ずれば、諸の境界が山も峰も何ひとつ覆ひ遮るものゝてなく、悉く押し開かれて見られるに相違ない。勿論それは奇しき天眼や、天耳や、神足や、そんなもので視たり、聽いたり、佛の刹へ到るも

のでもなければ、この世で死んで新しくそこへ生るゝのでもなく、たゞこゝに坐しながら、これを見奉るのである。だから諸弟子よ、この世界に於て阿彌陀佛を念ぜよ」と。跋陀和、よつて卽ち佛の勸めに從ひ、專ら念じたるに、まのあたり、これを見ることが出來た。そこで定中、問うていふやう、「什んな法を持てばこの國に生るゝことが出來るのか」と。阿彌陀佛、答へたまふやう、「この國に生れむと思ふならば、まさに我名を稱念して懈るこなかれ。然らば生るゝことが出來るであらう」と。時に佛のゝたまはく、「專ら念ずるからして往生することが出來る。常に尊き佛身の相好、きらやかに照らせる光明、併びなく端しく在して菩薩僧の中で法を說きたまへるのを念ぜよ。空理に昵んで形あるものを無するやうな考へになつてはならぬ。何故ならば形あるものを無せず、佛の色身を念ずるからこそ、かうした三昧を得ることが出來るのである』と。以上『般舟三昧經』の文、念佛三昧の法を明す。

三昧の道場に入らむとする時には先づ佛敎の掟に依つて、道場の莊嚴を整へ、尊像を安置し奉り、香湯を灑いで掃き淸めよ。若し佛堂がなくて寮舍のやうなものがあらば、それも美しく掃き灑いで、規定の如く一の佛像を持つて來て西の壁の處に安置せよ。行者等、月の一日から八日まで、八日から十五日まで、十五日から二十三日まで、二十三日から三十日まで一ヶ月の間を四回に割り、自ら家業の輕重なゞを考へて、その適當な時に念佛修行の道場に入り、一日乃至七日間、盡く新しい淨衣を着し、革履を穿き、食物は一日に一度の中食だけで、それも消化し易い粗飯に、その時節々々の野菜を少し添へた位のものを適度に食せよ。道場の中に於ては晝夜に心を凝らし、絕え間もなく專らに佛の相好を念ひ、念佛を稱へ、心こ聲こ打ち續けて、唯立つもあり、唯坐るもあり、何れにしても七日が間、眠らず、亦禮佛誦經もせず、珠數も繰らず、ひたすら合掌して、佛を念じ、念佛するばかりで、見佛の想を作せよ。「佛のゝたまはく阿彌陀佛の黃金輝く御身の光明きらやかに照らし、比ひもあらぬ高貴なる御姿を心眼に想ひ泛べ、立つて居れば立つたまゝで一萬二萬、坐つて居れば坐つたまゝで一萬二萬の念佛を稱へよ。道場內に於ては、頭を交へて囁き合つてはならぬ」と。晝夜に或は三時或は六時　もろ〳〵の佛、賢聖、天地の神々に向つて己が一生涯に犯した種々の罪を打ち出して懺悔せよ。懺悔し竟つたならば、また還つて規定の如く念佛せよ。その時、見る所の境界、輙く說くこゝが出來ぬ。善きものは見て自ら知るべく、惡しく見られないものは懺悔すべきである。また願をかけて酒肉五辛の類を手に捉ず、口に喫はざることを誓ひ、若しこの願に違はゞ、身體や、口に惡瘡が出來るやうにこ願ぜよ。更に願を掛けて、『阿彌陀經』を十萬遍讀むここ、日每に一萬遍の念佛、力の多

少に任せて十五遍、二十遍、三十遍の誦經をすることを誓ひ、淨土に生れて佛の救濟に接することを願ぜよ。

又、もろ〳〵の行者がこの世で日夜に絶え間なく念佛し、淨土の聖衆を稱揚禮讃し、三昧道場に在る外、日毎に一萬遍の念佛を生涯續けて修むれば、彌陀をはじめ、諸〻の聖者方の護念を蒙つて罪消え、長命して平安を得るであらう。かういふ因緣がいろ〳〵『譬喩經』、『惟無三昧經』、『淨度三昧經』などに說いてある。

『觀佛經』にいふてある。『若し諸〻の僧尼、或は男女のものが五逆や、謗法や、種々の重き罪を犯したやうな場合に、深く懺悔して、日夜息むことなく、身を地に投げて、太山の崩るゝが如く泣き號び涙を流して、佛に向ひ、掌を合せ、その白毫相の光を念ずること、一日乃至七日にわたつて行へば、前の如き罪が輕めらるゝであらう。但し白毫相を觀じても、わが心暗くして見えないものは、堂の中へ入つて、一日から三日に至るまで合掌し、泣いてこれを觀ぜよ』と。巳上『觀念法門』略抄

『大般若經』の五百六十八にも、七日間身を淨めて新しい衣を着、香華を手向けて一心に佛の功德と不思議な力のあらたかさを念ずれば、佛はその身を現はされて、願ひを滿足させられることを明し、『賢護經』にもまた七日の行を說き、迦才の『淨土論』には道綽禪師の言葉を引用して一心不亂に七日の間、佛を念ずれば百萬遍の念佛が稱へられて、淨土に生れることが出來るといひ、その他『大集經』『藥師經』、『小阿彌陀經』には皆明かに七日の念佛を勸めさせられてあるのである。

九十日を一期としてのつとめは、『止觀』の第二に『般舟三昧經』の常行三昧について說示してあるのである。常行とは佛立と譯して、佛のあらたかな力と、禪定の力と、つとめる人の誓ひの功德の力とによつて、寂靜の境涯へ入つて眼前に澄みきつた天空の星を見るがやうに、十方世界の現在の佛を見奉るから佛立三昧といふのである。

この三昧に入るには惡友、痴人、親屬を遠ざけ、鄕里を遠く離れて獨りゐて他人に衣食を求めず、いつも乞食して特別に他の招待を受けず、道場を莊嚴して供物をそなへ、道場の出入にはその度毎に衣服を更へて、ひたすらに阿彌陀佛の立像の周圍を旋り、九十日を一期として、障碍のあるときには內外の戒律に精通した師匠について、よくその教を受け、その師匠から受ける三昧に於ては、世尊を見奉るがやうに思ふて師匠を供養し、これに師事して母が子を養ふがやうによく師匠の身を護り、よしやわが身體は朽ちてもこの三昧が成就しないならば、決して休息まないとの誓を發して努める

ならば、必ず三昧に成就して、これを壞すものもなければ、その努力こそ誇る智慧こそにはよく及ぶものがないのである。常に善い師匠こそ俱に九十日の間、世事を思はず、座食こそ用便の外は臥床して休息することを絶ち、人のために經を說いても衣食のためにしてはならぬ。されば『十住毘婆娑論』の歌にも、

『善き友に親しみて
つとめはげみて怠らず
智慧甚だ堅くして
信力妄りに動かざれ』

とあるのである。

また九十日の間、身に常に行ふて、やすむことなく口に阿彌陀佛のみ名をとなへてやすむことなく、心に阿彌陀佛を念じてやすむことなく、或は聲につれて心に彌陀を念ひ浮べ、或は心に念ひ浮べて口にみ名をとなへて、聲と心とが相續いてしばらくも休むときがあつてはならぬ。彌陀のみ名を稱へるならば、その功德は十方諸佛のみ名を稱へるにも等しいから、一歩々々にたゞ彌陀のみ名を稱へて、心に彌陀を念ずべきである。

ついで九十日の間、意に常に西方の阿彌陀佛を念ぜよ。こゝを去ること十萬億の佛の國で、寶のしきつめられた大地に、寶の池に寶の樹林、寶の法堂があつて、もろ〳〵の菩薩の中央に坐つて法を說きたまへる佛の三十二相を、足の千輻輪から頂に、頂から足の千輻輪にと、順逆に觀想して自身もまたかやうな微妙な佛身を得たいと願ふべきである。また佛は心を以てしても得られなければ、形を以てしても得られない。そのわけは心の上に求めれば佛には心はなく、形の上に求めれば佛には形がないから心を以てしても、形を以てしても證りを求めることが出來ない。佛は身を以てしても得られなければ、口を以てしても得られないし、將又智慧を以てしても得られないのである。智慧も求めて得られなければ、我も求めて得られない。萬有は本來所有なく、迷ひの根源を絶してゐるものである。かの七寶の宮殿に歡樂に耽るの夢も、醒めてみれば何等の形もなく、飢て大きな沼の邊りに行つて、美味を得るの夢も醒めては空腹であるが如くに、萬有はみな夢幻のやうなものであると知つて、

佛を念じてやすむことがないならば、必ず阿彌陀佛の國に生れるのである。これを如想念と名けるのである。また諸の寶を瑠璃の上に置けばその影が中に現はれるが、種々の光を放射する鏡の上の影は、外部から來るものでもなければ、中から生ずるものでもない。鏡が清いから影が現れるので、もし佛を念ずる人にして清淨であるならば、佛を見奉らうと欲へば、直ちに現れさせられ、佛に問ひ奉れば直ちに答へさせられるのである。

また佛を念じてその念ずる心に佛を見奉らないことはない。わが心は佛となり、心自ら心を見るが、これ佛身を見奉るのである。この佛身はわが心であるのである。これを心に求めてみれば心自ら心を知らず、知らぬ心が心の佛をあらはして、現れ給ふた佛を心が發見したのは不思議である。されば心に浮ぶものがあるならば、みな悉く愚癡のしわざであつて、心に想ひのないことが詐りであるといふても、これといふて指し示すべきものもなければ、よしや念ひがあつても、念ひが起れば、その念ひこそ所有のない空である。

さればもし人あつて大海のやうな智慧を得て、別に神變不思議な力によることなしに、居ながら、諸の佛を見奉つて、その教法を聞いてよくたもたうと欲ふならば、常にこの三昧を行ぜよ、この三昧の功德は他にすぐれて比ひがない。けにこの三昧は諸の佛がたの母であり、佛の眼であり、すべての佛がたは廣大な佛のはからひを父とし、限りのない大悲を母として現れさせられたものであつてよしや大千世界の大地の草木を微塵に碎いて、その一の塵を三千大千世界として、その世界に充滿する寶を施すやうな功德と雖も、この三昧を聞いて驚かず、畏れることのない功德には遙かに及ばないのである。ましてこの三昧を信じてたもち、讀誦し、人のために說き、心を靜めてこの三昧を修するならば、その功德は量りなく、邊りがないのである。『十住毘婆娑論』には『毒龍惡蛇病魔にも侵されることもなければ天龍八部を初め諸の佛がたに護られ、讃め嘆へられ、かやうな三昧を聞いて隨喜するものまでが廣大な功德にあづかれるので、諸佛菩薩はみな隨喜せられるのである。もしかやうな三昧の法を聞いてこれを修せないならば、量り知られぬ寶を失ふて、神々のいたく憂ひ悲しまれるこころである。』

次に死際の用意については『四分律』の瞻病送終の篇に、『祇園精舍の無常院では病人があればこゝに移し、堂の內に阿彌陀佛の立像を安置して、左手に佛像の五色の幡の端をこらして、佛に隨ふて淨土へ往生するの想ひを起さしめ、看病するものは香を焚き、華を散らして病人を莊嚴する』といふことを

いひ、善導和尚は『觀念法門』に『行者、若し病を得、又は病がなくても命終らむとする時、上の念佛三昧の法によりて、正しき身心をこゝのへ、面を西方に向はしめ、心を專らに注いで阿彌陀佛を想ひ泛べ見、念佛を稱へ、心口相應して絶ゆることなく、必定往生すべく、華の臺に打ち乘れる聖衆の來り迎へたまふことを想念せよ。その時、病人若しも前の境界が見えたならば、卽ち看病せる人に向つてその話をすべく、これを聞けるものはそがいふ通りに記錄せよ。又若しもその話が出來ないやうだつたならば、看病せる人が必ず屢病人にその什んな境界を見るかを問け。若しもその際、罪相を說けるならば、傍の人が、ために念佛し、同じく懺悔して罪の滅ぶやうな助けをせよ。かくて罪滅ぶることを得、華臺の聖衆が念のまゝに現前したまふならば、それも前に準じて書き記すことゝせよ。又行者等、親屬のものが集まつて來て看病する際には酒肉五辛を食せる人をその仲間に入れてはならぬし、縱令若しそんな人があつても、決してその人を病人の直ぐ近くに置いてはならぬ。萬一さういふことをすれば正念を失ひ、ために鬼神入り亂れ來つて、病人は狂死し、遂に三惡道に墮ち込んで行くであらう。願はくば行者等、好く自ら謹慎みて、佛の敎を守り、俱に同じく見佛の因緣となることを努め修めよ』といふて居られる。

又、道綽禪師は『安樂集』に『十念の念佛といへば容易なことのやうであるが、實はさうでない。凡夫の心は野に放たれた馬の如く、森を驅けめぐる猿の如く、常に動き、常に亂れて暫らくも停まらないものである。この心は臨終まで續くわけである。それ故、平生の時から信心を發して堅き念佛の信念をたてねばならぬ。樹を伐り仆す時は必ずその傾いた方へ倒れる。無常の刀風來り、百千　痛苦、一時にこの身に湊る時、平生より心懸けしものにあらずしてどうしやう。志を同じうするものは御互に勵ましあつて彌陀の名號を稱へねばならぬ』といふて居られる。

一體こゝにいふ所の十念とは一心に十度南無阿彌陀佛とゝなへることである。されば善き友や同朋の心あるものは佛の敎に順ふて、衆生を利益し、緣を結び、同朋の病床を見舞ふて念佛を勸むべきである。

他人に說き勸めるにはそれ〴〵その人によつて違ふが、今私はこゝに私自身のためにするならば、私はこれまでに世俗のあらゆる希望をすてゝ、淨土往生のつとめを修め、臨終のときの十聲の念佛を深く心に期してゐるが、病床に臥しては目を閉ぢ、掌を合して一心にたゞ佛の相好のみを見奉り、佛のみ聲をのみ聞き奉り、佛の正しい敎法をのみ說いて、往生のことだけを心に念ひ、命が終れば

蓮の臺の上に坐つて、彌陀の後に從ふて聖者の群にこりまかれて、十萬億の國土を通り過ぎるときにも、他の世界を思ふことなく、極樂淨土の七寶の池の中に至つて初めて目をあけて合掌して彌陀の尊い御容を見奉り、彌陀の說法を聞き、諸の佛がたの功德の香を聞ぎ、敎の悅びの味ひをなめ、聖者の群を禮拜して普賢の願望と修行とに入りたいものである。さればこれについて十種の一心に念ずべきことである。

一、淨土に生れたいと願ふものは先づ眞實の智慧を發して生死の由來を知るべきである。『大圓覺經』の歌に、

『すべてもろ〳〵の衆生の
無明は無始よりになへども
みなこと〴〵くみ佛の
まごかの覺りよりおこる』

と。元來生死はそのまゝに涅槃であり、煩惱がそのまゝに諦りであつて、圓かに何らの障碍もなければ、差別のないものである。然るに心の妄念から、生死の世界に踏み込んでからこのかた、無明の病のために盲目となつて、長い間眞の道を忘れてしまつたのである。萬有は本來寂滅なものであつて何等本性のあるものではなく、たゞ心に隨ふて轉り變るに過ぎないものであると知つて、佛と敎法と僧との三の寶を念じて正しい道について、一心にあらゆる諸の佛がたを念ずべきである。

二、萬有の本質は平等ではあるけれども、假りの存在を離れるものではない。彌陀佛の仰せには、萬有の本質はすべて空無であり、無我であると諦るとも、專すらに佛となるの道を求めよ、さすれば必ずかやうな國土が建設せられるのである。故に淨土に生れるには、まづあらゆる苦しみの根源であるこの世界を厭へよ。今この娑婆世界は惡業によつて報いられたもので、あらゆる苦しみの本源である。生と老と、病と死とは際涯なく輪り廻つて、三の惡世界の繫縛には一として樂しむべきものがない。もし今にして厭はないならば、いつの時か、苦海の流轉を免れることが出來やうや。然も阿彌陀佛には不思議なあらたかな力がましまして、もし一心に名をとなへるならば、その一聲々々に八十億劫といふ長い間生死の苦海に浮きつ沈みつする重い罪惡が消え失せるのである。されば一心にかの佛を念

じてこの苦海を離れて、「願はくば阿彌陀佛よ、必ず私を濟ひたまへ、南無阿彌陀佛」と念ずべきである。

三、西方極樂世界には苦しみ惱みはなく、一度蓮の臺に乘れば永く生死の苦海をはなれて、眼には彌陀の尊いみ容を見奉り、耳には微妙な佛の教を聞いて、あらゆる倫樂を具へてゐるが、もし人あつて臨終に十度彌陀佛を念ずるならば、かの安樂世界に生れるに間違ひはないのである。今受け難い人身を受けて、値ひがたい佛の敎に遇ふことの出來た私の悅びは、丁度眼の一つしかない龜が浮き木の孔に出値ふたがやうであるが、このときにこそ淨土に生れないならば、却つて三塗八難の苦しみのどん底に墮ちて、敎法を聞くことさへ出來ないから、まして淨土に生れることは思ひもよらぬことである。されば一心にかの佛のみ名をとなへて、「必ず私を手引きして極樂淨土に生れさして下さい」と願ふべきである。南無阿彌陀佛

四、阿彌陀佛の誓ひに「若し私が佛になる時、あらゆる衆生が私の名まへを聞いて、私の國を慕ひ、念佛を稱へ、その功力によつて一心に私の國に生れたいと思ふて、その願ひが果されないならば、私は佛にはなりませぬ」と仰せられたやうに、私はたゞ一心に善根をつんで極樂淨土に生れるつとめを修めてこれを淨土へふりむけて、間違ひなく淨土に生れたいと願ふべきである。南無阿彌陀佛

五、佛の本願に「若し私が佛になる時、あらゆる衆生が菩提を求むる心を發して、もろ〳〵の功德を修め、積んだ功德をたよりとして、一心に私の國に生れやうと願ふ。さういふ人の命終る時に臨んで、多くの場合、私が聖者達と共に、その人の前に現れなかつたならば、私は佛にはなりませぬ」と仰せられたやうに、先きに已に道を求める心を發して、もろ〳〵の善根を極樂へふりむけて來たが、今かさねて道を求める心を發して佛を念じて、私はあらゆる衆生を利益するために、今日間違ひなく淨土へ生れやうと願ふべきである。南無阿彌陀佛

六、本來自身は淨土に生れるの因を具へてゐるが、更に彌陀佛を念じてその因を增盛せしむべきである。かの佛は量り知られぬ功德を具へさせられて、十方世界の恒河の沙の數程の諸佛がたが不斷にかの佛の功德を讃め嘆へさせられて、量り知られぬ劫の長い間かゝつても說きつくすことが出來ないのである。されば一心にかの佛の功德に歸依して、一念の中に彌陀佛のあらゆる德に歸依し奉るの念ひをなすべきである。南無阿彌陀佛

七、かの佛の眞金色のみ容はいともあらたかに金山王のやうであつて量り知られぬ相好が飾られ、

眉の間の白毫は右に旋りうねつて放射し給ふ七百五倶胝六百萬の光明は、千億の日月のやうに赫き給ふが、これはかの佛の清淨なあらゆる德のいたすところで、深い智慧から流れ出るものである。されば、しばらくでもこの相好を心に念ひ浮べるものは、九十六億那由他の長い間生死の苦海に浮きつ沈みつ重い罪が消え失せるのである。故にかの白毫相の光が私のもろ〳〵の罪業を滅し給へこの念ひをなすべきである。南無阿彌陀佛

八、かの佛の白毫相の光明は常に十方世界の佛を念ずる衆生を照らして、その光の中に攝めこられてすてさせられることがない。『華嚴經』の歌に

『見佛の光明は
　遍く命終るものを照らし
念佛の行者は佛を見まつりて
　必ず佛のみ前に至らむ』

こ。されば彌陀佛は清らかな光明を放射して、遙かにわが心を照らし給ひ、正に命の終るその時には自分の周圍こ、自身こ、これから生れやうこする世界に對するの三種の愛着を轉じて、念佛三昧を成しこけ、極樂淨土へ生れさせ給へこ願ふべきである。南無阿彌陀佛

九、彌陀如來はたゞ光明を以て淨土から遙かに照らし給ふばかりでなく、自ら觀世音や、大勢至こ一緒にその人の前に現はれさせられて護らせられる。たこへば父母が病める子を殊に哀れむがやうに、生死の海に入つて大光明を放つてもろ〳〵の聖者の群こ一緒にその人の前に、現れて護られるのである。だからよしや惑ひが障碍こなつて見奉ることが出來ないにしても、佛の大きな慈悲の誓ひを決して疑ふてはならぬ。必ずこの室に入つてこられるのである。されば「願はくばみ佛よ、大光明を放つてお迎へ下されて極樂へ生れさせ給へ」こ願ふべきである。もし病人の氣力が次第に衰へたならば佛は觀世音大勢至を初め量り知られぬ聖者の群こ一緒に迎へさせられて、寶の蓮の臺をさゝげて佛の子を引きこり給ふであらうこ告ぐべきである。

一〇、いよ〳〵命の終らうこするこきに臨んでは、いまこそこれ最後のこきであるこ知るや否や、命終らうこするこきに臨んでの一念は百年のつこめにもまして尊くれて居り、もしこの最後の瞬間が

すぎれば、正しく生れるこころが定まるのである。よつてこの時に於て一心に佛を念じて、西方極樂淨土の微妙な八種の功德のある池の中の七寶の蓮華の臺の上に生るべきで、如來の誓ひには寸毫も謬りがないから、かならず我を手引きし給へと念ずべきである。南無阿彌陀佛

かやうに看護するものは病人の樣子を伺ふて、病人の心に應じて聞かせ、たゞこの十種のことのなかの一つのことを最後の念ひとして、言葉に手加減して不安な思ひをさせてはならぬことである。

これについて『觀佛三昧經』に佛は阿難に告げさせられて、『阿難よ、もし衆生あつて父を殺し、母を殺し、六親を罵り辱かしめるやうな罪を犯したものは、命の終るときに銅の狗が口を張つて火車を化して寶の絹傘のついた黃金の車となし、すべての火焰が玉女と化してあらはれる。罪人これを見て心に歡んで黃金の車に乘りたいと念ふが、刀風が吹き起ると寒さに堪へられないで、火に燒かれたいと思ふ中に命が終るのである。すると束の間に黃金の車は火の車と化し、玉女はいつしか獄卒となつて鐵の斧を振つてその身を截るのである』といはれて居る。かやうに黃金の車が火車と化し、玉女大蓮華の迎へが大火焰と化して獄卒が鐵の斧で身を截ることを想へば、むしろ先述の蓮華もまた火車の來現ではなからうかといふに、懷感禪師は『群疑論』にこれを釋かせられて、『罪を犯したものがその罪を悔いることもなく、善き友の敎に遇はないから、火車を見て蓮華と想ふのであるが、今はよく善い友に遇ふて一心にまごゝろこめて佛を念ずるから、長い間の罪が消え失せて、寶の池の中の華の御迎へを感得し、佛を念ずるから、その功力によつて、身も心も安らかに、惡がみなことゝく消え失せて、たゞ聖者がたの群を見、奚香を聞くのである。『觀經』の中に「善男子を稱めて、おん身は佛の名をとなへたがために、もろ〳〵の罪がみな消え失せた。われは今來ておん身を淨土へ迎へるのであらう」とあるのは明かに滅罪の言葉であり、またそのときにかの佛が化現された佛をお遣はしなされて、その人の前に至らしめるとあるから、化佛であることも明かである。これによつても蓮華の來迎は『觀佛三昧經』の火焰の來現でないことは明かである。』されば看病のものはよくこの相を會得して、度々病人の心の上を氣遣ふてたづね、前の用意によつて種々に敎化すべきである。

第七章　念佛の利益

一　滅罪生善

『觀佛經』に『しばらくの間も一心不亂に佛の眉間の白毫を念ずるならば、佛の相好を見奉ても、見奉らなくとも、よく九十六億那由他劫の長い間浮つ沈みつする生死の罪が消え失せ、白毫相を聞いて心に疑ひなく信受するならば、また八十億劫の長い間、苦海に輪り廻る生死の罪が除かれ、佛の入滅の後も三昧に入つて佛の歩ませられる相を想ひ浮べるものは千劫の極めて重い惡業が除かれ、佛像を造り、佛の御跡を畫き、白毫に妙な糸を頗梨珠を安いて、佛の白毫の相をもろ〳〵の衆生に知らしめ、この相を拜んで心に歡ぶものは、百億那由他劫の長い間の生死の罪が消え失せ、佛を見奉つても邪しまな見解のために信ぜなかつた老女も、佛の方便によつて僅かにそのみ相を拜んだゝけで八十萬億劫の長い間、流轉すべき生死の罪が消え失せたが、まして佛を敬ひ、禮拜するに於てはいふまでもないことである。また敎法を謗り五逆罪を犯し、四種の重罪を犯し、僧のもちものを偸み、比丘尼を姦し、八戒齋を破り、もろ〳〵の惡事をこれこゝゝして邪しまな見解に墮ちたのも、もしよく一心に晝夜不斷に如來の一の相好を觀想するものは、もろ〳〵の罪障りがこゝ〳〵く消え失せ、佛に歸依してみ名をとなへるものも百千劫の煩惱の重い障が除かれるが、まして心を正して一心に佛を念ずるものゝ罪の消え失せることはいふまでもないことである』といふてある。

『寶積經』の第五に『種々色といふ寶の珠は大海の中にあつてもよく珠火の力で注ぎ込む水を消滅せしめるがやうに、如來もまた菩提の智火の力によつてよくもろ〳〵の衆生の煩惱を滅し給ひ、如來のみ名の功德を稱めたゝへて說けば、あらゆる衆生は黑闇を離れて次第にもろ〳〵の煩惱を燒きつくすのである』といひ。『遺摩尼經』には『數千億劫の長い間愛欲の雲に掩はれて量り知られぬ罪をつくるとも、佛の敎法を聞いて一度でも善事を念ずるならば、悉くその罪は消え失せる』といふてある。念佛にはかやうにもろ〳〵の罪を消滅せしめる力があるが、更に『大悲經』には『三千大千世界に充ち滿てるもろ〳〵の聖者を敬ふて供養する功德もみ名を稱へて佛を念ずる功德の千分の一にも及ばない』といひ、『觀佛經』には佛が阿難に告げて、『阿難よ、私が涅槃に入つてから後に、もろ〳〵の神々や人々が私のみ名をとなへ、また南無諸佛とこなへるならば、量り知られぬ福德が得られるであらう。まして心にかけてもろ〳〵の佛を念ずるものにすべての障碍が消え失せないといふことがあらうか』といはれて

居る。よつて念佛には罪を消滅する上に、更にもろ〳〵の功德を生ずることが知られるのである。

二　神々の護持

『護身呪經』には、『萬億の恒河の沙の數ほどの神々が、佛と敎法と僧との三寶に歸依したものを護り給ふ』といひ、『般舟經』には、『この三昧をたもつものは大火と雖も燒くことも出來なければ、水も溺らすことも出來ず、毒蛇、龍神、惡鬼と雖もこの人を害することも出來なければ、もろ〳〵の神々がこぞつてその德をほめたゝへさせられる』といふてある。『十二佛名經』の歌にも

『人もし佛のみ名をたもてば
もろ〳〵の魔や、*波旬といへども
起居振舞のなべてのこころ
遂にそのたよりを得ざらむ』

であるのである。

三　現身に見佛

『文珠般若經』に『もし人あつて*一行三昧に入らうと欲ふならば、閑靜なこころを選んで心を靜め、一心に一佛に心をかけて、ひたすらに佛のみ名を稱へ、一聲〳〵に相續いて絶えることがないならばよく過去現在未來の諸の佛を見奉る』といひ、善導和尚はこの一行三昧に、一佛を念ずることは衆生は罪の障りが重くて心が亂れてゐて、觀念が成就し難いから、釋尊は衆生をあはれむ慈悲の心から直ちに一心にみ名を稱へよと勸めさせられたものであると釋かれて居る。また『般舟經』には、『この般舟三昧のあらたかな力をたもつものは、夢の中にも經卷を得て、その經を誦む聲を聞き、佛を見奉ることであらう。されば佛は跋陀和に告げて「跋陀和よ、よしや一劫をすぎてもこの三昧をたもつものゝ功德を說きつくすことが出來ない」といはれた』といふてある。更に同經の歌にも

『阿彌陀佛國の菩薩達

百千の佛を見るがごとく
この三昧を得む人も
數かぎりなき佛を見む

三昧を口に誦するものは
百千の佛を見奉る
たとひ命の終りにも
懼るゝこころはさらになし』

といひ、『十二佛名經』の歌にも、

『人もしまことのこゝろもて
七日、御名をばとなふれば

清淨の眼をたもち得て
無量の佛をみまつらむ』

とあるによつても、現身に佛を見奉るこの利益は明かである。

四　未來の勝益

念佛にはかやうに現身に佛を見奉るのみでなく、命終れば其世界の苦しみを受けることもなく、淨土に生れて種々の利益を受けるのである。『華嚴經』の歌に、

『佛のさゝやけき功德を念じ
一念にも仰ぎまつりなば
惡趣の怖畏永く閉ぢ
智慧の眼は開かれむ』

こいひ、『般舟經』の歌にも、

『この三昧を學ばんに
人もしいのち終るとも
三の惡趣を免れて
世々の宿命明けし』

こいひ、『觀佛經』に、『もし衆生あつて一度でも佛身の上に述べたやうな功德や相好、光明を聞くならば、億々劫にも惡世界に墮ちることなく、常に正しい見解を得て、つとめ勵んでしばらくも息むことがない。かやうに佛のみ名を聞くだけでもかゝる福德が得られるが、心をかけて一心に佛の三昧を觀ずるに於ては尙更のことである』こいつてある。『安樂集』には『大集經』を引用して、『佛が世に出でて衆生を敎化する方法を分類すれば四種となる。(一)言葉を以て法を說き與へて(經典)、衆生を敎化するもの、(二)佛はその身に無量の尊嚴なる威容を具へたまひ(光明)、衆生はその威嚴に打たれこれを專心に觀察することによつて救ひを受ける。卽ち身體そのものによつての敎化である。(三)凡人には不可思議なる種々の奇跡を示して(神通)、衆生を敎化する。卽ち意の作用なる神通力によるもの。(四)衆生が佛の名に含まるゝ救濟精神に觸れて專心に稱念することによりて、障を除き益を得て、佛の前に生れるもの。卽ちこれ名號による敎化である』こいひ、『十二佛名經』の歌には、

『人もし佛のみ名をたもち
怯弱の心さらになく
智慧ありて諂曲なかりせば
常に諸佛の前にあらん

人もし佛のみ名をたもてば
七寶の華の中に生れん

千億の華葉むらがりて
威光あまねく具はらん』

こいひ、『觀佛經』には、『もしよく一心に心をかけて端坐して佛のすがたを觀想するならば、この人の心は佛の心と何等異なるところなく、よしや煩惱の雲に掩はれてゐても、もろ〳〵の惡のために蔽はれることなく、未來の世には教の雨をふらすことであらう』といつてある。また『大集念佛三昧經』には、『かやうな念佛三昧は萬有を總攝するものであつて、聲聞や緣覺の知る境涯ではない。さればしばらくでもこの三昧の法を聞くものがあるならば、その人は未來には必ず佛となるに疑ひはなく、よくこの三昧の名を耳にすれば、よしや讀誦し、受持し、修習し解脫することが出來なくとも、この人は次第に菩提を得ることであらう』といひ、『大般若經』には、『親しく佛に仕へる人であるならば、必ず生死の苦海をはなれて涅槃のかの岸に到達することができ、香華を手向けて佛に供養し奉つても必ず涅槃の境涯に入り、一度南無佛陀、大慈悲者と稱へたゞけでも、この人々は生死の苦海の際涯をきはめつくして、その限りない善根功德によつて天上の神々の間に生れて、富と樂とを受け、遂に

は涅槃を得るのである』といひ、『十二佛名經』の歌には

『人もし佛のみ名をたもてば
世々の生れむこころにて
通力をもて虛空に遊び
邊りなき國に至りなむ
諸の佛を見まつりて
いと深き義を問ひなむに
佛は妙なる法を說き
菩提の豫告を與へまさむ』

といひ、『法華經』の歌にも、

『人もし散り亂れし心もて
堂宇の中に入りなむも
一度南無佛と稱ふれば
みな悉くさとり得む』

といつてある。『大悲經』には『世尊、阿難に告げて、「阿難よ、もし衆生あつて佛の名を聞くものがあるならば、この人は必ず涅槃の境に入ることが出來るであらう」といはれた』とあり、『華嚴經』の法幢菩薩の歌には、

『もしもろ〳〵の衆生ありて
菩提の心を發さぬも
一度佛の名を聞かば
必ず菩提を開くべし』

といつてある。かやうにたゞ佛のみ名を聞くだけでも、かゝるすぐれた利益があるが、まして佛の相好の功德を觀想し、香華を手向け、供物を具へ、命のあらん限りつとめはげむならば、決してその功德に虛りはないのである。これによつても佛の教に遇ふて佛のみ名を聞くことは、淺からぬ緣であることが思ひ知られるのである。されば『華嚴經』の眞實菩薩の歌に

『たとひ獄苦を受くるとも
諸佛のみ名を聞けよかし
量りなき樂みに打ち耽り
佛のみ名をおとさゞれ』

とあるのである。

以上の滅罪と生善から、諸佛を念ずるの利益を明すのであるが、前に引用した『觀佛三昧經』は釋尊を主とするものであり、『般舟經』は彌陀を主とする佛であるけれども、何れもすべての諸佛の上に通ずるものである。また『念佛三昧經』は明かに過去未來現在の三世と十方世界の諸佛に通じて說き給ふものである。

然るに『觀佛經』に佛を觀想する人の心は佛の心のやうであつて、何等佛と異なることがないといひ、また『觀經』には、世尊は阿難につけて『諸佛如來はこれ法界の身であつて、あらゆる衆生の心想のうちにそれ自らを現はされる。それ故に汝等、心に佛を想ひ浮べまつるとき、この心が直ぐに三十二の相好と八十のこまかな相好を圓かに具へさせられる佛の御すがたである。この心が取りも直さず佛となるのである。この心を離れて佛は在さぬから、この心がこれ佛である。まことにかの海のやうに廣い智慧の佛たちは、衆生の心想の世界から生れて來るのである』といふは如何といふに、智光の『往生論』の疏に、『衆生の心の上に佛を觀想するときに佛の相好がことゞく衆生の心の上に顯れてくるから、佛の相好がそのまゝに心の世界で、心がよく佛となるから、その心が佛となるといふので、心の外に佛がないから、その心が卽ち佛といふのである。譬へば火は木から出て木を燒くが、火と燒かれる木とは離れることができない。木を離れないで火がよく木を燒くから、木は火に燒かれて木は卽ち火となるがやうである』といつて解釋してある。更に『大集經』によるに、『佛を念ずるものはこの念ひをなすであらう。卽ち心の上に現はれたもろ〳〵の佛はどこから來て、どこに去るといふこともなく、たゞわが心から現はれたものである。三つの世界に受ける身體はみな、唯心の作用であるから、欲望の多少はみな心のまゝに現はれてくる。諸佛如來は卽ちわが心である。そのわけは心に隨ふて見るから心は卽ちわが身であり、我は卽ち虛空であるからこそ虛空を見たいと欲ふ心に隨ふて量り知られぬ佛を觀ずるのである。佛を見るといふも、佛を知るといふもみなわが心から顯れるものであるから眞如法性がそのまゝに虛空であり、虛空といふその本質もまたこれ空なものである』とあるが、この文意は『觀經』と同一なものであり、智光の解釋と何等相違するところがない。

かやうに心が佛となるの道理を觀ずればまた過去現在未來のあらゆる佛の敎法が、わが心の上にあり〳〵と現れて、よしやこの道理を觀ずることの出來ないものでも、一度でもかやうな勝れた道理を聞けば三塗の苦しみから解放せられるのである。されば『華嚴經』の如來林菩薩の歌に

『人もし過去未來現在の
もろ〳〵の佛を知らんには
かくのごとくに觀ずべし
心よくもろ〳〵の佛をつくること』

こいひ、『華嚴傳』によるに、往昔王氏なるものが戒行を守るこいふこともなく、善根を修めるこいふこともなかつたが、病死して獄卒にひかれて地獄の門前に至つたときに、地藏菩薩が現はれて上の歌を授け、「おんみよ、この歌を口ずさむならば必ず地獄の苦しみを排ひ去ることができる」こいつて姿をかき消されたが、やがて王氏は閻魔王の前でこの歌を口ずさんで、遂に放免せられ、その歌の聲を聞いた地獄の苦しみを受けてゐる罪人はみな悉く解脱を得たこいふことである。

五　彌陀を念ずるの利益

更に佛を念ずるもの、心を決定させるために、特に阿彌陀佛を念ずるの利益について示せば、『觀經』の佛を觀想する觀法に、『この觀法を成就したならば、無量億劫の間の生死の罪が除かれて、なほこの世に於て念佛三昧を得るのである』こいひ。また『たゞ單に阿彌陀佛及び觀世音、大勢至の二菩薩のみ名を聞くだけでも、それによつて無量劫の間の生死の罪が除かれるが、ましてみ名を信じて、心に憶ひつゞけるに於ては、今更説くまでもないことである』こいひ。また『たゞ假りの佛の像を想ひ浮べてさへも、量り知られぬ福が得られるのだから、まして況んや淨土の無量壽佛の何ひとつ不足なく具へさせられる身相を想ひ浮べるに於てはいふまでもないことである』こいひ。『阿彌陀思惟經』に、『よしや轉輪王が千萬年の長い間四天下に充滿する七寶を十方世界の諸佛に供養するこしても、その功德は在家出家の男女を問はず、たゞ一念でも阿彌陀佛を念ずるの功德に遙かに及ばない』こあるがやうに、阿彌陀佛を念ずるものに重罪を滅し、善根を生ずるの利益があるのである。

更に諸佛諸菩薩に護持せられるについては、『稱讃淨土經』には、『善き男女あつて無量壽佛の極樂世界の功德莊嚴を觀じて、淨土に生れたいこの願ひを發すならば、十方世界の恒河の沙の數ほどの諸佛世尊は護念せられ、教説のやうにつこめるものはみな心に退轉することなくかの無量壽佛の極樂世

界に生れることができる』といひ。『觀經』には『光明を以て遍く十方世界を照らして、佛を念ずる衆生をその光明の中に悉く攝めとつてすてさせられぬのである』といひ。また『無量壽佛の無數の化身が觀世音、大勢至の二菩薩と俱に常にその身邊を護らせられるのである』といひ。『十往生經』には釋尊は阿彌陀佛の功德、國土の莊嚴のさまを說き訖つて、『人々よ、この經を誦み、この經を弘め、この經を敬ひ、この經を信じて謗らず、よくこの經を供養するならば、その功德によつて、私は今日から二十五菩薩をして守らしめ、病なく惱みなく、惡鬼神をして近寄らしめないであらう』といひ。『大無量壽經』の佛の誓ひには、『あらゆる世界の人達が私の名號を聞いて、全身を地に投げ、頭を地につけて禮拜し、よろこび信じて、淨土に往生する行を修めんに、諸天や、世の人がこれを敬はないことはないでありませう。もしそうでなかつたならば、私は佛にはなりませぬ』とあるのである。更に現身に佛を見奉るの利益については『大集經』の賢護分に、『もし善き男女にして心をかけて一心に一日一夜乃至七日七夜彌陀佛を想ひ浮べて心が亂れないならば、この人は必ず阿彌陀佛を見奉るのである。もし晝間に見奉ることができないならば、夜中に或は夢の中に必ず阿彌陀佛が現はれ給ふ』といひ。『觀經』には『眉間の白毫を拜すれば、從つて八萬四千の相好が自然に現はれるであらう。かくて無量壽佛を見たてまつるならば、取りも直さず十方世界の無量の諸佛を見たてまつつたことになるのである。無量の諸佛を見奉ることの出來る程であるから、その功德によつて諸佛は直ぐに成佛の豫言を與へさせられるであらう』。かやうに現身に佛を見奉る上に更に未來にすぐれた利益のあることは、『普賢觀經』に、『十日十夜一心不亂に全身を地に投げて、かの佛を念ずれば、十日の中には、必ずかの阿彌陀佛を見奉り、十方世界の諸佛とその所住の處とを見奉ることができる。たゞ重い罪障りのものは拜むことはできないが、あらゆる善根をみな悉く安樂淨土にふりむけて、淨土に生れたいと願ふならば、正に命の終らうとするときに、阿彌陀佛は大衆とともにその人の前に現れ給ふて、淨土へ生れしめられる』といひ。『平等覺經』には『身を淨めて一心に晝夜不斷に十日の間阿彌陀佛を念じて淨土に生れたいと願ふならば、私は慈しみ愍んで安樂淨土へ生れしめやう』といひ。『大無量壽經』の歌に

『かのみ佛の誓ひゆゑ
名を聞き、生れんと思ひなば

みなこゝ〳〵くかの國に
到りて退かぬ位、得む』

といひ。『觀經』には下品上生の人について、『まさに命終らうとする時に、掌を合せ、手を組んで南無阿彌陀佛とゝなへる。するとその佛のみ名を稱へた功力により、五十億劫の間、生死を輪り廻る罪が消え失せるのである。かくて化佛の後に從ふて寶の池の中に生れる』といひ。下品中生の人について『まさに命の終らうとする時、地獄の火焔が一時に押し寄せてくる。その折に阿彌陀佛の十力の威德と光明の不可思議力と、また佛の戒と三昧と智慧と解脫と解脫智見とを聞く。すると八十億劫の生死の罪が除かれ、地獄の火焔は忽ち化して涼しい風となり、もろ〳〵の天華を吹くやうになる。而して華の上には何れも化佛化菩薩がまし〳〵てこの人を迎へられるので、往生することができる』といひ。また下品下生の人について、『まさに命の終らうとする時、苦しみに逼られて居るので、佛を念ずるの餘裕がない。よつて善き友の教に隨ふて一心に聲をつゞけて南無無量壽佛と十聲となへたとする。するとそのみ名をとなへた功力によつて、一聲〳〵の中に八十億劫の長い間の生死の罪が消え失せて直ちに往生することができる』といひ。また『大無量壽經』の佛の誓ひに『あらゆる世界の人達が私の名まへを聞くことによつて、宇宙の眞理をさとることができず、名號の功德を得ることができないならば、私は佛にはなりませぬ』といひ。また『他方の國のもろ〳〵の菩薩達が私の名まへを聞いて、たちごころに二度と迷はぬといふ位に至ることができなかつたならば、わたしは佛にはなりませぬ』といひ、更に『觀經』には、『もし念佛するものは、まさにこれ人間の中の白蓮華である。觀世音大勢至の二菩薩はこの人のためにすぐれた友となつて下される。この人はまさに道場に座つて、阿彌陀佛の淨土に生れるのである』とあるによつても、彌陀を念ずるものに特別の利益のあることが知られるのである。

六　例證勸信

上來念佛の利益について明かにしたが、更にこれを例證するならば、『觀佛經』の第三に釋尊が同族の釋氏の人々に對して告げ給ふ言葉が出て居る。謂く『人々よ、往昔毗婆尸佛の末の世に月德といふ長者があつたが、その五百の子が同時に重い病の床についたので、父の長者は子の前に涙を流し掌

を合していふやうには、「愛子よ、汝等は邪しまな道に入つて、正しい教法を信じやうとしなかつたが、今命終らうとするのに何のたよりとするところがあるか。今世に毗婆尸佛といふ佛がゐますから、汝等はかの佛のみ名を稱へよ」とつけたので、五百の子等は別に佛を信ぜないけれども、父のいはるゝまに南無佛とゝなへたが、父は更に「歸依法、歸依僧と稱へよ」と教へて、三度となへない前にみな悉く命終つたが、その僅かに南無佛と稱へた功德によつて、天上界の四王天の世界に生れて天界の樂しみを受けたが、その壽命のつきたときに、さきの邪しまな見解の業で地獄に墮ちて獄卒の責苦に遇うて、父の教誨を思ひ出して南無佛と稱へるや、否や、地獄を出で人間に生れて、尸棄佛を初め六佛の世に出でさせられたことを聞いてはゐるけれども、佛には遇ひ奉らなかつたが、六佛のみ名を聞いたゞけで私と同じやうにこの世に生れたのである。このもろ〳〵の比丘は、前生のときに惡意を抱いて佛の正法を謗つたが、南無佛と父に教へられてとなへたゞけで私に遇ふことができて、もろ〳〵の障碍が消え失せて諍りを開いて聖者となつたのである』と。また謂く『燃燈佛の末の世に一人の聖者があつたが、その千人の弟子が聖者の教を聞いて信ぜず、瞋りを抱いて死んでゆくときに、南無佛とゝなへよと教へられてその功德によつて忉利天に生れ、後に釋尊の出世に遇ふて南無光照佛となるであらうとこの豫言を受けた』と。

また同經の七卷に文殊之利がその前生に寶威德佛に遇ふて禮拜したことを說いたので、世尊がこれを讃め嘆へられて、『よいかな、よいかな、文殊之利は昔佛を禮拜した功德によつて數限りのない諸佛に遇ふことができたが、まして私の弟子にしてつとめて佛を觀想するものに於ては尙更である。阿難よ、おんみは文殊之利の言葉を一同と未來の衆生とにかやうに告げたがよい。「もしよく禮拜し、よく佛を念じ、或は佛を觀想するものがあるならば、その人は文殊之利と何等異なることがない」といはれた』ことが出て居る。またいふてある『時に十方世界の諸佛が世尊の前に來て足を組んで坐り東方世界の善德佛が並みゐる一同に告げて、「昔寶威德佛の御代に一人の比丘が九人の弟子と俱に佛塔に詣つて佛像を禮拜し、端正な一寶像をつく〳〵と見奉て歌をよんで讃めたゝへたが、その功德によつて、命終つて悉く東方寶威德佛の國に生れて後も、つねに佛に値ふてよく梵行を修めて念佛三昧を得て、やがて佛となるの豫言を得、それ〴〵に十方世界に於て佛となることが出來た」と說き、大光明を放つてそれ〴〵に本國へと歸られた』と。

またいふてある。『四佛世尊が空中から下りて釋尊の前に坐つて、往昔空王佛のみもとで出家したけ

れごも、惡業のために惡世界に墮ちたが、時に空中の聲を聞いて塔に入つて佛の像の眉間の白毫を觀ひ浮べ、「佛の世にましましたみ相こ何等異なることがない。願はくばわが罪を滅し給へ」こ全身を地に投て、もろ〳〵の罪を懺悔したがために、八十億劫の間の生死の苦しみを免れて、世々に十方諸佛に遇ふて念佛三昧をたもつて、それ〴〵に佛こなつたのである』こ。またいふてある『財首菩薩が佛に申しあぐるやう、「世尊よ、往昔私は釋迦牟尼佛の入滅の後に金幢王子こしてこの世に生れましたが、傲慢不遜で正しい佛の教を信じませぬでしたが、定自在比丘に勸められまして、塔の中へ入つて端嚴な佛の像を拜んで掌を合して禮拜し、南無佛ここなへましたが、その功德によつて九百萬億那由他の佛がたにお値ひして一心に佛を念じ、その力で墮獄の苦しみを免れて今日首楞嚴三昧を得たのであります。卽ちそのときの王子こは今の私財首であります』こ。またいふてある。『佛ののたまはく、往昔私はもろ〳〵の菩薩こ俱に栴檀窟佛のみもこで、諸佛のみすがたの變化や、念佛三昧を聞いたが、その功力で九百萬億阿僧祇劫の生死の罪が消え失せて次第に佛こなつたこごであるが、かやうに十方世界の量り知られぬ諸佛はみなこの念佛三昧によつて菩提を得られたものである』こ。

また『迦葉經』には『往昔光明佛の入滅の後に精進菩薩*が婆羅門の家に生れたが、歲十六の時一人の比丘が白い疊の上に佛像を畫いて精進に與へたが、精進は畫像を見て大に歡んで、かやうな妙な佛身を得たいものであるこ、切に父母に乞ふて出家し、像を以て山に入つて草を敷いて坐こして、畫像の前に足を組んで端坐して、一心に、この畫像は如來こ何等異なることがない。されごこの畫像に心もなければ、感覺もないけれごも像の相は如來である、相はあつても眞實の體はない。萬有もまたこれこ同じやうに、相のないもの〻上に相を觀じ、相を離れたもの〻上に相の思ひをするけれごも、本來は相もなければ空寂なものであるこ觀じて五通力を得、四無量心を缺けめなく具へ、四種の無礙辯*こ普光三昧こを得て大光明を具へ、清淨な天眼で東方の數限りのない佛を見、清淨な天耳で佛の所說を聞いてよくお受けをし、智慧を以て食物こし、ためにすべての神々は香華を散らして供養をし、山を下りて村里に法を說いて、二萬の衆生が道を求める心を發して夫々に退轉するこごのない無上の菩提を得たこごであるが、迦葉よ、大精進こは卽ち今の私のこごであつて、佛像を觀じて今佛こなるこごができたのである。さればもし人あつてかやうな觀法を學ぶならば、必ず未來には無上の菩提が得られるであらう』こ說かれてある。

更に『譬喩經』の第二によれば『往昔一人の比丘がその母が地獄に墮ちて苦しんでゐるのを知つて、悲

しみ、その苦しみを免れしめようと一心に念じたが、時に父王を弑殺して王位を奪ふて卽位した邊境の王が、七日の後には比丘の母と同じやうに地獄に墮ちるといふことを知つて、王の寢宮に忍んで壁に穴を穿つて半身を現はしたので、王は悔れて劍を拔いて頭を截れば、頭は地に落ちたが比丘は身動きもしないので、これを繰り返すに何等の變化もなく遂に、王はその尋常でないことを知つて悔れて過ちを謝した。そこで比丘のいふやう、「王よ、悔るゝに及ばない。私はおんみを救はうがためにやつて來たものである。おんみは父王を弑して國位を奪ふたが、よしや大きな功德を作るとしても、地獄の苦しみを受けることは免れることは出來ないであらう。だが大王よ、これから七日の間、一心不亂に南無佛ときなへるならば必ずや罪を免れることであらう。このことを決して忘れてはならぬ」とかくいひ終つて去つたが、王は一心に七日の間晝夜不斷に南無佛ときなへ、命終つて王の魂が地獄の門に向ふて南無佛ときなへたゝめに、これを聞いた地獄の衆生はみな一時に、南無佛ときなへて苦しみを免れて證りに入ることが出來たのである」といつてある。

また支那にあつては東晉時代から唐代にかけて阿彌陀佛を念じて淨土に生れたものは、出家のものも、在家のものも、男女を合せて五十餘人もあつたことは、『淨土論』や、『瑞應傳』に見え、我國でも淨土に生れたもの四十五人もあることは慶氏の『日本往生記』の上に顯れてゐるが、まして況んや市井の間にかくれ、山林に隱遁して獨り淨土往生の行をつとめて獨りかの國に生れるものゝあることを誰が知り得やうや。さればこそ專心に彌陀を念じて淨土に往生すべきである。

七　惡世界に及ぶ利益

『大悲經』に『もし人あつて心に深く佛を念じて、敬ひ信ずるならば涅槃のさとりを得るが、阿難よ、よしや畜生に生れても、よく佛に歸依するの念ひがあるならば、その善根功德の報いで、必ずさとりを得るであらう。阿難よ、昔大商人があつて、多くの部下を率ひて航海して鯨の襲來に遭ふや、大商人を初め船中の人々は戰慄し、悔れ狽へて泣き叫ぶのみであつたが、やがて大商人は右の肩をぬぎ、右の膝を地につけて一心に佛を念じ、掌を合せて禮拜し、聲高だかに三度佛のみ名をとなへ、それにつれて一同も聲を揃へて和したので、鯨は佛のみ名を聞いて悅び敬ふて口を閉ぢ、ために人々はその難を免れ、鯨は佛のみ名を聞いてから心に歡んで、それから他の生きものを喰はなかつたから、その功力で命終つてから人間に生れ、敎法を聞いて出家し、善友に逢ふて聖者のさとりを開いた。阿難よ

畜生こ生れた鯨でさへ佛のみ名を聞いて涅槃のさとりを得たが、まして況んや人あつて佛の名を聞き教法を聞くものにはいふまでもないことである』といつてある。

また『菩薩處胎經』に『龍の子が金翅鳥に歌を以て說いていはく、

『ものを殺すは善き行ならじ
朝露の虫の光をみ
いのち終るがごとければ
いのちは惜しむに足らざらん

戒行をまもり佛語に順へば
長壽天に生るゝを得ん
はかりなき劫に福をつみ
畜生道に墮ちざらめ

いまわれ龍身を受くれども
戒行の德の淸ければ
六畜の中に墮つるこも
必ず生死を度脫せむ』

こ。龍の子はかく歌うたので、これを聞いた龍子や龍女はいづれもいのち終れば必ず阿彌陀佛の國へ生れることであらう』といつてある。かやうに念佛には惡趣のものも淨土へ生れることの出來る利益があるのである。

第八章　念佛の證據

あらゆる善事にはそれ〴〵の利益があつて、淨土に生れるたねとなるのに、上述のやうにたゞ偏に佛を念ずることのみを勸めることは、決して餘の種々のすぐれた行を否定してのことではないのである。たゞ男こいはず、女こいはず、貴いものも、身分の賤しいものも、その起居動作こ時こ場所こにかゝはりなく容易く修めることが出來、その上、命のまさに終らうこする時に臨んで、淨土に生れたいこ願ひ求める上に佛を念ずることにまさるものがないからである。『木槵經』にいふてある。『難陀國の波瑠璃王、使者を遣はして佛に向ひ、「願はくば世尊よ、特に慈愍を垂れて、わがために日夜修め易き道を敎へ、未來世に於て多くの苦しみから離れしめたまへ」こ申し入れた。するこ佛、使者に告げてのたまふやう、「汝、往きて大王に語れ。若しも罪や、障を滅さむこ思ふならば、木槵子一百八を貫いて珠數を作り、何時もその手から離さず、行住坐臥、什んな場合でも、心を至誠にして、意を散らすなく、口に佛法僧の御名を稱へては、その度毎に一つづゝの木槵子を繰つて行く。かくてそれを繰り返すこと、若しは十、若しは二十、乃至は百千萬にも及んで行へ、能く二十萬遍を滿てゝ、身も心も亂るゝことなく、諸〻の曲つた念ひがなければ、死んでから後、天界に生を受け、終には凡ての罪を斷ち、生死の流れを越えて、涅槃の岸に至ることが出來るであらう』こ。さらに『占察經』の下卷には『何れの淨土を問はず、淨土に生れたいこ欲ふならば、その佛のみ名を專心にこなへ、一心に心をこめて地藏菩薩の法身こ諸佛の法身こは平等であつて、不生不滅のものであるこ觀想するならば、必ずかの佛の淨土に生れて、善根を增進して退轉することがないであらう』こいつてある。『大無量壽經』に說ける三輩の業には、淺深があるけれども、念佛のみには通じてたゞ『一心一向に無量壽佛を念ずる』こいひ、佛の四十八の誓ひの中には、『せめて十聲でも念佛して、もし生れることが出來ないならば私は佛にはなりませぬ』こ誓約せられてある。更に『觀經』の下々品には、『極めて罪の重い惡人は更に他の方便がない。唯、佛を念じて、口に御名を稱へるばかりで極樂に生るゝことが出來るのである』この意を述べ、又同經には『もし眞實かの西方淨土に生れたいこ欲ふものは、一丈六尺の無量壽佛のおすがたが池の上にましますのをば觀想するがよい』この旨を語り、その他、『光明をもつて遍く十方世界を照らして、佛を念ずる衆生を攝めこつて棄てさせられぬのである』こいつてある。或は『阿彌陀經』には、『僅ばかりの善根功德の因緣では、こてもかの國に生れることが出來ない。舍利弗よ、

もしよき男女があつて、阿彌陀佛のお慈悲を說くのを聞いて、そのみ名を信じ、一日乃至あるひは七日の間、時の多少にかゝはりなしに、一心にみ名を念じて、心を動かすことがないならば、その人のまさに命の終らうとする時に阿彌陀佛がもろ〳〵の聖者がたとともに、その人の前に現れさせられる。その人はいよ〳〵命の終る時になつても、心は亂れて身をもがくことなしに、たちどころに阿彌陀佛の極樂淨土に生れることができる』といつてある。『般舟經』にいふ、『阿彌陀佛の仰せには、私の國に生れたいと欲ふならばよく私を念ずるがよい。一心不亂に念じて絕えることがないならば、必つと私の國に生れることが出來るであらう』と。更に『鼓音聲經』には『もし比丘比丘尼の善き男女があつてよくかの阿彌陀佛のみ名をたもてば、その功德によつてその人の正に命終らうとする時には、阿彌陀佛は聖者がたとともにその人の前に現はれ、その人は阿彌陀佛を拜んで、次で淨土に生れることが出來る』といつてある。『往生論』にはかの佛の國土とその住民との功德を觀想するを以て淨土に生れる所の因としてある。かくの如くいづれも皆念佛を以て淨土往生の業因とするものである。されど上の十文の中で『觀經』の下々品の文と『阿彌陀經』の文と『鼓音聲經』の文のみがたゞ全く佛のみ名を念ずることを以て淨土に生れる所の業因としてゐるのであるが、まして況んや佛の相好の功德を觀想するに於てをやである。

聖敎の上には、念佛の餘の行をとき勸めるの經文がないでもないけれども、直接に念佛の如く往生の肝要としたるものはなく、まして佛御自身も常にわれを念ぜよと仰せられて、またその放ち給ふ光明は念佛の人を攝めとられるが、念佛の餘の行をする人をその中に攝めとると仰せられたものゝないのによつても、念佛をのみすゝめさせられることが明かに知らるゝのである。元來もろ〳〵の經論の上に說くところは、衆生の夫れ〴〵の根機によつて一樣ではない。けれど馬鳴菩薩の『大乘起信論』に、『初めて學修するものは、その心が怯ぢけて容易に信ぜないから、如來はそのすぐれた手だてによつてよく信心を護らせられるのである。されば人はその人は專心に佛を念ずるちからによつて、その願ひのまゝに他方の淨土に生れることができるのである。されば經の上に說くがやうに、もし人あつて、專心に西方の阿彌陀佛を念じて、善根功德をふりむけてかの世界に生れたいと願ひ求めるならば卽ち往生することができるのである』といへるが如く、經典の上には多く念佛をもつて淨土へ生れる肝要とせられて居るのである。

第九章　往生の諸種の行

極樂淨土に生れたいと願ふのに、必ずしも專心に佛を念ずるの方法によるの要はなく、たゞその人の樂ひのまゝによるべきである。『四十華嚴經』の普賢の願、『三千佛名經』、『無字寶篋經』、『法華經』を初め、『隨求尊勝』、『無垢淨光』、『如意輪』、『阿嚕力迦』、『不空羂索』、『光明阿彌陀經』、及び龍樹菩薩の所感の往生淨土の呪文などの中にはみな經典をたもち、讀誦することを以て淨土に生れるの業としてゐるが、『大阿彌陀經』には『齊戒沐浴して身を淨め、一心に阿彌陀佛の國土に生れたいと願ふて十日のあひだ晝夜不斷に佛を念ずるならば命終ればみなかの國に生れて七寶の池の中の蓮華の中に化生する』といひ。『十往生經』には『一心に佛身を觀想して歡びの思ひから衣服や食物を佛と僧とに供養するもの、病める佛弟子や、あらゆる衆生に妙藥を與へるもの、或はよく一の生命をも害ふことなくあらゆるものを愍み慈しむもの、師より戒を受けてよく清らかな智慧をもつて梵行を修めて歡びの思ひに澄れるもの。よく父母に孝養をつくして師長を敬ふて傲慢の心のないもの。精舍に詣つて塔寺を敬ひ、法を聞いて眞實の義を解るもの。一日一夜によく八戒齊を受けたもつて一戒をも破らないもの。六齊日に房舍を出て善き師匠のもとにいたるもの。よく戒を守り善事を修めて、禪定を樂しんで他を謗らないもの。無上のさとりの道に他を謗ることなく、よく戒行を守り、智慧のないものにこの教法を敎へ、無量の衆生を敎化するような人はみな悉く阿彌陀佛の國土に往生することができる』といひ、『彌勒問經』には、『佛の所說のやうに阿彌陀佛の功德利益を願ふてもし十度相續して不斷に佛を念ずるならば、卽ち淨土に生れることができるのである。その十度念ずるとは、常によくもろ〳〵の衆生を慈しんで、その行を毀たず、常にもろ〳〵の衆生の上に慈悲の心をたれて害ふことなく、身命を惜しむことなく一心に敎法を護つて、あらゆる敎法を謗らず、よくこゝ〳〵に耐へ忍ぶ心を發し、深く心に信じて利欲をはなれ、眞實の智慧の心を發して日夜に念じて忘れることなく、もろ〳〵の衆生を敬愛して憍りの心なく、謙讓に語り、世事の談話に味着せず、心を靜めて散亂の思ひを斥け、一心に佛を觀想して絕えることがないならば淨土に生れることができる』といひ。『觀經』には『かの極樂淨土に生れたいと欲ふものは、よろしく三種の善事を修めねばならぬ。一には父母に孝養をつくし、師長に仕へ、慈しみの心から生物を殺さず、十種の善き行ひをする。二には佛と敎法と僧伽との三寶に歸依し、よくもろ〳〵の戒行を守り、行ひを愼み、威儀を正しくする。三には道

を求める心を發し、深く因果の道理を信じ、大乘の經典を讀誦してその旨趣を味はひ、人をすゝめて行めしめる。かやうな三種の行業はまことに過去未來現在の三世の諸佛がたがみな未だ佛ごならせられなかつた時に、これを修行して淨土を建立されるに至つた正しい原因なのである』と。また『上品上生といふのは、もし衆生あつて、かの國に生れたいと願ふものは三種の心を發したならば直ぐにかの國に生れることが出來るのである。その三種の心とは何であるか。一にはまことの心、二には深く信ずる心、三には善根功德をふりむけて、かの國に生れむと願ふ心であつて、この三種の心を缺け目なく具へるならば、必ずかの國に生れることが出來るのである。また三種の衆生があつて、みなまさに俱に淨土に生れることが出來るのである。その三種とは何であるか。一には悲しみの心があつて、妄りに生物を殺さず、もろ〳〵の戒行を守るもの。二には平等の眞理を說く大乘の經典を讀誦するもの。三には六念を修行し、善根功德をふりむけて、かの國に生れたいと願ふもの、これである。この功德を具へて、一日乃至七日の間、修行すれば、それによつて極樂淨土に生れることが出來るのである』といひ。或は『上品中生といふものは必ずしも平等の眞理を說き示した大乘の經典を受け持ち、讀誦するとは限らないけれども、たゞよくその義趣を會得し、眞理の第一義を聞いても、心が驚き騷がず、因果の道理を深く信じて、大乘の教法を謗らず、その功德をふりむけて極樂國に生れたいと願ふものである』といひ。更に『上品下生といふのはまた因果の道理を信じて、大乘の教法を謗らず、ひたすらに道を求める心を發し、その功德をふりむけて極樂に生れたいと願ふものである』といひ、猶『中品上生といふのは五戒を受け、八戒齊をたもち、その他のもろ〳〵の戒律を修め、五逆をつくらず、過失を犯すことなく、その功德をふりむけて西方淨土に生れたいと願ふものである』とか、『中品中生といふのは、一日一夜の間、八戒をたもち、或は一日一夜の間沙彌戒をたもち、或は一日一夜の間、具足戒をたもつて威儀を亂さず、その功德をふりむけて淨土に生たいと願ふものである』とか、『中品下生といふのはよき男女があつて父母に孝養をつくし、世の仁慈を行ふものである』といひ。その他『下品上生といふのは若し衆生あつてもろ〳〵の罪をつくり、平等の眞理を說き示した大乘の經典を謗らぬとは云へ、もとより凡愚なものであるから、惡事をなして慚愧ることを知らないものがある。かやうなものゝまさに命終らうとする時に十二部の經典の表題の名を聞き、掌を合せて南無阿彌陀佛ごとなへるものである』とか、『下品中生といふのは衆生あつて、五戒、八戒、具足戒を犯し破るものがある。かやうな凡愚なものが命のまさに終らうとするとき、地獄のもろ〳〵の火焰が一時に押し

寄せてくる。その折にたま〳〵よき知識が來て大慈悲の心から、阿彌陀佛の十力の威德と光明の不可思議力とを說き、また佛の戒律と三昧と智慧と解脫の解脫智見とも讃めたゝへるのを聞く。すると八十億劫の生死の罪が除かれる』とか、『下品下生といふのは、もし衆生あつて五逆十惡をつくり、不善のありたけをつくすとする。かやうな凡愚なものは、その惡業の報いによつて、苦惡の世界に沈み、永久に流轉の苦しみを受けること、窮まりなかるべきである。かやうな人がまさに命の終らうとするとき、たま〳〵よき知識に逢ひ、苦しみに逼められてゐるので、敎のやうに佛を念ずる餘裕がないけれども、一心に聲をつゞけて南無阿彌陀佛と十聲となへたとする。するとそのみ名をとなへた功力によつて、一聲〳〵の中に八十億劫の長い間の生死の罪が消え失せる』といつてある。『大無量壽經』には上中下の三種のこもがらの淨土に生れるの業因を說いてあるが、またこの經の九品の中に包含せられるものである。更に『觀經』には十六の觀法をあげて淨土に生れるの業因としてゐるが、一々こゝに列擧するの遑がない。

凡そ淨土に生れる行業については淨影師はその『觀經』の疏に（一）十六の觀法のやうに觀法を修めて往生するのと、（二）三種の善事のやうに、惡をやめて善き行を修めて往生するのと、（三）まことの心と、深く信ずる心と、善根功德をふりむけて淨土に生れたいと願ふ心との三心のやうに信心によつて往生するのと、（四）淨土のことを聞いて佛に歸依し、み名をとなへ、佛の德を嘆へて往生するのとの四をあげてゐるが、私の見るところではもろ〳〵の經典の上に說かれた往生の行業は梵網の戒品に總括せられ、猶換言すれば六度の行を出ないものである。今更にこれを細說すれば、（一）施し、（二）佛、敎法、僧の三寶への歸依及び、五戒八戒等の戒行を守り、（三）忍耐、（四）努力（五）寂靜の境地に入ること、（六）智慧、（七）道を求める心、（八）六念を修め、（九）大乘の經典を讀誦し、（一〇）敎法を護り、（一一）父母に孝養をつくし、師長に仕へ、（一二）謙讓、（一三）利慾に染まないことの十三となるのである。『大集經』の月藏分の歌に

『樹の實しげれば害はれ
竹蘆實のれば枯るゝごとく
任驟はらみて身を亡ぼす
無智の利を求むるもまたさなり

比丘もし供養を身に受けて
利欲を樂ひ、着すれば
解脫を障へて得ざらしむ
げに貪りにまさる惡あらじ』

こあるがやうに、名譽こ利欲を追ふものは、却てその解脫の道を失はしめるものである。『佛藏經』に迦葉佛が「釋迦牟尼佛は多くの供養を受けるから、その敎法は間もなく滅んでしまうであらう」こ豫言をしてゐられるが、如來の上に於てさへかやうであるものを、まして凡愚なものゝ上にあつてはいふまでもないここである。大きな象を窓から外に出そうこして、尾のために碍げられ、家をすてゝ道を求めるものも、名譽心こ利慾のために縛られて道を失ふが、げにこの名譽心こ利慾の心こそ家をすてて道を求めるものゝ上に最後の怨をなすものである。(八五)たゞ維摩居士は身はこの世の暮らしをたてながらも、心は利慾をすてゝ出家の生活をし、(八六)藥王菩薩はその前生には俗塵を避けて雪山に入られたが、

今の人々もまた道を求めるためには、かやうにこそつこむべきである。よく自身の根機を考へて進退を決すべきである。もし惡緣によつてその心を制禦することが出來ないならば、その地を去れよ。麻の中の蓬は眞直であり、馬も屠所に近い厩に繫げば氣が荒立つの道理、されば、よく惡緣を遠ざけて修行を勵むべきである。

第十章　疑義の解答

一　極樂淨土の住民と國土

阿彌陀佛の淨土の佛身及び佛土については、天台大師は衆生の機緣に應じて現はさせられた應身佛が凡人と俱にゐられる淨土であるといひ、惠遠法師は衆生の機緣に應じて現れた應身であり、應土であるといひ、道綽禪師は本願に報いあらはれた圓かな報身であり、報土であるといふて居られる。然し古來相傳へては皆衆生の根機に應じて現はさせられた化現の佛身であり化現の國土であるといふのは大きな誤りである。その故は『大乘同性經』には、『淨土の佛はみな悉くかつての願望と修行とに酬ふて得られた報身佛であり、穢れはてたこの世での成佛はみな悉く化身である』といひ。また同經には『阿彌陀如來が初め、龍王如來、寶德如來の清らかな佛の國で道を得させられるは皆これ報身の佛である』とあるから、阿彌陀佛は明かに願望と修行とによつて酬いられた報身佛であり、その淨土は報土であるのである。

また阿彌陀佛が佛とならせられてからの年數についても、諸經典の上には十劫といひ、『大阿彌陀經』には十小劫といひ、『平等覺經』には十八劫といひ、『稱讚淨土經』には十大劫とあつて一定しないが、

璟興の『大無量壽經疏』によれば、『平等覺經』の十八劫の八は小の字の書寫の誤りともいふべきである。阿彌陀佛の未來の壽命については『阿彌陀經』には、計りなくほとりのない阿僧祇劫であるといつてあるが、『觀音授記經』には阿彌陀佛の壽命は無量百千劫に終極があつて、その阿彌陀佛の入滅の後に觀世音菩薩が菩提樹下に於て佛のさとりを開いて普光功德山王如來と名づけるといふて、阿彌陀佛の壽命に限極があつて入滅せられるといひ、先きの『大乘同性經』には壽命無量の報身佛とある。この相違は如何といふに、迦才の說によれば、衆生が淨土に生れたいと欲ふてつとめる修行が一樣でないから、その生れる淨土にもまた千差萬別があるわけである。されば諸の經論を批判するものが、それが佛の願望と修行の酬いで現はれた國土であるといふても、また衆生の根機に應じて變現せられた化土であるといふても、何等差支のないことで、たゞ諸佛の衆生を目的の修行がよくこの報土と化土との二種の淨土を感ずるといふことを知るべきである。されば淨土に生れたいと願ふものであるならば、たゞ佛のみ言葉を信じてその敎法によつてひたすらに佛を念ずるならば、必ず淨土に生れることができるのであつて、敢て報土化土の二國土の詮索は必要のないことなのである。

また佛の相好に三十二相といひ、八萬四千の相好といふて不同のあるのは如何といふに、『觀佛經』に諸佛の相好を說いて、人間の相に例同するために三十二相と說き、もろ〳〵の天人の相好にすぐれてゐるから八十のこまかな相好を說き、もろ〳〵の菩薩のために八萬四千の妙な相好と說くのである。

極樂のありかについて、經にはこゝを去ること西方十萬億の佛の世界をすぎて極樂世界があるといひまた或經にはこれより西方にこの世界を去ること百千俱胝那由多の佛土をすぎて佛の世界があるが、これを極樂と名けるといふて、二經の上に相違のあるは如何といふに、智光の疏によれば、俱胝とは億のことで、那由多とは大數を意味するから卽ち十萬億であつて何等相違するものではないのである。その敎化せられるところも單に西方淨土のみにとゞまらず。その機緣に從ふて、み心のまゝにその身を現はされて敎化せられるから穢れた世界にも出現せられるのである。この穢れた國土とは何れの世界であるか不明であるが、道綽禪師を初めとして諸師は多く『鼓音聲經』に說いて『阿彌陀佛は六萬の比丘と俱にまし〳〵て、その國を淸泰といひ、父を月上轉輪聖王、母を殊勝妙顏、子を日明といひ、ときの魔王を無勝といひ、提婆を寂靜と名ける』といふてある。淸泰國を穢れた世界としてゐるが、佛の敎化せられるところは、もとよりこの二國に限るものではなく、『華嚴經』の歌に

『菩薩のちかひを修むるに
衆生の所欲に隨ひて
衆生の心行のきはなきまゝ
その國土、十方に遍からむ

如來は十方に現れて
塵の無量の國內の
無量の境にこゝ〳〵く
無邊の劫を經て住まふ』

とあるが如く、如來は量り知られぬ衆生を敎化せんがために十方世界に遍くましますのである。

二　往生の階位について

『瑜伽論』に三地の菩薩がまさに淨土に生れるこあるのに、聖者でない凡愚なものに對ふて、淨土に生れよと勸めるのは如何こいふに、淨土に生れる衆生の根機に種々の差別があるから、當然淨土にも勝劣上下の別があるので、怪しむまでもないことである。淨土にはかやうに勝劣上下の差別があるけれども、願望こ修行こによつて酬いられた彌陀の淨土は智慧のすぐれた聖者も凡愚なものもみな悉く生れることができるので、たこひ惑ひの罪惡の重いものでも、天台大師のいはれた如く、臨終に罪を懺悔して佛を念ずるならば、その念力によつて惑ひの障りが轉じて淨土に生れることが出來、惑ひのたねを不足なく具へながらも、佛の願力によつてよく信心をたもつて淨土に居住することができるのである。

もし凡愚なものが佛を念じて淨土に往生することが出來るこいふならば、『彌勒問經』に『煩惱の心を雜へることなくして佛を念じてこそ淨土に生れるので、決して凡愚なもの、念ずる念力ではない』こある文に抵觸するは如何こいふに、『西方要決』に解釋するが如く、既に娑婆世界の苦しみを知つて永くこの苦海を厭ふ心が起るこいふことは、未來に佛こなつて專心にあらゆる衆生を教化しやうこいふ勝れた心であつて、決して愚かな心ではないのである。淨土に生れたいこ願ふ心の念力の前には煩惱は何等の妨げこもならねば、またもこより煩惱の念ひの雜る筈もないのである。

またかの國の住民は決して退轉することがないから、これは凡愚なもの、生れられるこころではないこいふことも、『西方要決』にいふが如く、退轉しないこいふことは必ずしも聖者の德に限られるものではないのであつて、佛の願力によつて淨土に生れたものは、永くその世界を退くことがないこいふことなのである。

淨土に生れる人々の上に幾多の階位があつて、それについては先賢はそれ〴〵にその所說を異にしてゐるが、要するに上品上生以下九品の品等は悉くわれ〳〵凡愚なものを指示したものである。これについてかやうに九品がたゞ凡愚なものを指示したものであるこいふならば、たこひ凡愚なものが淨土に生れても、聖者の位に於てさこる不生不滅の眞理は、これを證ることは出來ないであらうこの難も、天台の敎法によれば漸次に修行をして不生不滅の眞理をさこるものこ、たこひ惡世界の中にゐても、一足飛びに不生不滅の眞理をさこるものこがあるが、この世での佛の敎化の利益でさへかや

うであるから、まして淨土に於ては尙更のことである。されば彌陀の淨土のあらゆる事例を、他の世界の上に求むべきではないのである。

また生死の苦海に輪り廻つて浮ぶ瀨のない衆生が易々と淨土に生れることができるので、誰も淨土に生れたいと欲ふて道を求めるのであるが、その實まことに千萬人の中に一二人しか生れるものがないといふことは如何なるわけかといふに、道綽禪師のいはれたやうに、これ心に深く信ずるといふことなしに始終動搖し、心が一に定まらないので、二心にも、三心にもなり、雜念が交はつて信心が斷續するからして往生することが出來ないのである。もし一心に深く心に信じて餘の念ひの雜はることなしにうちつゞくならば、必ず淨土に往生することを得るのである。されば善導和尙も『若しも能く上の如く一生涯を期して、絶え間なく御名を稱へて居れば、十人は十人ながら、百人は百人ながら悉く皆往生することが出來るのである。而して若しもその反對に專らなる修行を捨てゝ雜多なる宗教的行爲を修めむとするやうなものがあれば、その者の往生することは殆ごあり得べからざることに屬する』といつて居られる。以てその所以を知るべきである。

然らば『菩薩處胎經』の第二に、『この世界を去る西方十二億那由他に懈慢界といふ世界があつて、西方淨土に生れたいと欲ふものも、途中のこの國の樂しけな伎樂の音に恍惚とし、衣服のかざりや、香華、七寶でかざられた轉閑の床があつて、その床の上で四方を見やうと欲へば、樂ひのまゝに廻轉する。そうしたそこの微妙な光景に醉ふて、更に阿彌陀佛の淨土へと歩みを進めるものが千億萬人の中に一人位しかない』といふことのいふてあるに徵しても、淨土は凡愚なものゝ甚だ以て生れ難いところではないかといふ難も、同經の上に更に說くが如く、淨土へ生れたいと願ひながらも、始終心懈りがちで確固不動の信心がないから懈慢界に生れるのであつて、もし雜多の不純なつとめをなさず、專心に淨土に生れるつとめを修める人であるならば、その人こそ信心堅固で必ず極樂淨土へ生れることができるのである。この眞實の極樂淨土へ生れるものはその數は極めて少く、假りの淨土へ生れるものが數多いから、經の上には特にこれを力說せられたのであつて、實際には相反するものではないのである。

これについて『法華經』には一度南無佛と聞くだけですらみな佛となるの道を得ることあるから、まして彌陀の淨土を願ふものは三心を缺けめなく具へ、命のあらん限り彌陀を念ずるの必要がないではないかといふに、『華嚴經』の歌に

『人もし法を聞かむこと
大海原のなかにあり
また劫末の火を負ふも
かならずこの經を聞くを得む』

とあるが如く『華嚴經』を信ずるものでさへもかやうであつてみれば、まして念佛を信ずるものにはいふまでもないことである。かの一生の間、重い罪をつくつた罪人が、臨終に善い友に逢ふて、十度佛を念じて淨土に生れることが出來ることを說かせられたことも、かやうな一生惡事をつくつたものでも、その前生には淨土を欣ひ求めたもので、その前生の善いたねが成熟して今芽を吹いたものである。故に『十疑論』には『臨終に善い友に遇うて、十度佛を念ずるものは、これは前生の善根が力强くて、善い友の手を借りて現れ、十度佛を念ぜしめたものである』といふてあるのである。

かやうに前生の善根によつて下々品のものまでが淨土に生れることが出來るといふならば、阿彌陀佛の十念往生を誓はれた第十八願は有名無實となりはせぬかこの難もあらうが、たとひ前生の善根があつても、もし十度佛を念ずることがないならば、定めし無間地獄に墮ちて、涯しのない苦しみを受けることであらうから、これによつても臨終の十聲の念佛が往生のためのすぐれた原因であることを知るべく、決して本願が無意義となるのではないのである。

三　往生人の多少

『大無量壽經』にいはく、『世尊、彌勒に答へらるるやう、「彌勒よ、この世界に六十七億の不退の菩薩が居つて、みなかの國に生れるであらう。その一人々々の菩薩達は既に前の世に於て無數の諸佛を供養したこと、汝のごとくである。なほよろづの善いことや、さまざまな行を修する菩薩や、僅かの功德を修めるものは、兎ても數へつくせぬ程であつて、これ等は皆かの國の邊地に生れるのである。他方の佛國からも同じやうである。その遠照佛の國の百八十億の菩薩、寶藏佛の國の九十億の菩薩、無量意佛の國の二百二十億の菩薩、甘露味佛の國の二百五十億の菩薩、龍勝佛の國の十四億の菩薩、勝力佛の國の萬四千の菩薩、師子佛の國の五百の菩薩、離垢光佛の國の八十億の菩薩、德首佛の國の六十億

の菩薩、妙徳山佛の國の六十億の菩薩、人王佛の國の十億の菩薩、無上華佛の國の數へ切れない程の不退のもろ〳〵の菩薩、それは勇猛な智慧を具へ、既に前世に於て無數の諸佛を供養して、普通の菩薩が百千億劫の間かゝつて修める堅固な修行を、わづか七日のうちに修め盡された程の方々であり、更に無畏佛の國の七百九十億の大菩薩、なほその他、もろ〳〵の小菩薩や、出家を求むれば數へ切れない程あつて、これ等の人々は皆かの國に生れる。たゞこの十四の佛國のもろ〳〵の菩薩たちが彼の國に生れるばかりでなく、十方世界の數へ切れない佛國からかの國へ生れるものも亦同樣で、その數はこれも數へつくされぬ程である。私が單に十方世界の諸佛の御名こその國の菩薩や出家たちの極樂世界に生るゝもの、數こを並べるだけでも、晝夜休まず、一劫の間かゝつても、並べつくすことは出來ない』こ。惟ふに遇ひがたい釋尊のみ教に遇ふこ、千萬億劫にも離れることのできぬ惡世界を離れて、淨土に往生するものゝはしに加はるこいふことは、無上の幸福であるから、一心に勤めはげんで、今度の往生の時期を失ふてはならぬこである。

これについてもし僅かな善根のものでも淨土に往生することができるこいふならば、『阿彌陀經』には、『僅かばかりの善根功德の因緣では、こてもかの國に生れることができない』こあるのは如何こいふに、强てそが多少を決定すべきではなく、大菩薩の修める善根に對して僅かな善こいひ、三界に流轉し輪り廻る業に對してこれを大善根こ名けるまでゞあつて、別に經典の上には何等の相違はないのである。

四　平素の念佛

日常佛を念ずるのに四種の相がある。卽ち（一）心を凝らして靜寂の境涯に入つて佛を念ずる。（二）起居動作の散亂の心の中に佛を念ずる。（三）佛の相好を觀念し、或はみ名をこなへ、ひこへにこの世の穢れを厭ふてひたすらに淨土を求める。（四）佛のみ名をこなへて淨土に生れたいこ願ふてもそが佛身こ佛土こは、その窮極は空なもので、空の上に現れた佛身佛土であるから、夢の如く幻の如く、本質に卽した空であり、空こいふても空卽有で、この空こ有この無の境涯に到達して眞理に入る最上の三昧こがある。故に『大無量壽經』に阿彌陀佛のゝたまはく、

『ものみなの性、こゞ〳〵く

空無我なりとさとりては
專ら佛土を求めむに
かならずかゝる國を得む』

凡そ佛を念ずるのにまごゝろこめて念ずるならば、たゞひ心を凝らして靜寂の境涯に入つての念佛であらうが、またその日常の起居動作の上に念ずることであらうが、いづれもみな淨土に往生することが出來るのである。故に懷感禪師はその著『群疑論』に念佛の差別を說いて、『念佛には淺深と定散との區別があるが、心を凝らして靜めて靜寂の境涯に入る定心の念佛とはかの善財童子が功德雲比丘のこころで學んで念佛三昧のやうな甚だ深刻な法があり、散心の念佛には一切衆生が時と處とのかゝはりなしにその起居動作の上に佛を念じて、俗務を妨げることなしにみ名を稱へて、命終らうとする時にそのつとめを成就する所のものである』といつて居る。

また佛の相好を觀想し、み名をとなへて佛を念ずるものと、生れたいと願ふ佛身佛土は畢竟空なものであるとさとつて念佛するものと往生は如何といふに、道綽禪師の說によれば、深く敎法の道理に通達しないものは、未だ萬有の眞實の相を知ることが出來ないけれども、たゞ專心に觀想し、み名をとなへるならば必ず淨土に往生することができるとのことである。また懷感禪師のいふ所によれば淨土を願ふ衆生の根機に種々の差別があるから、從つてその往生のつとめにも淺深の差別がある。然し、畢竟空の上に現れた淨土であるから、果報を求めるやうな心では淨土に生れることができないのである。たゞ空と有とが無二であるといふ境地に髓達した心でのみ淨土に往生することができるのであるとのことである。

然らば『佛藏經』に『もし比丘あつて、餘の比丘に「御身等は佛を念じ、敎法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念ぜよ。かやうに思惟して涅槃のさとりは畢竟空であることを觀じてこれを愛せよ」と敎へるものがあるならば、これは邪しまな敎であり、惡い友であり、私を謗りて外道に加擔するものであつて、たとひ一掬ひの水でも私はそのものから受けることをゆるさない。よしや五逆罪を犯し、十惡をつくることも、かやうな見解に陷つてはならぬ』とあるのは如何といふに、懷感禪師の『群疑論』の解釋によれば、『これは打破の一面を知つて本來の意義の表示を知らないものであつて、ある聖敎にはたとひ須彌山程に實際に存在するものであるとの見解を起しても、芥子粒ほどにも、萬有は

空寂なものであるこの見解を起してはならぬこさへあつて、もろ〳〵の大乘の經典の上には、或は實在するものであり、或は實在しないものであるこ執着する見解を打破して、大乘の教法を讃嘆し、或は小乘の教法を讃嘆して、その時も衆生の根機に應じて佛の說かせられるこころに不同があるのである』こいつてあるのである。また『賢護經』に、『阿彌陀佛にはかやうな三十二相の相好こ、八十の細やかな相好がまし〳〵て、その眞金色の御身から放たれる光明は黃金の融解したるが如くであるが、相好を觀想し、光明を觀想して、次第に如來の體を觀ずれば、念ずべき實體もましまさねば、念ずるわれもなく、かくて空三昧が得られるのである』こいひ。『觀佛三昧經』に『佛の法身十力四無畏三昧三解脫や神變不思議の力はおんみら凡愚なものゝさこり知らるゝ境涯ではないが、たゞ深く心に信じて隨喜の念ひをなし、心をかけて一心に佛の功德を念じまつるがよい』こあるによつても、初めて道を求めて淨土に生れたいこ願ふものはかの佛のすがたかたちを觀想して、次第に佛の法身を念ずべきであり、かくして、やがて空三昧が得られるであらうこ說く經の意味であるから、深く心に信じて必ず淨土に往生すべきである。

また心を凝らし靜に佛を念ずるも、日常の起居動作の散亂の心の上に佛を念ずるも、何れも淨土に生れるここが出來るならば、また現身に佛を見奉ることが出來るかどうかこいふに、經論の上には多く三昧が成就して初めて佛を見奉ることが出來るこいふから、散亂して粗雜な意では佛を見奉ることができない。かの佛の相好を觀じ、佛身佛土は畢竟空であるこ觀ずる場合には如何こいふに、佛身佛土の空を觀ずる場合はいふまでもないこであり、佛の相好を觀じてみ名を稱へる場合にも、『觀經』には佛の相好を觀想する觀法を勸めてあるからには、また現身に佛を見奉ることができるのである。

もし上のやうに佛の相好を觀じみ名をこなへて現身に佛を見奉ることができるこいふならば、『華嚴經』の歌に

『ありこあらゆる萬有は
自らの性たもつなし
法性空こさこりなば
盧舍那佛をば見まつらん』

こいひ、『金剛般若經』の歌に

『人もし形もてわれを見
聲もてわれを求めんに
この人邪道に踏み入りて
如來を見まつることを得じ』

こあるは如何こいふに、『西方要決』にいへるが如く、衆生の根機こ時こに相應して說かせられた佛の說法は一樣でない、何れもそれ〴〵の理由の存するところである。そのわけはあらゆる諸佛にはみなそれ〴〵に三身が在しますが、眞理を本質こする佛たる法身には形質もなければ音聲もないが、淺慮な智慧の淺い聲聞や緣覺は佛の三身は異なることがないこ說き給ふのを聞いて、法身にもすがたがあるやうにこ想ひ、衆生の根機に應じて化現せられた佛のすがたかたちを見て、佛の法身もまたかやうであるこの執着を起すから、これは邪道に踏み込むものであるこいひ。『阿彌陀經』なごの上に佛の相好を觀察して淨土に生れることを勸めさせられるは、罪の障りが重くて佛の法身を觀ずることの出來ない凡愚な衆生に佛を念じ、相好を觀想して禮拜し、讃めたゝへしめられるのである。

かやうに佛を念ずることによつて極樂淨土に生れるのであるが、これは自身の過去の善根の力こ、その善根に萠されて生れたいこ願ひ求める力の上に、更にかの願ひがかなはないならば佛にはなりませぬこ誓はれた彌陀の本願こ、もろ〴〵の聖者がたの護念こが加はつて淨土へ往生するのである。

五　臨終の念佛

命のまさに終らうこするこきに臨んで、佛を念ずる相について、『觀經』に、下々品の人がその臨終の際に十度佛を念じて淨土に往生することができるこいふてあるが、その十度佛を念ずるこは、道綽禪師の『安樂集』にいへるが如く、臨終に善い友の敎へによつて阿彌陀佛のみすがたの總體、或はその一つ〳〵を心に憶ひ浮べて更に他の想ひの雜はらないことである。相つゞいて十度念ずるこいふことも、十は數字を意味するものではなく、必ずしも念佛を十度數へることではないのである。たゞよく思ひを凝らして更に他事にかゝはることがないならば、自然に淨土に生れられるのである。然し久し

く佛のみ名をとなへて憶ひ浮べて來たものには十度念ずるといふことも煩雜なことではないけれども臨終の折に初めて佛のみ名をとなへることを聞くやうな人々には、心に佛を憶ひ浮べることができないから、稱名の度數を數へることも差支のないことである。

然るに『彌勒所問經』には相續いて十度佛を念ずるものは往生することができるとあつて、その十度念じての往生は、一つ〳〵の念ひが深廣なのに、今はたゞ十聲南無阿彌陀佛とゝなへたゞけで容易に往生することが出來るといふのは如何といふに、諸佛所說は一樣ではないが、寂法師は專心に佛のみ名をとなへれば自然に『彌勒所問經』にいふ十度念ずることになるから、必ずしも一々に別に慈悲の心を起せよ、護法のためには身命を惜むやうなことがあつてはならぬといふやうに敎へることではなく、十度念ずることはみな悉く佛と敎法と僧との三つの寶に歸依して敎法のまゝにつとめる十念であつて、一心に念佛する中に自然と包含されてゐるのであるといひ、迦才はこれは平素に十度念ずることであるが、『觀經』に十度佛を念ずるといふのは、臨終の際のことであるからこれは必ずみ名を稱へることであるといふてゐる。

かやうに『觀經』の下々品にさへ十聲の念佛を具足するのに、『大無量壽經』にはたゞ一聲の念佛でゞも淨土に生れることができるのは如何といふに、懷感禪師の『群疑論』によれば、極めて罪の障りの重いものは、十聲の念佛にもよく八十億劫の生死の罪が消え失せるから、十聲となへねばならぬが、『大無量壽經』の上ではさうでないから一聲の念佛でも淨土に生れられると說かせられたのであると解釋してある。

また生れてからこのかたもろ〳〵の惡業をつくつて、未だ嘗て一の善き行ひをも修めなかつたものが、臨終の折にわづかに十聲佛のみ名をとなへたゞけで、あらゆる罪が消え失せて、永くその惡世界の生死をはなれて淨土に生れることが出來るといふことに對する疑惑は、『那先比丘問佛經』の次の言葉で解釋することが出來やう。『彌蘭王、那先比丘に問ふて、「比丘よ、百年の間惡事をこれつとめて來たものが、その命の終らうとするときに臨んで、佛を念ずれば、その功力が天上界に生れることができるといふことは、私にはどうしても信ぜられないことである。また僅か一人のものを殺したからといふてその罪で死んで地獄に墮ちるといふことも信ぜられないことであるが、これはどんなものであらうか」と。そこで比丘は王に、

「大王よ、ではこゝに人があつて小石を水の上に置きますならば、石は水に浮びませうか、それとも

沈みませうか」と問ひかへした。

王、「いや石は水に沈みます」

比丘、「大王よ、ではこゝに百貫の重さの石があるといたします、この石を船の上に置いたならばどうなるでありませうか」

王、「比丘よ、それは沈まないであらう」

比丘、「大王よ、そのことなのであります。たとひ小さな石でも水の上に置けば沈み、百貫の重さの大きな石でも船に載せば水に浮ぶが如く、大きな罪惡を犯したものでも、しばらくの間佛を念ずるならば地獄の苦しみを免れて、天上界に生れることが出來るのであります。またよしや小さな惡事であつても佛の教法を知らないならば、小石が水に沈むが如く地獄に墮つるのでありますが、どうしてこの道理が信ぜられないのでありますか。大王よ、愚かなものは罪惡を犯しながら懺悔することを知りませぬから、その罪は大きいのであります。けれども智慧のあるものはたとひ罪惡をつくつても、よく懺悔をしますからその罪は少いのであります』と。

即ちこの問答に見えたる同一の理由で臨終の折にとなへる十聲の念佛によりもろ〳〵の罪が消え失せ、佛の大悲の誓の船に乗つて、しばらくの間に淨土に生れることができるのである。

また『十疑論』の解釋によれば、罪の輕重は不定であつて、必ずしも時間の長短によるものではない。あらゆる罪惡は、心の外に何ものもないのに、萬有が心の外に存在するがやうに思惟する虛妄顚倒の心から生ずるが、佛を念ずる心は善い友から阿彌陀佛の眞實の功德こみ名こを聞く心によつて生ずるものであるから、一は虛妄であり、一は眞實であつて、ために兩者は比較することの出來ないものなのである。それは永らくの間闇黑であつた室內にも、一度日の光が入るならば、闇が消え失せてしまふがやうに、一度佛のみ名を聞けば忽ち煩惱の闇が消え失せるのである。また罪惡は眞に實在しないものを實在するとして念ひをかける顚倒の心から生ずるが、佛を念ずる心は佛の淸淨眞實の功德こみ名こを聞いて、無上の菩提に念ひをかける眞實の心から生ずるものであるから、一は眞實であり、一は虛僞であつて、ために兩者は比較することの出來ないものである。それは恰も毒矢に射られた人が、藥を得れば直ちに毒が除かれるがやうなものである。また日常につくる罪にはその間には絕えず心の變動があるが、臨終の折にとなへる念佛は一心の外何ものもないから、極樂に生れることができるのである。それは恰も十重の繩は千人を以てしても斷つことが出來ないが、劍をもつならば童子も

よくこれを兩斷するがやうであり、千年に積みかさねられた草でも、さゝやかな火を以て燒きつくされるがやうなものである。されば人あつて生涯十種の善事を修めて、天上界に生れることのできるものでも、臨終の際に邪しまな考へを起すならば忽ち無間地獄に墮ちるのである。かやうに虛妄の惡業でさへ、一生の善業を覆へして惡世界に墮ごさしめるのに、まして臨終の際に一心に佛を念じながら生涯つくつた罪が消え失せて極樂淨土へ生れないこいふことはあり得べからざるこゝいはねばならぬ。

『安樂集』には、さきの小火もよく千年もかゝつて積みあげられた草をも燒きつくすこいふ譬喩の外に、更に、（一）膝行者も順風に船に乘れば一日によく三千里を走り、（二）貧乏人が珍寶をえて王に獻上したがために厚く賞美せられて富貴こなり、（三）賤しいものも轉輪王に從へばよく虛空に昇ることができ、（四）十重の繩も劍をもてば童子よくこれを斷ち、（五）鴆鳥を水に入れゝばその毒で魚類はみな悉く死ぬが、犀の角を入れゝばまたみな蘇へり、（六）子安に飼養された鶴が子安が死んだときにその墳墓で啼いて子安を甦へらしめたことなどの六の譬喩を加へて、萬有は千態萬樣であつて、自身の力で左右されるものもあれば、また自身の力の遙かに及ばないものもあつて、佛の衆生を濟ひ給ふこころも量り知らねば、邊涯のない不可思議そのものである。されば限りある凡愚な心で以て限りのない敎法を疑ふべきではないこいふことである。又、*五種の不思議の中でも佛の敎法の不思議にまさるものはないこあるから、殊に臨終の際にこなへる念佛を輕んじてこれを疑ふべきではないこいふことをいひ、更にこれに十種の譬喩を加へてその意義を明かにしてある。卽ち十種の譬喩こは（一）栴檀の芽生はよく四十由旬の伊蘭林の香氣を豐かならしめ、（二）師子の筋を用ひた琴の音はあらゆる餘の絃をたちきらし、（三）一斤の石汁はよく千斤の銅を變じて黃金こなし、（四）堅固な金剛も羖羊の角で扣けば氷の融けるが如くに碎かれる（以上は滅罪の譬）、（五）牛が雪山の忍辱草を食ふならば醍醐こなり、（六）沙訶藥をみるものは無量壽を得、（七）孔雀は雷鳴を聞いて胚み、（八）尸利沙樹が昂星に照らされゝばよく實る。（以上は生善の譬）、（九）入水寶珠をかざりこして水に入れゝば沈むが、大磐石も船に載せばよく浮ぶこいふのである。かくの如く佛の敎法にはいろ〳〵の不思議な力用があるが、念佛の功力もまたこれに準じて知るべきである。

一體まさに命終らうこする時に臨んでこめられる念力は百年の業にもすぐれて力强いものである。かの『大論』には、『臨終の念力はあらゆるものを燒きつくさねばやまぬ火焰のやうに、また僅かな毒も

よく身を仆すが如く、心は勇猛に百年の行の力にもまして勝れてゐるので、これを大心と名け、身命を惜まず、敵陣に躍りこむ勇士の雄々しさにも比ぶべきものであつて、聖者が肉身の執着をすて、誇りの境涯に入るがやうなものである』といつてある。故に道綽禪師は『安樂集』に、『一切の衆生は命終らむとする時、刀風吹き來りて形を解き去り、死苦逼り來つて大怖畏心に襲はれる。その時善知識に遇ひたてまつりて、大勇猛心を發して十念々佛すれば、その善、增上して卽ち往生を得る』といつて居らるゝのである。

これについて最下の根機のものが、五逆罪を造つても、その臨終に十度佛を念じて、その念力で淨土に生れることができるといふならば、『佛藏經』の第三に、『むかし大莊嚴佛の入滅後四人の比丘が眞實の敎法をすて、外道の說敎に順ひ、佛の敎法を謗つたので、命終つて無間地獄に墮ち、熱鐵の上に九百萬億年の間、仰けにされ、燒き焦されて死に、更に灰地獄、大灰地獄、等活地獄、黑繩地獄から更にまた無間地獄へと墮ちてあらゆる苦しみを受け、流轉のはてに漸う〳〵の思ひで地獄の苦しみを免れて人間に生れたけれども、五百世の間、生れながらの盲目となり、後に一切明王佛に値ひまつて出家をし、十萬億歲の間頭に燃えつく焰を拂ふがやうに勤めはげんだけれども、罪は消え失せないで命終つて更に無間地獄に生れ、その後九十九億の佛に値ひまつゝたけれども、佛の法を謗り、よく戒行を守つてゐる比丘を謗つたがために救はれることがなかつた』とあるのは如何といふに、懷感禪師の『群疑論』の解釋によれば、『淨土に生れたいとの願ひを起し、よくあらゆる衆生を敎化しやうとの大乘の心を起し、阿彌陀佛の本願と、念佛の功德と、佛の加護の力とが加はつてよくもろ〳〵の罪を消して、淨土に生れることができるのである。自身の解脫を開くことのみにとゞまる小乘の敎を信ずる人は、十方世界に佛のましますことも信ぜなければ、頭上に燃えうつゝた焰を拂ふがやうに修行をするけれども、その修行は身は不淨であり、感覺は苦しみであり、心は無常であり、法は無我でありと觀ずる四念處の觀法を一歩も出ないから念佛の不可思議な功德に遙かに劣るものである。故に小乘の人には罪を滅することがないのである』といつてある。

然らば『大無量壽經』に十度佛を念じて淨土に生れられると說きながら、たゞ五逆罪を犯したものと、正しい敎法を謗つたものとを除外するのは如何といふについて、智憬等の諸師は五逆罪だけを犯したものは臨終の際にとなへる十聲の念佛で淨土に生れられるが、その上に更に正しい敎法を謗つたものは生れられないのであるといひ、或は懷感禪師は、五逆罪を造つた人は必ず十聲となへねば往

生することが出來ない。五逆罪を犯さないものであるならば、一聲十聲と多少を論ずる必要のないことであるといふて、諸師はそれ〴〵に所說を異にしてゐるが、私の考へにすれば經の上の佛の本願以外のところでは、淨土に生れる幾多の種類のあることを擧げてゐるが、阿彌陀佛の本願には、もしこのことがかなはなかつたならば、私は佛にはなりませぬとあつて、必ず淨土に生れる人のことをあげてゐるので、五逆罪を犯さないものが、十度佛のみ名をとなへれば必ず淨土に生れ、また五逆罪を犯したものは罪障が重いので、たゞ一聲では罪は消え失せないから淨土に生れることができないのである。五逆罪を犯したものゝ十聲の念佛と、五逆罪を犯さないものゝ一聲の念佛とは何れも不足があるから本願の上ではたゞ五逆罪を犯さないものゝ十聲の念佛をあげて、本願以外のところでは、逆罪を犯したものゝ十聲の念佛と犯さないものゝ一聲の念佛とをつたものである。

逆罪を犯したものが十聲念佛しても淨土に生れることは不定であるといふのは、五逆罪を犯したものが臨終の際に念佛するのは、前生に修めた善根の有無によるので、善根のあるものは從つて念力が強いから淨土に生れることができるが、善根のないものは念ずる力が弱いのと、平素の十聲の念佛と違つて、臨終の際は弱いから從つて淨土に生れることが不定なのである。

また五逆罪を犯したものは、直ちに次の生にその罪の報を受けることに確定してゐるのに、その逆罪が消え失せるといふのは如何といふに、懷感禪師は『群疑論』に『小乘の教を信ずるもの、中には、もろ〳〵の業の果報を信ぜないものがあるから、方便の意から次の生にその罪の報を受けるに間違ひのないことを說いたもので、大乘の教ではすべての業はみな悉く不定であると說いてあるのである』といひ、『涅槃經』の次の言葉をばその證明に引いてある。『涅槃經』第十九にいはく、『大臣耆婆、阿闍世王に懺悔の法を說いて、「大王よ、私が佛の說法を聞いてゐますところでは、一つの善い心を修めるならば、よく百種の惡事を打ち破り、僅かな毒藥もよく衆生を害ふが如くに、僅かな善根でもよく大きな惡事をうち破るのであります』と。又同經第三十一にいはく、『すべての業には輕し重しがあつてそれが不定であればこそ、重い業を輕く受け、輕い業を重く受けることがあるのである。智慧の深いものは、その智慧の力で、地獄へ墮つるやうな極めて重い業をもこの世で輕く受けるが、愚かなものはこの世の輕い業をも地獄で重い苦しみの報を受ける』と。

蓋し阿闍世王はよくその罪を懺悔したがために地獄に墮ちることを免れ、千人を殺した鴦掘摩羅も（八八）最後に佛に値ふてよく聖者のさとりを得たが如くに、五逆罪を犯したものでもよくその罪障を滅する

ことができるのである。

六　散亂心の念佛

菩提を得るために佛に向ふて種々の善事をするならば微妙な果報を得るといふ道理は明かであるが、現前の自身の利益のために修める善根には如何なる果報を受けるかといふに、『大悲經』の第三に『佛が阿難に告げられて「阿難よ、もし衆生あつて現前の樂しい果報を求めるために佛に向ふて善根を植えるものは必ずやみ佛よ、この善根によつてこの世の樂しみを受けたいものでありますといふであらうが、阿難よ、このものはよしや涅槃のさとりを求めないにしても、佛に向ふてもろ〳〵の善根を植えるから、私は必ずこのものは涅槃を得るであらうと說くのである』とあるやうに、菩提を求める清らかな心からにせよ、また現前の快樂を得るための心からにせよ、佛に向ふて善根を植えるならば必ず涅槃の境涯に到達することが出來るのである。

然らばいつ涅槃の境涯に到達するのであるかといふに、『大悲經』に『佛は阿難に告げさせられて、「阿難よ釣針にかゝつた魚はたとひ池の中に泳いでゐても、やがて引きあげられるが如くに、

あらゆる衆生もまた佛を敬ふてもろ〳〵の善根を植え、施をなし、信心を發すならば、たとひ餘の惡業に障碍られて地獄、餓鬼、畜生の中にあつても、佛は佛眼を以てよく衆生の道を求める勝れた心をみそなはせられて、これを救ふて涅槃のかの岸にと渡し給ふのである』とあるやうに、たとひ生死の苦海に輪り廻つても、その善根が空しくなることなしに、必ず涅槃を得るに至るのである。

また衆生の貪欲や、愛欲、嫉妬などのいろ〳〵の煩惱の心で佛を信ずるものゝ利益如何といふに、『寶積經』の第八に、『密迹力士が寂意菩薩に告げて、「寂意よ、耆婆が藥草を寄せ集めて一の童子の像をつくつたが、その相貌は眞に迫つてこゝに勝れ、世に比ひのないまでに麗しいものとなつたが、その童子の像の動作は何等生きてゐるものと變るところがなかつた。ときに國王を初め大臣、長者、百烏が耆婆のこころへ來て、藥童子と遊び戯れたが、これを見るものはみな悉く疾病が癒つたといふことである。さればこそ寂意よ。よく耆婆の醫法を觀想してみるがよ。耆婆の不思議な醫法は醫師の遙かに及ぶところではない。寂意よこれと同樣にたとひ衆生が愛欲の焰に燃えて、男女が互に戀慕しても法身の菩薩に順ふならば、自然にあらゆる欲情が消え失せるが、まして佛の法身を觀るに於

ては尚更のことである』と說いてあるが、單に種々の欲情のみでなく、更に『如來祕密藏經』に、『たとひ如來の前に惡事をなしても外道や邪しまな見解のものに親んで供養をしてはならぬ。如來に惡事をなしても悔いる心があるならば必ず涅槃に至ることが出來るが、外道の見解に隨ふならば三の惡世界に墮ちるであらう』と說いてあるが如く、如來を謗り、敎法を憎み厭ふものに於てもまた同樣である。

然るにこの『如來祕密藏經』の佛に對して惡業をしても外道に順ふなといふことは、原因結果の道理に反するもので、却つて衆生の妄心を深めるものであつて、惡い心で大涅槃が得らること、なりはせぬかといふに、惡い心があるから三の惡世界に墮ちるのであるけれども、だゞ一すぢに如來に歸依するものゝ必ず涅槃に到達するといふことに關しては何等原因結果の道理に背くものはないのである。何となればかの衆生はその罪によつて地獄に墮ちるときに佛に歸依して罪を悔いるから、よしや佛に對して惡事をなしても展轉して必ず涅槃に到達するを以てゞある。かやうに佛を謗り、敎法を破るものさへもかゝる利益を受けるが、まして淸淨眞實な心に佛を念じてみ名をとなへるものに於ては猶更いふまでもないことである。

七　念佛と諸行との優劣

念佛は散亂した心でとなへても、そのとなへる佛のみ名の功德によつて上述のやうな微妙な果報が得られるから、淨土往生の行の中には念佛にまさるべき行はない。『觀佛三昧經』にはかゝる念佛のすぐれた功德をば六種の譬喩を擧げて說き、『佛、阿難に告げて「阿難よ、父の長者の死によつて財寶を得た長者の子は、一日賊に襲はれたが、百千萬金の價のある閻浮檀金を襤褸に包んで泥の中に埋めて隱したがために掠奪を免れたが如く、念佛三昧もまた密かに內に祕藏すべきものである。阿難よ、また王の寶印を盜んで逃れた貧人が、追ひつめられて樹に登り、進退谷まつて寶印を呑み下したが、その樹の截り倒されたときには、貧人の身體が碎けたけれども寶印に恙なかつたやうに、念佛の心の印もまた生死のためにうち壞られることがないのである。阿難よ、また一長者の娘が父の遺言によつて摩尼珠を糞便の中に隱して誰も知るものがなかつたが、あるとき飢饉に世の人々が惱まされたときに長者の娘はさきの如意珠を出して世の人々を賑はしたが如く、專心に佛を念じて動搖するやうなことがあつてはならぬ。阿難よ、旱魃がうちつゞいて一滴の雨も降らなかつたときに、一人の仙人が呪文を

誦へてその神變不思議な通力によつて餓に甘露の雨を降らし、大地からは泉を湧き出させるが如く、念佛三昧を得たものもまたかやうな不思議な力があるのである。阿難よ、また法律を破つて牢獄に入れられた力士が獄を破つて逃亡して河の岸に到り、髻の明珠を解いてそれを船頭に與へて對岸に渡ることができた如く、佛を念ずるものもまた妄念の鎖を免れて智慧のかの岸に到達するのである。阿難よ、またこの劫がつきてこの世の終るときに、大地は大火焔と化してあらゆるものがみな悉く燒きつくされるのに、ひとり金剛山だけはこのことのないやうに、念佛の法もまた他にうち壞られることがないのである』といつてある。また『般舟三昧經』の「問事品」には、『念佛三昧はもろ〳〵の功德の中では最もすぐれた尊いものである』といふて、一心に念佛三昧の修むべきことを說いてあるのである。

抑も道を求めて退轉することのない境地に至るには難行道と易行道との二種があるが、その容易につとめられる道とは卽ち念佛のことである。かの『十住毘婆娑論』の「易行品」にはこれを說いて、『元來佛法には無量の門がある。恰も世間の道に難と易とあり、陸路を步行するは苦しく、水道に乘船するは樂しきが如く、菩薩の道にも勤めはげみて至るものと、信方便の易行を以て速かに不退轉の境地に達するものとがある。乃至阿彌陀佛等の諸佛及び諸の大菩薩の名を稱へ、一心に念ずれば不退轉を得ることが出來る』といつてある。そしてその文の中に過去現在の百餘佛、彌勒、金剛藏、淨名、無盡意菩薩などの百餘の大菩薩をあげて、その中に阿彌陀佛を讃め嘆へてあるが、以てもろ〳〵の行の中にはたゞ念佛の行が最もつとめ易く、證り易いから、あらゆるつとめの中では最もすぐれたつとめであることが知られるのである。

また『寶積經』の九十二に、『もし菩薩あつて、いろ〳〵の務めをなし、七寶の堂をつくつて三千大千世界に遍く充たしめて私は供養をしても、私は決して悅びとしないであらう。けれどもし菩薩が六度の行をたもつて、一首の歌にもせよそれを讀誦し、修行し、人のために說き演べてこそその人は私を供養するのである。そのわけは諸佛の菩提はもと敎法を聞いて得た菩提であつて、いろ〳〵のつとめをし、七寶の堂を建立して得たものでないからである。されば經を讀み、修行し、法を說き演べる菩薩に親んで供養をせよ。經を誦み、修行し、法を說き演べる菩薩はまた三昧に入つた菩薩に遙かに及ばないから三昧に入つた菩薩に、更に智慧を修めるすぐれた菩薩に近づいて供養をせよ。智慧の業はあらゆる三界の所作にすぐれて比ひのないものであるからである』といひ、『大集經』の月藏分

の歌に

『寂静はみ佛の境界にて
浄き菩提に住み給ふ
人もし住禪を謗らむか
これみほとけを謗るなり

人もし百千の堂を破り
百千の精舍を焚かんより
住禪のものを謗らむに
その罪きはめて重からん

人もし飲食や衣服もて
住禪のものを供養せむに
この人、無量の罪消えて
またも悪趣に墮ちざらむ』

とあるが。一般の静寂の境涯に入つてさへかやうな功徳があるが、ましてあらゆる三昧にすぐれる念佛三昧に於てはいふまでもないことである。

八　念佛の信と誹毀

『般舟三昧經』の説によれば、佛の教法を聞くことは不可思議な過去の因縁によるものであるとのことである。然らば教法を聞くものはみな悉く信ずべきであるのに、これを信ずるものと信ぜないものとがあるといふことは如何といふに、『無量清浄平等覺經』には『善き男女があつて無量清浄佛のみ名を聞いて天に踊り地に躍るほどに歡ぶものは過去の世に佛のみもとで修行をした菩薩で、凡愚なものではないが、み名を聞きながらも信ぜないものはみな悪趣の世界から人間界に生れて來て

も、過去世になした惡事が未だ消え失せないので、それに障碍られて解脫をえないのである』といふ。『大集經』には『もし衆生あつて量り知られぬ程の佛のみもとでもろ〳〵の德本を植たものはこの佛の十力四無畏の法と三十二の相好のいはれを聞くことができるが、下劣なものはかやうな正しい教法を聞くことができない。よしや聞くことが出來ても必ずしもよく信ぜないのである』と說いてあるが如く、まことに教法を聞く程の過去の善根があるならば、それを信ずべきで、謗る道理がないけれども、善根の薄いものがその教法を聞くことができるといふことは如何なる因緣によるのか知るべくもないが、多くの黑豆の中に靑い豆のあるが如く、教法を聞きながらも信ぜないものゝあるのは過去世の善根の少いことに起因するものであらう。

然らばその教法を信ぜず、これを疑ふものは如何といふに、『稱揚諸佛功德經』にはその罪の報いを擧げて、『阿彌陀佛のみ名をたゝへ、その功德を讚めるのを聞いて信ぜないで、しかも謗るものがあるならば、五劫の長い間、地獄に墮ちていろ〳〵の苦しみを受ける』といつてある。だから教法を信ぜず、往生の業をもつとめず、淨土に生れたいと願ふ心のないものは淨土に生れることができぬが、然しまた、佛の智慧に疑を抱きながらも、淨土に生れたいとの願ひから往生の行をするものは、『大無量壽經』に、『若し衆生の中に佛を疑ふ心で、もろ〳〵の功德をつんで、それによつて極樂世界へ生れたいと願ふものがあるならば、それは不可思議の智慧、說くべからざる智慧、ひろく一切の法門を知り盡したる智慧、並びなき最上の智慧なぞを具へたまふ佛の智慧を了らぬものである。これ等の佛の智慧を疑ふて信ぜないけれども、しかも一方に善因善果、惡因惡果の道理を信じて、善根の本たる無量壽佛のみ名を稱へて、その功德によつてかの國に生れたいと願ふものもある。かやうな人々はかの宮殿のうちに生れて、五百歲の間、佛を見ることが出來ず、また菩薩聲聞の聖者達を見ることが出來ない。それ故かの國ではこれを胎生といふのである』と說いてあるが如く、佛の智慧を疑ふ罪は惡道に墮ちるに等しいものであるけれども、淨土に生れたいと願ふから、佛はこれを愍ませられて、大悲の願力でかの宮殿へ生れさせられるのである。

九　衣食の助緣

凡そ道を求めるには衣食もまた缺くことのできないものである。この世の生活をたてるものは、衣食に窮することがないから、念佛には何等の妨げがないのである。また家を捨てゝ道を求めるもので

も、根機のすぐれたものは、（八九）かの雪山大士が水を呑み果實を食ふて三昧に入つたが如く、草を敷き鹿の皮を衣として、草を食ひ、果實を食ふて居り、中位のものは常に食を乞ふて身には塵埃すて場にすてられた襤褸屑を集めてまとひ、根機の劣つたものは法を說いてその信者から施しを受けて、欲少くて足ることを知るものであるが、まして佛の弟子が專心に正しい道を修めて貪り求める心がないならば、衣食は自然に具はるのである。されば『大論』には『貪るものは供養を受けることが出來ないが貪ることのないものはよく絹與せられて缺乏することがない』といひ、『大集經』の月藏分には、『欲界の六天を初めとして日月星宿天龍八部が佛の前に誓をたてゝ、「世尊よ、もし世尊の御弟子のかたがたでよく法に順ふて多く言葉と意の上に表裏なしに修行をするものがありますならば、私ごもはみなその人を護り、養ふて、なくてはならぬものはみな悉くそなへ、それに事缺くやうなことはさせますまい」といつた』といふことが記されて居るのである。

これについて凡愚なものは日常の所作の上に始終意と言葉と相違して、身と言葉と意には相應しないが、かやうなもろ〳〵の神々や、天龍八部の守護がないのである。而して衣食の上には如何にすべきかとの懸念をするやうなものは、初めから懈つてゐて道を求める心のないものといはなければならぬ。もし眞に菩提を求め、淨土に生れたいと願ふものであるならば、たとひ自身の命をすてゝも、佛の定められた禁戒を破るやうなことはないのである。されば命のあらん限り勤めはげんで永久の微妙な果報をこそ願ふべきである。

然らば末の世の戒律を守ることのできぬものは如何といふに、『大集經』によれば、『家をすてゝ髮を剃り、袈裟をきるものは、たとひ戒行を守らなくとも涅槃を得るに間違ひのない身に定まるのである。もしこの戒行をたもたないものを惱まし、詈り謗つてこれを打ち、衣や鉢を奪ひ、日用の道具を奪ふものは過去未來現在の三世の諸佛を害ひ傷つけ、神々の眼をえぐり拔くものであつて、諸佛の三の寶を滅しつくし、神々や人間から利益を奪ふて地獄に陷し入れるものである。乃至時にすべての天龍を初めとして鬼神はみな掌を合して「世尊よ、私ごもはよしや世尊の御弟子がたゞ戒行を守られないにしても、髮を剃り、袈裟を身につけたものがあるならば、師長に仕へるかのやうに守護し、なくてはならぬものはみな悉く具へて事を缺くやうなことはいたしませぬ。もし私ごもの中でかやうな御弟子たちを惱まして害を加へるやうなものがありますならば、そのものを苦しめて私ごもの交りを絕つでありませう」と申し上げた』といつてある。然らば戒律を守らないものでさへもかやうな利益を

受けるからには、まして戒行をたもつものに於ては尚更のことであり、大菩提の心を發して念佛するものに於てはいふまでもないことである。

かやうに戒行を守らないものでも天龍八部に護持せられるならば、『梵網經』に五千の鬼神が破戒のものを言つて追ひ拂ふと說き、『涅槃經』に國王、群臣を初めよく戒行を守る比丘は、走つて破戒の比丘を責めよとあるのは如何といふに、道理に叶ふて責めるならば、佛の敎法に順ふことゝなるが、道理に叶はないならば却つて佛の敎法に背くものであるから、何等相違することがないのである。

十　敎法師友の助緣

凡そ道を求めるにはまづ佛の定めさせられた禁戒に精進して、よく障碍を除いて懇切に敎示するの師匠を求め、よくこれに師事してその敎を仰がねばならぬ。されば『大論』には『雨が低きにつれて流れるが如くに人も不遜の心があつて謙讓でないならば、法の雨水が入らないから、よく善き師匠を敬ふべきである』といつてある。次にともに嶮岨な道を踏み越えて歩むに足るやうな友を求めて、一生互に策勵し逢ふて、佛を念ずるに應はしい聖典を常に手にしてこれを披いて讀み學ぶべきである。念佛に應はしい聖典とは、前に引用した數々の經論の文章はみなことゝく念佛のことに關して說いたものであるが、今正しく西方淨土に生れるための觀法と修行、並びに品の種類の人々の修行によつて得られる果報については『觀無量壽經』一卷、彌陀の本願と極樂淨土の種々のこまかな相については『大無量壽經』二卷を、諸佛の相好、並びに觀想によつての滅罪については『觀佛三昧經』十卷（或は八卷）にまさるものはない。佛の相好や三昧の勝れたことを明すには『般舟三昧經』三卷（或は二卷）、『念佛三昧經』六卷（或は五卷）。修行の方法を說き明すものには、上の『觀佛三昧經』、『般舟三昧經』、『念佛三昧經』に加へるに『十往生經』一卷、『十住毘婆娑論』十四卷（或は十二卷）。日々に經文を讀誦するには『小阿彌陀經』一卷。詩歌によつて概說するには『淨土論』一卷、修行の方法については『摩訶止觀』十卷、『觀念法門』一卷、『六時禮讚』一卷。疑義の解答については天台大師の『十疑論』一卷、道綽禪師の『安樂集』二卷、慈恩大師の『西方要決』一卷、懷感禪師の『群疑論』七卷。極樂淨土へ往生した人々についての記錄には迦才の『淨土論』三卷、『瑞應傳』一卷にしくものはないが、その他の經論は一々列擧しつくせない位である。

以上幾多の經論を取捨し、抄略して前後を亂し、あまつさへ幾多の言葉を挿んで此書を輯錄した

ので、大方の謗りを招くことゝ思ふが、文の眞意は何れも失はないつもりである。されど尙誤謬があるならば、必ずしも私の引用した文章に囚はれるの要はなく、自由に取捨せらるべきである。たゞ私としては大方の謗りは敢て辭するところではないのである。

稿を起してこゝに半歲を閲みし、以て今その完結をみたるも、たゞ偏にこの功德によりて臨終の際に、その功德の無量無邊にまします阿彌陀佛を見奉り、われも人もみなもろともにかの佛を觀奉りて智慧の淸らかな眼を得、無上の菩提を願ひ求むる意より外はないのである。

横川法語

解題

僧都を辭して横川に隱棲し屏居して專らに著述に從ふた源信僧都の著述の今に現存するものは七十七部百四卷、その名の存するものが八十部八十三卷の多きに達してゐるが、日本佛敎の大乘敎的樹立とその發展の後を受けて僧都には、その『往生要集』の序文に「深遠な敎理の文とその修行とを一々數へあげれば數限りもないことで、智慧のすぐれたたゆみなく努めはげむ人には別に難しいことでもないが、私のような智慧もなければ、至つて凡愚しいものにはとても力の及ばないことなので……」とあるに徵すれば、僧都の著述の歸趣がいづこにあるかといふことが、以て伺はれるのである。蓋、僧都の『往生要集』は『觀心略要集』と俱に觀心と稱名念佛とをならびあげてゐるが、今この源信の作と傳へる横川法語は、その母に送つた『觀心往生偈』と俱にたゞ念佛によつて淨土に往生することを明したものである。『往生要集』が僧都の幾多の著述大系を代表するものであるならば、この一紙に充たぬ法語こそ僧都の信生活の全體を表現するものといふべきであらう。

横川法語

源信作

邊際のない量り知られぬ遠い〳〵むかしから苦海に輪りに廻りて、こてものがれる手がゝりの絶えてなかつた地獄、餓鬼、畜生の三の惡趣からのがれて、生れがたい人間に生れたといふことは、これほどのよろこびがまたこあらうか。してみればたこひごれほど身は賤しくても、强きは弱きを食ら
ひ互に害ひあうてしばらくも安らかなこきのない畜生の苦しみに劣らうや。たこひ家がごれほど貧しくても、飢こ渴きにいろ〳〵の苦しみを受ける餓鬼の苦しみに遙かにまさることであらう。またこひ世の中のいろ〳〵のこごが、自分の心の思ひ通りにならぬにしても、恐ろしい地獄の苦しみにくらべてみれば、こてもくらべものにならぬ。心に憂ひがたえないで住みづらいといふことは、やがて穢惡はてたこの世を厭ふよすがこなるから、人間に生れたことをよろこばねばならぬ。

凡愚なものゝ心ではよもや佛の救濟にはあづかれまいこ疑ふてはならぬ。煩惱の雲にこざゝれた凡愚なものゝ信心は淺いけれごも、五劫といふ長い間思案に思案をかさねさせられた彌陀の大悲の誓ひ

が深いから、おたすけにあづかりたいと願へば、間違ひなく淨土へ參らして頂けるのである。散り亂れた心でとなへてはよもやお迎へにあづかれまいと疑ふてはならぬ。彌陀の誓ひは諸佛の誓ひにすぐれて、僅かに二聲三聲となへるものまでも、となへれば必ずその人の前に現れてお迎へ下さるのである。かやうに佛のみ名には廣大な功德があるから、またと遇ひがたい尊い佛の本願に遇ふことのできたことを悅ばねばならぬ。

また煩惱の罪障りが重いので、これではよもやお淨土へは參れまいと疑ふてはならぬ。煩惱の心は智慧のない凡愚なもの、性質であるから、煩惱の外には別に心はないのである。煩惱を何一つ不足なく具へてゐる凡愚なものには、どうしてこの煩惱をうち拂ふことができやうや。してみれば煩惱に心をかけないで、命の終るまで心は散り亂れて煩惱のたえることはないが、かやうなものをおめあての阿彌陀佛の御誓ひであると深く信じて念佛すれば、彌陀の不思議な願力によつて、佛のお迎へにあづかつて蓮華の臺に乘ることが出來て、その時こそあらゆる煩惱が消え失せて淸らかなさとりの心がえられるのである。たとひ煩惱のけがれに染まつた心からとなへても、彌陀の御誓ひの念佛であるから、泥の中に生へながら濁りに染まぬ蓮華のやうで、御たすけにあづかるに間違ひはないのである。

選　擇　集

解題

『選擇本願念佛集』、略して常に『選擇集』といつて居る。親鸞聖人の師たる源空、即ち法然上人の代表的主著である。法然上人は我邦に於ける民衆の宗教たる淨土教の獨立的創始者であつた。從來、長く民衆の生活に直接の交渉なき高き冥想と、また民衆の精神を蠹毒すること多き低級なる祈禱とを以て佛教の全躰と考へ、そこに僅かに念佛往生の思想の寄生を見て居たものを、法然上人はその自ら體驗せる信仰眼を以て、そが寄生思想を獨立せしめ、從來の佛教はこれを時代に枯死せる聖道教とし、それに對立して眞實の生命を輝かす所の淨土教を打ち建てられたのである。ために當時心靈の飢渴に苦しんで居た多くの人々は上は貴顯碩德から下は文字も知らぬ凡人まで、翕然として法然上人の吉水の草庵に集まり、その教を聞いたものである。而してその中に時の宰相九條兼實公がそが歸依者の一人としてあつた。『選擇集』は實に上人が公の懇請を機緣として、自己の信仰體系を赤裸々に叙述せられたものである。

本書全編、上下二卷十六章より成り、第一章に於て聖道淨土の二教を批判し、以て淨土教獨立の旗幟を鮮明にすると共に、第二章には稱名が眞實の宗教的生命を存する行たることを明らかにせられ、第三章以下、淨土三部經によつて如上の意義を更に的確に、大膽に證明せられたものである。親鸞聖人は本書を以て「希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり」といつて稱嘆せられた。親鸞聖人の宗教の生るゝ最大動源をなしたものとして本書は最も忘れ難きものである。今、こゝには便宜上、上下の卷數を省いて譯述した。

選擇本願念佛集

源空記

南無阿彌陀佛

念佛こそは眞實の淨土に生るゝ根本の業である。

第一章　教の批判

道綽禪師――釋尊がその一代の間、說かれた教を批判して、聖道と淨土の二つの教に分ち、然も聖道の教を捨てゝ、淨土の教に歸せられた方である――は其著『安樂集』上卷に次のやうに述べて居られる。

『すべて生あるものは皆佛となるべき本性があるとは、佛の教であるから、今いふ如き無始より今日までの永い間に、幾度も多くの佛に値つて少しは迷界から向上して居るべきではあるまいか。然るに何故、今日まで流轉を續け、煩惱の焰に包まれた迷ひの世界を脫出し得ないのだらうかといふ

疑ひが起り得る。併しそれは眞に佛の勝れた教を聞き、それを體得しないからのことである。凡そ大乘の教によれば、佛の覺りを開く道は二つある。それは飽くまでも智慧を磨いて眞理を見究め、これをこの身に體驗して迷ひを離れやうといふ聖者の道（聖道）と、我身の無力を痛感しひたすら佛の大慈悲をうけて、その淨土に生れようとする凡人が往生の道（淨土）との二つである。然るにこの二つの中、初めの聖者の道は今の我々には實行することが甚だむづかしい。なぜといふに、第一に大聖釋尊と遙に時代を隔てゝ、その教法の影はうすらぎ、人格の感化を遠ざかつて居るし、第二には聖者の眞理は深いけれども、それを理解すべき我等の能力は乏しいから。

聖道の困難なる第一の理由については『大集月藏經』によれば、釋尊は「我が死を去ること遠き末の世に生れた人々は修行をして道を進んでも、恐らく一人も眞の悟を得るものはなからうから」と仰しやつた。そして現在は實にこの釋尊の死を隔たること遠く、濁り汚れた末世である。この時に於て我等が救はれ得る道は唯一つの淨土往生の教より外にはない。けに『大無量壽經』はこの淨土往生の教であつて、かの經には「縱令その一生涯、惡を造り罪を犯してきたものでも、臨終に十聲なりともわが名を稱へたものは必ずわが淨土へ往生せしめよう。でなければ私は佛にはなりませぬ」といふ如來の本願が示されてある。又第二の理由については、今の人々は皆しづかに己が力量を省みなければならぬ。大乘の教にとくこころの眞如とか、實相とか、第一義空とかいふ理を心においてみたことさへもあるだらうか。又小乘の教にいふ惑を斷ち、迷を去る修行に堪へ得る力をわれ等は有して居るだらうか。それどころか、再び人間や、天上界へ生れるためには、五戒や、十善を守らねばならぬ。これの出來る人さへ極めて希である。否々實にわれ等の惡をなし、罪を造ることは恰も暴風駛雨の荒れ狂ふ如くでないか。かゝるわれらはどうして聖道の御教によつて安住し得よう。さればこそ佛はわれらを慈しみたまひて、勸めて淨土を願はしめたまふ。たとひ生涯惡を造りつゞけるわれらでも、たゞ專一に心をかけて念佛すれば、なにものにも障へられず、必ず淨土へ生れることが出來る。人々よ。よく考へて我等の前に唯一つ開かれた淨土への道へ進まうではないか』

思ふに古來から、いづれの宗もその立場を明かにするために、佛教の種々の相を批判してこれを分類し統一して居る。有相宗（法相宗）の如きは、*有・空・中の三時教に、無相宗（三論宗）の如きは、*菩薩藏聲聞藏の二藏教に分類統一して居る。華嚴宗は小・始・終・頓・圓の五教に、法華宗は藏・通・別・圓の四

教と乳・酪・生・熟・醍醐の五味に、眞言宗は顯・密の二教に批判し系統づけてゐる。今この淨土宗は、道綽禪師の意を受けて、聖道と淨土の二教に、一切の佛教を攝めるのである。

その中、聖道の教には、大乘と小乘との二つがある。その大乘は菩薩が佛になる道の教であつて、顯教、密教、權大乘、實大乘の別があるが、道綽禪師の時代には、その中、顯教と權大乘とのみ宗旨として成立してゐなかつたから、禪師はこの二つを指して大乘と云はれた。而しその後漸次密教と實大乘が宗旨として形造られて、今日では、眞言宗、佛心宗（禪宗）、天台宗、華嚴宗、三論宗、法相宗、地論宗、攝論宗の八宗は、みな大乘といはれる。小乘とは、聲聞と緣覺とが羅漢果といふ證りを得る道の教であつて、俱舍宗、成實宗、律宗等はこれに屬する宗旨である、かくの如き大小の二乘が聖道と云はるゝ教であるが、大體から云ふ聖道の意味は、大乘小乘を論ぜず、この世に於て、聲聞、緣覺菩薩、佛の何れかの道を修めて、この世の內にその證果を得るにある。

淨土の教とは、この中に又二つある。卽ち淨土に往生することをのみ直接に說く教と、他のことを說く傍らに於て淨土に往生することを間接に說く教とである。第一の教に屬すべきものは、一代佛教の中、『無量壽經』、『觀無量壽經』、『阿彌陀經』の三つの經典と世親菩薩が著された『往生論』とである。

第二の教には『華嚴經』、『法華經』、『隨求陀羅尼經』、『尊勝陀羅尼經』等の經と『起信論』、『寶性論』、『十住毗婆沙論』、『攝大乘論』等の論が含まれる。

道綽禪師がかやうに教を批判せられたのは、聖道を捨てゝ淨土の教に入らしめやうためであることは前に引いた『安樂集』の中に聖道の教が證り難いといふ二つの理由を擧げてゐらるゝ點で充分うかがはれる。勿論、かく聖道、淨土の二つを以て教を批判せられたのは、道綽のみではない。曇鸞、天台、迦才、慈恩等の諸師にも皆この意はあつた。曇鸞大師――道綽の先輩である――はその著『往生論註』に、『龍樹の『十住論』に依れば、菩薩、不退轉を求むるに難行と易行との二種の道ありといふ。然るにその難行道によりて不退轉を求むることは、濁亂の世、無佛の時に於ては殆ど難かしい。その事情の二三を擧ぐれば、一には異教の思想は菩薩の正法と混同せられ易い。二には悟り澄まさんとする傾向が大慈悲を障へる。三には反省を知らぬ惡人は他の德を破る。四には浮世の幸福が人倫を壞す。五には唯これ自力の道にして他力に持たるることがない。これ正しく現前の事實である。これ誠に陸路の步行の困難なるが如くである。これに反して易行道は、たゞ如來を信じて淨土に生れむと願へば、佛の願力によりて、やがてかの淸淨土に往生することが出來、佛力に攝められて、卽ち大乘正

定の聚りに入ることである。正定とは卽ち不退轉である。まことにこれ水路の乘船の樂しさが如くである』といふて居られる。その難行道は、聖道の教に相當し、易行道は淨土の教である。天台の『十疑論』にも、迦才の『淨土論』にも、同じ心持を書いて居られるが、慈恩大師の『西方要決』の言葉を引けば、『釋尊がこの地上に御生れになつて、その一代の間、廣くあらゆる人間の能力に應じて、種々の教を說かれた。その時代に生れて、直接釋尊に逢うた人々の中、能力の勝れた人々は、それ〴〵、聲聞とか、緣覺とか、菩薩とかの悟を得た。而し德も薄く、直接逢へなかつた人々には、淨土に生れる道を行めよと教へられた。專心に彌陀如來の御名を稱へつゝ、道を行むるものは、淨土に往生する。そのわけは、彌陀如來の本願によるからで、一生涯念佛を稱へたものは勿論、臨終の時に十聲稱へたものでも、きつと往生することが出來るのである』とあり。又その後序には『われらは末の世に生れた。釋尊は、すでに遠き過去になくなつてゐられる。行む可き教としては三乘の教がある。しかし、それは六ケ敷くて、誇れる見込はつかない。而かも、この世は動亂の底に陷り、啻さへ智慧薄く、愛着の念の厚いわれらを、尙ほも闇へ闇へと溺れさす。かうした世に居るわれらは、急いで闇の世界を離れ、心を眞實の淨域に栖す可きではないか』と云ふてある。この中の三乘とあるのは、卽ち聖道の教であり、淨土とか、淨域とか云つてあるのは、淨土の教である。

淨土の教を學ぶ人々よ、設ひ、聖道の教の研究を續けるとも、一度、淨土の教に、心を向けたならば速かに聖道を捨て去る可きである。かの曇鸞大師の如きも、『中論』、『百論』等の四論の講議を捨てゝ、一向に淨土の教に歸したまひ、道綽禪師の如きも、『涅槃經』の講釋を擱いて、西方淨土に生るゝ念佛の一行を弘められた。上古の賢哲、猶かくの如きである。ましてや愚魯なる我等は、どうしてこれに隨はないで居られやうか。

第二章　行の正雜

道綽禪師によつて、外に對して批判され、盛り立てられた善導大師によつて、内に向つて、その願生淨土の行が批判されることゝなつた。善導大師はその行に、正行と雜行とを分け、自ら雜行を捨てゝ、正行に歸せられた方である。その著『散善義』には、次の樣に云ふてある。

『行に就いて信心を立てることを述べやう。それに就て行といふことから説明するに、行には正行と雜行との二つの種類がある。その中で正行とは、もつぱら淨土に往生することを説き明してある『大無量壽經』『觀經』、『阿彌陀經』にもとづいて、行をなすのをいふのである。卽ちその行とは、一、心をひとすぢにして專ら『觀經』、『阿彌陀經』、『無量壽經』を讀誦し。二、心をひとすぢにして專ら淨土の阿彌陀佛とその國土の莊嚴とを思想し、觀察し、憶念し。三、心をひとすぢにして專ら阿彌陀佛を拜み。四、心をひとすぢにして專ら阿彌陀佛のみ名を稱へ。五、心をひとすぢにして專ら阿彌陀佛を讃めまつり、且つ供養し奉ることをいふのである。

所がこの正行がまた二つに分れて、その一は心をひとすぢにして、專ら阿彌陀佛のみ名を稱へ時間の長し短しにかゝはらず、行住坐臥つねに續けてしばらくも息めずに行めるのをいひ、それをば往生の正しき業と名づけるのである。何となれば、この業こそ阿彌陀佛の本願に順ふた業だからである。その二は稱へる行以外の讀誦したり、觀察したり、禮拜したり、讃嘆したり、供養したりする行をいひ、それをば念佛を助けるための業と名けるのである。

かくてこれ等の往生の正しき業である念佛と、念佛を助けるための業とを除いた以外の善事は悉くみなこれが雜行と名づけらるゝものなのである。そしてそが念佛と念佛を助けるための業とを修めるものは、心がいつも阿彌陀佛に親しみ近づいてゐて、阿彌陀佛を懷ひ出すこゝろが斷えぬから、その業をば無間と名づけるのである。けれど後の雜行を行めるものは、それを廻向げて往生することは出來るが、阿彌陀佛を憶ふ心が斷えがちであるから、その業をば疎雜の行と名づけるのである。』

この文を見ると、二つの意をうかゞふことが出來る樣である。卽ち淨土に往生する行の相を明かにしたまふ意と、二つの行の得失を批判したまふ意とである。

その往生の行の相について、善導大師の意をうかゞふと、往生の行は澤山あるが、正行と雜

行とこの二つに分つことが出來る。初めの正行は、見方によつて二つの分類の仕方がある。卽ち正行の五種をそのまゝ數へる場合と、その五種を正業と助業の二種に攝めて見る場合とである。その五種と數へる場合の正行とは、前に擧げた善導大師の解釋の如く、讀誦正行、觀察正行、禮拜正行、稱名正行、讚嘆供養正行である。二種と見る正行とは、正業と助業とであつて。五種正行の中、第四の稱名を往生の正しき業、卽ち正定の業とし、他の四種を念佛を助けるための業、卽ち助業とすることゝ、前の『散善義』に述べてある通りである。しからば、何故、五つの正行の中で、獨り稱名念佛を正定の業とするかと云へば、善導大師は『阿彌陀佛の本願に順ふた業だからである』といふて居られる。げに稱名念佛は、彌陀如來の本願の中に選ばれた行である。故に之を修するものは、佛の本願のみちからによつて、必ず佛國に生るゝことが出來る。その本願の義については、次の章に至つて述べることゝする。

次に雜行といふのは、正行を除いた他の一切の善行を云ふので、その有樣は、非常に雜多だからこゝで述べる遑はないが、今五種の正行に對して、五種の雜行を立てゝ見やう。卽ち讀誦雜行、觀察雜行、禮拜雜行、稱名雜行、讚嘆供養雜行である。第一の、讀誦雜行とは、『觀無量壽經』等の淨土に往生することを說く經以外の、種々の敎典を讀誦すること、第二の觀察雜行とは、淨土以外の本體や現象を思ひ浮べみること、第三の禮拜雜行とは、彌陀如來以外のあらゆる神佛や諸天や人格者を禮拜恭敬すること、第四の稱名雜行とは、彌陀如來以外の神佛や諸天の御名、人格者、親近者等の名を稱へること、第五の讚嘆供養雜行とは、阿彌陀如來以外のあらゆる神佛や諸天や人格者を讚嘆したり、捧げものをしたりすることを云ふのである。この外、施しをするとか、戒を守るとか、數限りない行があるのだが、皆この雜行といふ名の下に、攝められてしまふのである。

次に正行と雜行との得失を批判せねばならぬ。前の『散善義』の文から見て、得と失と相對した場合を五つ擧げることが出來やう。卽ち親と疎、近と遠、無間と有間、不廻向と廻向、純と雜である。

第一、親と疏と相對して考へて見る場合。正行を修するものは、常に阿彌陀佛に親しみ、阿彌陀佛を憶ふ。善導大師は『定善義』に『衆生が口でいつも佛のみ名を稱へるといふと、佛が直ぐにそれを聞こし召し、體でいつも佛を禮敬むといふと佛が直ぐにそれを見そなはし、心でいつも佛を念ずるといふと、佛が直ぐにそれを知ろしめし、また人々が佛を憶念するといふと、佛が直ぐにその人達を憶念したまふのである。而してかやうに阿彌陀佛と念佛する衆生とは、身も口も意も更に相離れず、その

間、最も親しい縁があるといふのである』と云ふてある。然るに雜行を修めるものは、阿彌陀佛の御名を稱へないから佛は之を聞き給はず、佛を禮拜しないから、佛は之を見給はず、佛を念ぜないから佛はこれを知り給はぬ。又、佛を憶念しないから、佛もこれを憶念し給はぬ。雜行の人と佛との身と口と意との行は常に離れてゐる。故に、雜行を疎の行といふのである。

第二、近と遠と相對して考へて見る場合。正行を修めるものは、何かにつけて阿彌陀佛に近よる。『定善義』に、『念佛する人達が佛を拜みたいと願へば、佛は直ぐにその念に應じて、そが目の前へ現はれさせられるといふ程、近い緣があるのである』と述べてある。これに反して、雜行を修めるものは佛を見やうと願はないから、佛が眼前に現はれ給ふことがない。從つて、佛から益々遠ざかるのである。

第三、無間と有間と相對して考へて見る場合。正行を修めるものは、緣にふれ、事に當つて、絕え間なく、阿彌陀佛を憶ひ出すから、無間といひ、雜行を修めるものは、阿彌陀佛を憶ひ出すことはあまりないから、有間といふのである。

第四、不廻向と廻向と相對して考へて見る場合。正行を修めるものは、自分の修めてゐる正行で往生したいなぞ、思はず、唯、如來の願心を御受けして、自然のまゝに、往生の業を滿足することになるのである。善導大師は『玄義分』に、『今この『觀經』の十聲の念佛には十の願と行とがそなはつて居る。どうしてかといふに、「南無」といふのはすなはち歸命といふことである。また願をおこし、さけるといふいはれである。「阿彌陀佛」といふのはそれが卽ち行なのである。かうした意味があるから、必ず往生することが出來るのである』と云ふてある。この文は稱名を中心とする五正行が、われらから心を運ぶのでなくて、佛から與へて下さるのであることを充分あらはしてゐると思ふ。雜行を修めるものでは佛に心を運んで、往生を願ふことであるが、そうしたことが實際に於てわれらにごれだけ出來やう。然しそれは兎に角にして、雜行は心を運んで往生を願へば、往生の因は成立するが、さもなければ、往生の因は成立しないものなのである。

第五、純と雜と相對して考へて見る場合。正行を修めるものは、如來の願心に順ふから、その行は純粹な極樂への行であるが、雜行は純粹に極樂への行ではなくて、不統一に種々な神佛や諸天や人格者に通じ、所謂十方の淨土に通ずる文字通の雜行であるのである。

而して、往生の行について、かやうに正雜の二種に分類をせられたのは、たゞ善導大師一人では

ない。道綽禪師、懐感禪師、又日本の惠信僧都が念佛によつて往生する道こ、その他の種々の行によつて往生する道ここの二種を分ち、淨土の教の行の問題を論じてゐられるのは、この正行、雜行の批判こ同じなのである。

更に二つの行の得失を、一層明かにするために、善導大師の『往生禮讃』の一文を、引用しよう。

『若しも能く上の如く一生涯を期して、絶え間なく御名を稱へて居れば、十人は十人ながら、百人は百人ながら悉く皆往生することが出來るであらう。何こなればこの者は外から來つて純一なる精神を亂すやうな雜緣に煩はさるゝなく、佛の本願に相應し、釋尊の教へにたがはず、諸佛の御語に隨順するものだからである。而して若しもその反對に專らなる修行を捨てゝ、雜多なる宗教的行爲を修めむこするやうなものがあれば、その者の往生し得ることは殆ごあり得べからざるここに屬する。蓋し彼の如きは常に雜緣に追立てられて純一なる精神を失ひ、佛の本願に相應せず、釋尊の教に違ひ、諸佛の御語に順はず、念ひを係けて憶想すること、打ち續かずして絶え〴〵であり、願ひ求むること、强烈こ眞實こを缺き、いろんな煩惱に妨げられ、懺悔の心なく、かの佛の恩を報謝する念ひも稀であり、心に輕慢を生じて名利の行に趨り、我情に囚はれて善き師や、友に親しまず樂んで雜緣に近づいて、自他の正しき往生の行を障ふるからである。余、近頃一般の教界を見わたすに、出家こいはず、在家こいはず、信仰こ修行こに於て、專一なるものこ雜多なるものこの異なりがある。思ふに至純の精神を以て專一に修むるものは凡て往生すべく、不純の心を以て雜多なる修行をするものは千に一も往生することが出來ないであらう。專雜の二つの修行の得失、これによつて知るべきである。

仰ぎ願はくば凡ての往生を願ふ人々等よ。能く自ら反省して、わが身、かの國に生れむここを願ひ求め、常に心を勵まして、己れに打ち克ち、晝夜怠りなく、一生涯を期して稱名念佛をいそしみ勤めて行け、その間、少しは苦しいやうではあるけれども、命終るなり、直ちにかのみ國に生れ、永劫變らぬ無爲の法樂を受け、佛こ成つて再び迷の世界にさまよひ出でざる境地に到達することが出來るのである。それを考ふれば實に愉快ではないか』

これらの文を見れば、雜行を捨てゝ正行をひたすら修むべきであり、雜行に引かれる心をよく內省すべきである。

第三章　本願の選擇

み佛の御名を稱へ奉る念佛が、淨土に往生する正しい行であることは、それが阿彌陀如來の本願の誓約だからで、『無量壽經』の上卷には、その佛の誓を次の樣に現はしてある。

『若し私が佛になる時、あらゆる衆生が至心に信じ樂つて私の國に生れたいと欲ふて、せめて十聲でも念佛して、もし生れることが出來ないならば私は佛にはなりませぬ。』

善導大師はこの本願を受けて、その著『觀念法門』に次の樣に示された。

『若し私が佛になつたにしても十方の人々がわが國に生れむことを願ふて、わが名をせめて十聲ばかりも稱へ、それで猶わが誓願の力に托して生るゝことが出來ないやうな場合があつたならば、私は佛にはなりませぬ。』

又、『往生禮讃』にも次のやうにいふて居られる。

『若し私が佛となつたにしても、十方の人々がわが名をせめて十聲ばかりも稱へて、猶生るゝことが出來ないやうな場合があつたならば、私は佛にはなりませぬ。然るに既にかの佛は現に極樂を構へて佛となつて居らるゝ。誓もとより重くして虛しかるべきではない。かくて衆生、稱念すれば必ず往生を得ること、當然の理といはなければならぬ。』

思ふに凡ての佛に總別の二種の誓願がある。總といふのは四弘誓願*であり、別といふのは釋迦佛の五百の大願、藥師如來の十二の本願などがそれである。今この四十八願は彌陀如來の別願である。然らば一體彌陀如來は、いつぐんな佛のみもとで、この本願を發したまふたのであらうか。それを『無量壽經』には說いて、『世尊阿難に告げたまふやう、「今を去ること、量りなき久遠のむかしに、錠光如來といふ佛が世に現はれて、量りなき衆生を敎化し、濟度して、みな道を得させ、そして自らも涅槃に入りたまふた。その次に光遠如來といふ佛が出世せられた。乃至處世といふ佛がたで五十三佛である。が次々に出世して、いづれも既に涅槃に入りたまうた。その次の佛は名を世自在王このたまふた。時に一人の國王があつて、世自在王佛の說を聞いて、心に歡びを感じ、やがて佛のさとりを得むこの、この上もない心を發し、國を捨て、王位をすて、沙門となり、名を法藏と呼んだ。才高く、德すぐれ、共に世の凡々ならぬものであつた。法藏比丘は世自在王佛の所に詣でた。乃世自在王佛は法藏比丘のために、至世自在王佛の所に詣でた。ひろく二百一十億の諸佛の國々の麤妙とその國の人天の善惡とを說き、且つ法藏比丘の心願にまかせ、

それらの國土の凡てを目のあたり見せたまうた。その時、かの法藏比丘は世自在王佛のお話をきゝ、且つ親しく諸佛の國土を拜見したから、こゝにこの上もない勝れた願を發された。かくてあらゆる世間に於て能く及ぶものゝない寂靜な心こそ、すべてのものに執着しない　志　こそで、五劫といふ永い間、思ひをめぐらし、淨土建立の淸淨の行をえらび求められた」。時に阿難、世尊に申すやう、「では世自在王佛の國土の壽命はいかほどでありましたか」。「その佛の壽命は四十二劫であつた」と世尊は御答へになりながら更に言葉をつゞけて、「時に法藏比丘は二百一十億の諸佛の淨土の勝れたところと、それを建立する淸淨の行とを選んでそれを攝め取られた『といつてある。この内にある選擇攝取（選んでそれを攝め取られた）とは、善い方を取り、善くない方を捨てる意味で、現はされた佛國の中に居る人人の善惡と、國土そのものゝ粗妙とを取捨せられたのである。その取捨の有樣は、法藏の四十八の願の上に表はれてゐる。先づ第一の願は、自分の建設する國には、地獄や、餓鬼や、畜生の居ないものでありたいと願はれたものであつて、これらのものゝ生活する國土を捨てゝ、これらの居ない國土を取られる法藏の選擇の願心を示すものである。第二の願は、往生したならば、再び地獄や餓鬼や畜生の生活にかへることがないことを願はれた。かくて第三、第四と順次に四十八の本願に於て、その選擇の願心を表現されたのである。その、第十八番目に、念佛によつて、佛國に往生することが出來る願が示されてある。この願心こそ法藏の本願の中心である。法藏が世自在王如來に見せてもらはれた色々の佛土の中には、ものを施すといふ行爲を以て、往生の行とする國土もあつた。その外、或は戒をまもる行爲や、或は耻辱を忍ぶといふ行爲や、或は父母に孝養したり、師長に奉事したりすることや、或はその國の佛の名を稱へることや、或はかやうな一つの行でなくて、多くの行や、或は多くの國土に一つの行で行けるのやなど、往生の行は種々不同であつた。今、それらの中で、あらゆる諸行を捨てゝ、專ら佛號を稱へることを往生の行に選び取られたのである。

然らば、何故、一切の諸行を選び捨てゝ念佛の一行のみを選び取り、以て往生の本願とした まふたのであらうか。この聖意はわれらの淺い智慧で解釋すべきではなからうが、今、それを試みに考へて見ると、二つの意義をうかゞふことが、出來る樣に思ふ。二つの意義とは、勝劣の義と難易の義とである。勝劣の義といふのは、唯それ自身としても、諸行よりははるかに勝れてゐるから、勝れた念佛を選び取られたと云ふのである。何んになれば、名號はあらゆる德をおさめたものであるが、別ても彌陀の名號は彌陀如來が、自分の内に誇られたものと、外に向つての用とこの一切の德が攝ま

つてゐるのである。然るに他の行は、各それだけの功德しか持たず、一切をおさめるこいふことはない。例へば、家屋こいふ名字の中には、柱や、梁や、椽なごの一切の家具を含んでゐるけれども、その柱や梁なごの家具の一々の名字の中には、家屋全體を攝めることが出來ない樣なものである。それだから、佛の名號の功德はあらゆる一切の功德に勝れて居るから、劣つてゐるものを捨て、勝れたものを取つて、本願こしたまふたのであらうか。

次に難易の義こは、實行するものから云ふこ、念佛は他の諸行こ比べて、非常に修め易いこの意である。善導大師は『往生禮讃』に『思ふにこゝに單に稱名を勸めて、觀想を作さしめざる所以のものは、衆生の障り重くして、觀ずべき佛身は微妙細であるのに、觀ずる心は麁漏を極め、常に荒れ狂ふて居るがために、その觀、成就し難く、佛、この狀を憐れみて、專ら稱名の易き道を勸めらるゝからである。この故に稱名念佛して居りさへすれば、卽ち往生することを得るのである』こいふて居られる。

又惠信僧都も、『往生要集』に次の樣に述べてゐられる。『あらゆる善事にはそれ〴〵の利益があつて淨土に生れるたねこなるのに、上述のやうにたゞ偏に佛を念ずることのみを勸めることは、決して餘の種々のすぐれた行を否定してのことではないのである。たゞ男こいはず、女こいはず、貴いものも身分の賤しいものも、その起居動作こ時こ場所こにかゝはりなく、たやすく修めることが出來、その上、命のまさに終らうこする時に臨んで、淨土に生れたいこ願ひ求める上に佛を念ずることにまさるものがないからである』こ。これらの文を見るにつけても、念佛は修め易いから、ごんなものにも修められるが、諸行は六ケ敷いから、ごんなものでも修めるこいふわけにはいかないここが知られる。それだから、すべて生あるものをして、平等に佛國に生れさすために、六ケ敷い方を捨てゝ、修め易い方を取り、以て本願こしたまふたのであらうか。

若し、佛像を造つたり、塔を立てたりすることを本願こしたまふたならば、貧乏なものや、餓えたもの達は定めて往生をあきらめて、泣くここであらう。然るに世の中には富貴のものは少いが、貧賤のものは甚だ多い。若し又、智慧や高才を以て、本願こしたまふたならば、愚鈍なものや、下智のものは、定めて往生の出來ぬここを悲しむであらう。然るに世には智慧あるものよりは、愚痴のものゝ方がいくら多いか解らない。又もし、多く聞き、多く見るこいふここを本願こしたまふたならば、見聞の狹い人々は往生の望みを絶ちなけきに沈むであらう。然るに世にあらゆるここを知つてゐる人は殆ごない。若し戒律を嚴重に守るここを本願こしたまふたならば、終りまで、戒を守り得なかつた人

や、始めから戒なごの保ち得ない人達は、定めし、往生し得ぬ苦しみにひたるこゝであらう。然るに、世に戒律をたもちつゞける人は、幾人あるであらうか。されば上に云ふた樣な諸行を本願こしたまふたならば、殆ご大抵のものは、往生が出來ないであらう。然れば、阿彌陀如來が、まだ法藏菩薩でましました時、いかなるものでも往生さしてやりたいこいふ大慈悲心に催されて、像を造つたり、塔を立てたり、智慧や戒律を持つたりする樣な諸行を本願こせずに、たゞ、あらゆる德を攝め入れた稱名念佛の一行を以て、佛國に生れさすこゝを本願こしたまふたのである。法照禪師はこの意を、『五會法事讃』に述べて居られる。卽ち『かの阿彌陀如來が、その修行中に、あらゆるものを漏すまいこ、弘い誓ひ立てられた。わが名を聞いて稱へるものは、すべて迎へよう。貧窮でも、富貴でも、下智でも、高才でも、多聞だらうが、淨戒を持つ人であらうが、よし、戒を破つたり、罪を犯したりしたものだらうが、たゞわが惠を受けて、念佛さへすれば、ごんなものでも、立派に往生させよう』こ。

今まで本願の興起から、選擇の意義をうかがうて來たが、然らばその本願は成就し、完成して、願修行者であつた法藏菩薩は、救濟者こしての阿彌陀佛こなつて居られるであらうか。『大無量壽經』を開いて見るこ、法藏の誓願は一々に皆成就されてある。法藏が建てられた極樂界中には、地獄、餓鬼、畜生等の惡い生活がない有樣を、『地獄、餓鬼、畜生こいふ惡い世界もない』こ說いてある。これ第一の本願が成就された相であり、又『その菩薩達は菩薩最上の位から成佛するまで、いか程年月がたつても、決して惡世界にかへるこゝがない』こ說いてあるのは、第二の本願の成就を示されたものである。かくの如く第一の願から第四十八の願まで、一つ〳〵、皆成就せられた。それだのに第十八の念佛往生の願ばかりが、ひこり、成就されないこいふこゝがあらうか。されば念佛の人は皆往生するこゝが出來るのである。今、その第十八願の成就された文を、『大無量壽經』の中に求めるならば『あらゆる人々が無量壽佛のみ名を聞いて、せめて一念でもこのみ佛を信じよろこび、――この心は無量壽佛のまごゝろから與へ給ふ所である――かの國に生れたいこ願へば、立ちごころにかの國に生るべき利益を得て、ほこけこなるに定められる』こ說いてあるのを見出すこゝが出來る。

凡そ法藏菩薩は四十八願を以て、淨土を莊嚴せられた。華も池も寶閣も、みな願力でないものはない。だのに、ごうして念佛往生の願ばかりを疑ふこゝが出來やうか。一つ一つの願の終りに「若しこれが出來なかつたならば、私は佛にはなりませぬ」こ云はれた法藏が、既に阿彌陀佛こなられてから、十劫こいふ長い〳〵時が經つてゐる。だから一つ一つの願は、假りなものでもなく、僞りのものでも

なかつた。善導大師は『然るに既にかの佛は現に極樂をかまへて佛となつて居らるゝ。誓もこより重くして虛しかるべきではない。かくて衆生、稱念すれば、必ず往生を得ること當然の理こいはなければならぬ』こ云ふて居られる。

第四章　修行者の三分類

『大無量壽經』の下卷に、本願の念佛を受けて、彌陀のみ國に、願生しようこするものゝ中に、三つの種類のあることが說いてある。

『世尊、阿難に告げ給ふやう、「あらゆる世界の諸天、人民が眞心を以てかの國に生れたいこ願ふ中に、凡そ上中下三種の輩がある。そのうち上輩こいふのは家を捨て、欲を棄てゝ沙門こなり、菩提を求むる心を發して、一心一向に無量壽佛を念じ、もろ〳〵の功德を修めて、かの國に生じようこ願ふものがある。かうした人達が命終る時、無量壽佛が多くの聖者達こ一緒に、その人の前に現はれて下さるから、その佛に隨ふてかの國に生れる。その場合、七寶の蓮華の中から自然に生れて、二度こ迷はぬ位に入り、すぐれた智慧の力こ、自在の神通力こを得ることが出來る。阿難よ、それゆゑ、この世で無量壽佛を拜まうこ思ふならば、よろしくこの上もない菩提を求むる心を發し、功德を修めて、かの國に生れようこ願ふべきである。」

世尊、阿難に告げたまふやう、「世の中輩こいふのは、あらゆる世界の諸天、人民の中で、眞心を

以てかの國に生れたいと願つて、上輩のやうに沙門となり、大に功德を修めることは出來なくとも當にこの上もない菩提を求むる心を發して、一心一向に無量壽佛を念じ、多少の善いことをし、戒律を守り、塔を建て、佛像を刻み、沙門に食物を施し、佛前に繒を懸け、燈明をさゝげ、花を供へ香を焚いて、これ等の功德によつて、かの國に生れたいと願ふものである。かういふ人たちの命終る時、無量壽佛が化身となつて、多くの聖者たちと一緒に、その人の前に現はれて下される。その化身の佛は、光明も姿かたちも眞實の佛と少しも違ふ所はない。かうした化身の佛に隨つてかの國に生れ、二度と迷はぬ位に住し、上輩に次いだ功德と智慧とを得ることが出來る。」

世尊は更に言葉をつゞけ、「阿難よ、その下輩といふのは、あらゆる世界の諸天、人民の中で、眞心を以てかの國に生れたいと願ひ、たとひ、もろ〳〵の功德を作ることは出來なくとも、この上もない菩提を求むる心を發し、一心一向に無量壽佛を念じて、かの國に生れたいと願ふものである。この中には一生涯の間、乃至十聲の念佛を稱へて生れたいと願ふものもあれば、また佛の法を聞いて疑ひなく信じよろこぶものもあれば、また一聲の念佛を稱へ、無量壽佛を念じ、至誠心を以てかの國に生れたいと願ふものもある。これ等のものは何れも命終る時、無量壽佛を夢のやうに拜んでかの國に生れることが出來て、中輩に次いだ功德と智慧とを得ることが出來る。」

今この三種の行者は、皆念佛の行者であることは、明かであるが、三種ともに念佛の外に、他の行をも修めてゐる事に氣がつく。卽ち第一のものは家を捨て、欲を棄てるといふ非常に清淨な行をし、第二のものは佛像を刻み、塔を建てるなどの殊勝な行をし、第三のものは熱烈に菩提を求める心を示してゐる。然るに、念佛の一行を選擇せられた佛の本願に目覺めたものに取つては、かやうな他の行を修めることは不要なことである。それならば何故に釋尊は念佛行者の上に、かやうな諸行の相を示されたのであらうか。善導大師が『觀念法門』の中に『この經の下卷に佛の言はく、上中下と色々に根性の同じくない人々が、何れもその根性のまゝに、佛の勸めに從ふて、專ら無量壽佛の御名を稱へるならば、その命の終らむとする時、佛が聖衆と共に自ら來り迎へたまふて、盡く往生を得しめらるゝであらうといつてある』と云ふて居られる點から見ると、念佛によつてこそ往生が出來るといふ義は、幾分、知られるけれども、それでは、たゞ念佛中心の義が知られる丈けで、何故に捨てるべき他の行が念佛行者の上に說かれてゐるかの理由は解からない。その深意を汲むには、今三つの意を以てうかがふことが出來るように思ふ。

その三つの意とは、第一には廢立の意で、諸行を廢して、念佛に歸せしめるために、諸行を說くと見るのである。第二には助正の意で、念佛を助けるために、諸行を說くと見るのである。第三には傍正の意で、念佛と諸行とを、同等に見て、念佛にせよ、その他の行にせよ、それらを行ずるものを、三種類に分つために諸行を說くと見るのである。

先づ、第一の意を考へて見る。善導大師が『散善義』に、『觀無量壽經』を解釋して、『以上述べた所を以て釋尊はこれまで、定善と散善との二つのみ法を說き、その利益をあらはし示されたが、これを阿彌陀佛の本願に望めて見れば、釋尊のお意は畢竟衆生にひとへに專ら阿彌陀佛のみ名を稱へさせやうといふ思召しにある』と云はれた意から推して、このこころをうかゞうて見ると、上にあげた樣に三種の行者の中に、種々の他の行が說いてはあるが、それは『大無量壽經』の上卷に說いてある本願の意を汲むと、專ら彌陀の名號を稱へさすことにある。本願の中には諸行はない。故に今この三種の行者の分類をされる中にも、諸行は說かれてはあるが、然も三種ともに、「一心一向に」、彌陀の佛名を稱へる可きことがすゝめてあるのである。この「一心一向」と云ふ語勢から見ても、釋尊が本願の意を受けて諸行を廢すべきことを知らしむるために、諸行と念佛とをならべて說かれたといふ聖意をうかゞふことが出來るのである。

第二の意は、又、その中に二つの意を見ることが出來る。その二つとは念佛と同じ樣な質の善行を以て、念佛を助けることゝ、念佛と異なつた質の善行を以て、念佛を助けることゝである。その前者は、善導大師が分類された五つの正行の中の稱名以外の助業を以て、念佛の一行を助けることを云ふのである。後者は上に云つた三種の行者の相を見ることが出來る。卽ち、三種の行者の中、第一のものに、助正を見るならば、一心一向に彌陀の御名を稱へるのは、正行で、家を捨て欲を棄てゝ、沙門となり、菩提を求むる心を發すなどは、助行である。みほとけの國に生れる根本の業は念佛であるから、ひたすらに念佛を修めるために、家を捨て、欲をすて、生活を一變して、勇猛心をふるひ起すのである。念佛こそ永久に退くことのない行であつて、家をすて、菩提を求め、勇猛心を發すなどのことは、道を求めるものゝ最初にとる可き、入門の形式で、寧ろ、念佛を助け、策勵するためのものである。第二のものについては、佛像を刻み、沙門に食物を施し、塔を建て、燈明をさゝげ、花を供へ、香を焚くなどの行爲は、矢張り念佛の助けである。これらの行爲が念佛の助けとなることは、惠信僧都の『往生要集』に解說してある通りで、處を定め、みほとけにさゝげものをすることなど

が念佛の心を生ぜしめる助けとなることは云ふまでもないことである。更に第三のものが菩提を求める勇猛心を發すのも、矢張り念佛を助けるためであることは、前の二者から推して知ることが出來るであらう。

第三の意、即ち、傍正の意といふのは三種の行者ともに、念佛の修行者としては、一心一向に無量壽佛の御名を稱へる」のであつて、然もそれに三種がある。又、諸行の修行者としては、共に「菩提を求むる心を發して」ゐるので、然もそれに三種類あつて、念佛にせよ、諸行にせよ、これを修めるものゝ上に、淺い深いがあることを示すために、行者のうへにかやうにその能力に隨ふた諸行を示されたのである。

かくの如く三つの意を以て、三種の行者を見ることが出來るが、第一の意は諸行は廢めさせるために說き、念佛は行ぜさせるために說くといふ廢立の意。第二の意は正行である念佛を助けるがために、助行としての諸行を說くといふ助正の意。第三の意は念佛と諸行とはならべては說くが、念佛は正であり、諸行は傍であるといふ傍正の意である。だから、三種の行者は各々その個性によつて、異つた表現を持つては居るが、何れもともに同じ念佛の行者である。かくて上の三つの意の中、そのいづれが『大無量壽經』下卷の三種の行者を正しく見た見解であるかといふこと、識者はその立場に從つて、色々の說を述べることだらうが、若し善導大師の意に從つたならば、第一の廢立の意を以て最も正しい見方をするのである。

第五章　念佛の利益

『大無量壽經』の下卷に、念佛によつて得る利益を說いて、次の樣に示されてある。

『若し、かの大無量壽佛の名號を聞くことが出來て、喜び勇んで、せめて一聲でも稱名念佛するならば、その人は大きな利益を得たものである』

善導大師は、この意をうけて、『往生禮讚』にいふて居られる。

『それ人ありて彌陀佛の　御名を聞き得て歡びつ
信じ、一聲稱へむに　皆かの國に生れ得む』

これについて問題がある。それは釋尊、『大無量壽經』に於いて、先に三種の行者を說き、念佛以外に、種々の行の功德を擧げられたのに、その經の終りには、この通りに他の行の功德は讚め給はないで、唯ひとり、念佛の功德だけを讚嘆してゐられるのは、どう云ふものだらうかといふことである。

思ふにその聖意は測り難いし、又、定めて深い意味のあることであらうが、今こゝには善導大師の廢立の意によつてうかゞつて見よう。佛のみこゝろでは、始めから直接にたゞ念佛だけを說かうと思召しても、それを聞くものに能力や、性質の差違があつて、一樣に聞き取らないものだから、先づ、それ〴〵にかなふ樣に、色々の行を說いて、三種類の行者を差別したまうたのである。然し經の終りに至つて、もはや、諸行を捨てゝしまつて、讚めもせず、論じもしたまはずに、たゞ念佛の一行だけを選んで、讚嘆したまふた。そのみこゝろを深く味ふ可きである。然し乍ら、その念佛について、二つの意味から、三種の行者があることを見ることが出來る。その二つの意味とは一つは行者の觀念の力の深い淺いといふことから。二つは念佛を稱へることの多い少いによつて。卽ち、生れつき、理智の勝れた素質を持つてゐるか、ゐないかによつて、觀念の力の深い淺いが生じ、怠りなく道のために努力するか、せないかによつて、念佛を稱へることの多いか、少いかの區別を見ることが出來るのである。けれど念佛そのものは、さうしたわれらの心性の深い淺いや、努力の多い少いによつて、その功德が變化する樣なものではなく、現實の一聲の念佛にでも、無上の功德を存し、それをわれらに具足するを得るものなることを說かうとされたのが、先に引いた『大無量壽經』の文である。この一聲

の念佛で、きつと往生さしてやると誓はれたことは、第三章で述べた樣に、彌陀の第十八願の成就の文の上に說かれてあり、又、第四章で說いた三種の行者の中、一番劣つてゐる第三番目のもの丶相の上にも示されてあつた。然し、正しく一聲の念佛によつて、大利を得、無上の功德を具へることが出來ると說かれたのは、上に引用した『大無量壽經』の文が始めて丶あつて、中途はんぱの功德や、一寸した利益を得る行に對して、一聲の念佛をこの上もない功德と、大きな利益を得るものとして、こゝに表はさるゝに至つたのである。

眞實の往生を願ふものは强て無上大利の念佛をやめてまでも、有上小利の他の行を修めねばならぬ理由がどこにあらうか。

第六章　念佛の永久性

『大無量壽經』の下卷の終りに、他の一切の敎が存在する價値をなくする樣な時があつても、念佛のみは永久に價値があることを說いて次の如くいふて居られる。

『末の世に佛法は滅びてしまふであらうが、私は慈悲哀愍の心から、特にこの『無量壽經』だけを百々年のあひだ、こゝにとゞめておくであらう。もし人、この經に値ふならば、望みのまゝに、迷の世界を離るゝことが出來る』。

蓋し『大無量壽經』がいつまでもその價値を失はないといふことは、そのまゝ念佛の永久性を意味するものであるまいか。何となれば、『大無量壽經』には念佛以外の色々の行も說いてはあるが、それを行ふ相は、別に說いてないのに、念佛だけはその一念に具はるといふ相を明瞭に說いてあるからである。さうして、例へば戒律を行ふ相ならばそれを說いた經典が別にあつて、それらの經典の存在する價値がなくなると共に、それら戒律などの行の價値も亦なくなるのである。かう云ふ所に念佛のみ、その一念に充足る價値が永久に光りかゞやくことを知ることが出來るのである。

だから善導大師は『往生禮讃』にこの『大無量壽經』の文の意を歌にうたふていふて居られる。

『萬の年經て三寶ほろび　この經猶も百歳殘らむ
その時きゝて信ずるものも　皆かの國に生れ得む』

今、この念佛の永久性を、より一層はつきりさせるがために、相對したものを四つあげて、價値の續くものと續かないものと考へて見ることゝせう。卽ち、聖道と淨土、十方と西方、兜率天と西方、佛と諸行の四種である。

第一。聖道の敎と淨土の敎とを比べて考へて見ると、聖道の敎は現在の人間の濁つた心には餘りに緣遠いが、淨土の敎は却つて濁り切つた人間の心に緣が深いから、その存在の値價を有する。

第二。十方と西方との二つの敎を相對して見ると、十方いづれの淨土にも生れよと說く敎は餘りに漠然としてゐて緣が薄いが、西方の淨土へ生れよと規定して示される敎は、人間の心の上に、はつきりと願生の對象が示され、隨つてわれらに取つて永久の價値を有するものとなるのである。

第三。兜率天へ生れよといふ敎と西方淨土へ往生せよと勸むる敎とを對比して見ても、未來に佛となる彌勒が居られる兜率天は、餘りに人間的に過ぎて、宗敎的の價値が薄いが、彌陀の淨土は人間に對して、その宗敎的の價値の深いものがある。よつてそこに永久の價値ありといはなければならぬ。

第四。諸行と念佛との二つの行を比較して見ても、諸行はわれらにとつては緣が淺くもあり、少くもあつて、その價値に限りがあるが、念佛とわれらは緣が多くして、然も深い關係があるから、そこに益々、その價値の永久性が證明せられるのである。

先に引いた樣に、『大無量壽經』に釋尊が『慈悲哀愍のこゝろから、特にこの『無量壽經』だけを、百々年のあひだ、こゝにとゞめて置くであらう』と云ふて居られる。若し、釋尊が慈悲と哀れみの心を起されたならば、どんな敎でも、永久に價値あらしめることが出來る筈である。それに『大無量壽經』のみを永久の價値あらしめようと云はれたのは、どう云ふ理由であらうか。今、善導大師の意に從ふてこの意義を窺ふて見よう。蓋しこの『大無量壽經』の中には、すでに阿彌陀如來の本願として、念佛によつて佛の國に生れることを得ると云ふことが說かれてあつて、他のいかなる經典にも、この本願は說かれてゐない。だから釋尊はその念佛に永久の價値があることを知らしむるがために、この『大無

量壽經』のみを百々年のあひだ留め、永久に價値あらしめようこいはれたのである。『大無量壽經』の四十八願は皆本願であるが、殊に念佛を以て往生の誓約こせられてある。故に善導大師は、『法事讃』にいふてゐられる。

『誓ひの門は多くして　四十八にも餘りつれど
念佛こそはまこと　そが肝要なれ
人、能く佛を念じなば　佛、かへりて念じます
こゝろ專らに佛を想へば　佛、その身を知ろしめす』

されば四十八願の中で、念佛往生の願を以て本願の王こいふことが出來る。そこで釋尊は慈みの心から、この『大無量壽經』が永久に價値あることを宣言して、『百々年の間こゝにこゞめて置く』こいふて居られるのである。例へば、『觀無量壽經』の最後に、思惟や觀念を主こする定善の行や、道德的行爲を主こする散善の行をば阿難に傳持せしめずに、念佛を傳持せしめられたのこ同じである。これまた畢竟彌陀の本願に順はれたから、念佛の一行を附屬せられたものなのである。

第七章　光明の攝取

彌陀の光明は、他の行を修めるものを照し給はないで、念佛の行者のみを攝め取り給ふことを、『觀無量壽經』に說いていふてある。

『無量壽佛の御身には、八萬四千のすぐれた相好があつて、その一つ〳〵の相には更に八萬四千のこまかな相があり、それ〴〵のこまかな一つ〳〵の相には亦、八萬四千の光明が具はつてゐる。かゝる光明を以て遍く十方世界を照らして、佛を念ずる衆生をその光明の中に攝め取つて捨てさせられぬのである』。

この經文をまた善導大師は『定善義』に解釋して、次の如くいふて居られる。

『これからが佛の眞のおん身を觀想することを說き明されたものである。而してこゝには正しくそが眞のおん身にそなはる光明の利益が說かせられてある。こころがこゝに不思議なのは佛の光明は普く凡ての人々を照らされるにも係はらず、たゞ念佛する人だけを光明の中へ攝めさせられるこいふことである。全體いづれの行にしても、それを佛にさし向けるならば、みな往生することが出

來る筈である。それであるのに何故念佛する人だけが光明の中に攝められるのか。蓋しこれには三つのいはれがあると思ふ。その一は阿彌陀佛と念佛する人達との間には親しい緣があるからである。卽ち衆生が口でいつも佛のみ名を稱へるといふと佛が直ぐにそれを聞こしめし、身でいつも佛を禮敬むといふと佛が直ぐにそれを見そなはし、心でいつも佛を念ずるといふと佛が直ぐにそれを知ろしめし、また人々が佛を憶念するといふと佛も直ぐにその人を憶念したまふのである。而してかやうに阿彌陀佛と念佛する衆生とは身も口も意も更に相離れず、その間、最も親しい緣があるといふのである。その二は阿彌陀佛と念佛する人達との間には近い緣があるからである。卽ち念佛する人達が佛を拜みたいと願へば、佛は直ぐにその念に應じて、そが目の前に現はれさせらる程に近い緣があるのである。その三は阿彌陀佛と念佛する人達との間には增上れた力づよい緣が結ばれてあるからである。卽ち衆生が佛のみ名を稱念へるならば、佛が聖者達と一もに、その人のこころに來らせられて、その人をば迎へ接らせたまふから、さういふ邪業もこの人の往生を礙げることが出來ないのである。これを阿彌陀佛と念佛する人達との間に結ばれた勝れて力づよい緣といふのである。かくて恁んな點からいへば、念佛以外の行も一より善と名づけることは出來るが、それを念佛に比べるといふと、全く比較にならぬものなのである。だからもろ〳〵の經典の中には處々に廣く念佛の功能をほめたゝへてある。卽ち『無量壽經』の四十八願の中などには、專ら阿彌陀佛のみ名を稱へれば往生が出來ると說かせられてあり、また『阿彌陀經』の中には一日乃至七日の間、專ら阿彌陀佛のみ名を稱へれば往生が出來るといひ、その上更に十方にます數限りのない諸佛がたの、み佛を稱へる人が往生するといふことは虛りではないといふことを證明して居られることが出て居るのである。またこの『觀經』では定善、散善を說かせられる中に、專らみ名を稱へるならば、極樂に生れることを得るといふことが標擧げてあるのである。かういふ例はたゞ上の一二にとゞまらない。その他にいくらでもあるのである。以上廣く念佛三昧の旨趣を叙說し竟つた』。

更に『觀念法門』にもいふてある。

『一切の光明、遍く十方の世界を照らしたまへども、そが常に攝め護りたまふものは、唯專ら阿彌陀佛を念ずるものばかりで、その餘の雜多な修行者には關係がない』と。

今、これらの文から佛の光明が、唯念佛する者だけを照して、他の行を修めるものゝ照し給はない

こいふ意味を考へて見るこ、私はこれを二つの方面からうかゞふことが出來る樣に思ふ。一つは先に引いた善導大師の解釋の樣に、親緣、近緣、增上緣の三つの因緣によるからであるこいふ義こ、今一つは本願の上からうかゞふ義こである。卽ち念佛以外の行は彌陀の本願ではない。だから佛の光明はこれを照して、その中に攝めたまはない。念佛は本願であるから、之を照し護りたまふこ見るのである。善導大師は『往生禮讚』にいふて居られる。

『彌陀の御身は黃金の山か　　み光は十方に照りわたる
たゞ念佛するものをのみ　　救ひます、誓ひのあるなれば』

又、前に引いた樣に、『定善義』に『念佛以外の行も、もこより善こ名づけることは出來るが、それを念佛に比べるこいふこ、全く比較にならぬものなのである』こいふてゐられる意を見ても、念佛は彌陀如來が法藏菩薩であられた時、願を發し、修行せられて、あらゆる行の中から選擇せられた程のすぐれた行であり、他の諸行は選び捨てられたものであるこに着眼してゐられることがわかる故にわれらに出來ることは、只、佛が捨てられたものを捨て、選び給うたものを、みこゝろのまゝに行ふだけであつて、兩者の比較なぞは思ひもよらぬこである。實に念佛は本願の行であり、外のあらゆる行は本願にあらざる普通の行に過ぎないのである。

第八章　信の内容

念佛するものにそなはる心を、『觀無量壽經』に次の樣に說いてある。

『もし衆生あつて、かの國に生れたいと願ふものは、三種の心を發したならば、直にかの國に生れることが出來る。その三種の心とは何であるか。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心である。』

善導大師の『散善義』に、この經文を解釋して、

『第一に至誠心と說かせられてあるのは、至は眞、誠は實といふ意味であつて、すべての衆生が身と口と意とに修める安心と行とは必ずそのむかし阿彌陀佛が長い〳〵間の眞實心でもつて作しとけさせられた所のものをもちゐねばならぬといふことを說きあらはされたものである。それはなぜであるかといふに、衆生は貪、瞋、邪、僞、奸、詐などいふ數知れぬ程の惡い心がおこりて、毒蛇や毒蝎のやうなものであるから、たとへ身に、口に、意に善き行を行ふても、それは毒の雜はつた善であり、虛僞の行であつて、眞實の業とはいふことが出來ないのである。

然るにかゝる虛假の心を內に懷いてゐながら、外面に賢く、善しく精進さうに振舞ふやうなことがあつてはならぬ。かういふやうなわけであるから、衆生はよし安心や起行を修めるために、身も心も苦しめ、夜晝の分ちなく、急ぎ急いで走りまはり、頭上の火を撥ふやうに勤め勵んだ所が、畢竟その行はみな毒の雜はつた善であり、ためにそんな行を佛に廻げて、かの淨土へ生れやうと求めたにしても、決して往生することの出來る筈はないのである。一體淨土へ生れるには、そのむかし阿彌陀佛が長い〳〵間、一念一刹那の間の弛みもなく、眞實心でもつて、身に、口に、意に修めさせられた善を、阿彌陀佛が衆生に施され、この施された善が、衆生の極樂へ生れたいと求趣む心となつた所に於て、始めて往生することが出來るのである。而してその施された善が眞實の善であるから、これによつて衆生の極樂へ生れたいと趣求む心も眞實の心となるのである。だからこれは到底今の如き毒の雜はつた善とはくらべることの出來ないものであり、ためにその毒の雜はつた善の往生の因となり得ないことは最も明かなものなのである。

さてまた眞實といふことに就て、自らを救ふ自利の眞實と他から與へらるゝ利他の眞實とがある。而してそが自利の眞實にもまた二種ある。卽ち一には眞實心でもつて、自分の惡を制めると同時に

他人の惡をも隨喜ぶことなく、却つてそれを禁め、かつ穢れたこの迷の世を厭ひ捨てゝ、あらゆる菩薩達が諸〳〵の惡を捨てさせられたと同じやうに、自分ももろ〳〵の惡を捨てねばならぬと思ひ行住坐臥、つねに行ひつゞけ、また眞實心からあらゆるすべての善を勤め、他人の善事を隨喜ぶことをいひ、二には阿彌陀佛とその淨土とを眞實心でもつて、口では讃めたゝへ、身では合掌禮敬ひ、意では思想し、觀察し、憶念し、次にこの迷の世のさま〴〵な苦しみと惡とを眞實心でもつて、口では厭ひそしり、身では輕慢り捨て、意では賤しめ厭ひ、次に生きとし生けるものゝあらゆる善き行をば讃めたゝへ、善からぬ業はこれを敬遠して喜び隨ふことのないやうにすることをいふのである。

次に利他の眞實とは、阿彌陀佛が眞實心から善からぬ身の業、口の業、意の業を捨てさせられ、身でも、口でも、意でも、善き業を行めさせられたその眞實を、衆生の心に受けもちゐるのをいふのである。かやうにして位の上下によらず、智の勝劣にかゝはらず、人々がみな阿彌陀佛の眞實を受けたもち、内と外、明るみと闇とにかゝはりなく、皆眞實であれば、往生することが出來るのである。至誠心とはこの心をいふのである。

第二は深心とは深く信ずる心である。而してこれにもまた二種ある。卽ち一には自分は現に罪と惡とに濁れた生死の凡夫であり、はて知らぬ昔から生死の海に沈み込むで、絶えまもなく流れ轉び、全くのがれ出づる緣のないものであるといふことを決定的に深く信ずるのをいひ、二には阿彌陀佛は四十八願でもつて、衆生を攝受はせられるから、疑ふこともなく、慮むることなく、その願力に乘託りさへすれば、必ず往生することが出來るといふことを決定的に深く信ずるのをいふのである。

また釋尊がこの『觀經』に三福九品定善散善を說いて、阿彌陀佛とその國土とを證し讃へさせられ、人々に阿彌陀佛とその國土とを欣ひ慕はしめられたことを決定的に深く信ずるのをいふのである。

また『阿彌陀經』の中に十方の數限りない佛達が、すべての凡夫は必ず往生することが出來るといふことを證し勸めさせられたことを決定的に深く信ずるのをいふのである。

またこの深く信ずるといふことは、すべての行者等が必ずひとすぢに偏に佛のお語を信じて、身も命も顧みず、決定的に佛のお語の通りの行をなし、佛が捨てしめ給ふものはこれを捨て、行めしめ給ふものはこれを行め、去らしめ給ふものはこれを去るのをいふのである。而してこの人を佛のみ敎に隨順ひ、佛のみ意に隨順ひ、佛のお願に隨順ふたものと名づけ、或は眞の佛弟子と名づ

けるのである。

また凡ての行者は偏にこの『觀經』を深く信じて、行をなすならば、決して人を誤らしむるやうなことがないのである。何ごなれば佛は大慈悲に滿ちた方であり、また眞實を語る方であるからである。佛已外の人達は菩提へ至る行も充分出來あがらず、まだ〳〵學ぶべき地位にあつて、煩惱の心も去らず、障りも除かれて居らぬ。隨つて願ふ所の涅槃も得られないのである。かういふやうな聖者や、學者達は、たゞひ諸佛のみ教のお意をば測量ることがあつても、到底充分これを究めることいふことの出來るものではない。よしたま〳〵正しく知り究めたとしても、必ず佛の證明を請はねばならぬ。そしてその時若し佛のお意に稱つて居れば、如是、如是と印可されるが、若しお意に稱つて居なければ、「おん身達の義はまだ充分でない」といふて印可されないのである。かくてそが印可されなかつた義は何等の價値も、利益もあるものでなく、たゞ印可された義のみが佛の正しき教に隨順ふたものであるから、價値と利益とがあるものとなるのである。所が佛のお語はどうかといへば、これこそ正しき教、正しき義、正しき解、正しき業、正しき智なるものなのである。それであるから佛が菩薩の意見であつても、人天の意見であつても、また多數の意見であつても、少數の意見であつても、すべてそれ等の是非を定めさせられるのである。よつて佛の說かせられたお語のみが明了かな教であつて、菩薩などの語は明了かな教ではないのである。こゝに於てか、私は今つゝしんで凡ての往生人に勸める。すべての往生人達よ、たゞ深く佛のお語を信じて專ら心をそこに注め、お語の通りにつとめなければならぬ。決して菩薩などの佛のお意にかなはない說を信用して、佛のみ教に疑をもち、惑を抱き、以て自ら往生の大利益を失つてはならぬのである。

また深信とは深く信ずることであるといふのは決定的に自分の信心を打ちたて、教の通りの行をなし、いつ〳〵迄も疑を起すことなく、全然疑を斷ちきつて、あらゆる別な解、別な行をなす人達や、異なつた學問や、異なつた見、異なつた執を持つ人達のために信心を傾動かされたり、たぢろかされたりせられぬのをいふのである。

然しそれにしても凡夫は智慧が淺く、惑障が極めて深いから、若し解や行の同じくない人達が多くの經典や、論によつて、すべて罪障のある凡夫は往生することが出來ぬものであるといふことを證明し、以て往生人の妨げをしたならば、どうして彼等の妨げを打ち拂ひ、信心を成就し、決

定して、眞直に進んで、怯れ退くことのないやうにしたものであらうか。思ふにさういふ輩に對しては次の如くいふべきであらう。「おん身よ、おん身は經典や、論を證據にして、罪の凡夫の往生することがないといふが、自分は決しておん身の言葉を信じない。なぜかといふに自分もまたおん身の擧げた所の經典や論を信ぜぬではない。それ等は皆仰いで信ずる。しかしこゝで知らねばならぬことは、世尊がそれ等の經典を說かせられた際は、その處も別であつたし、その時も別であつたし、またその聞く人や、利益も別であつた。そしてそれ等の經典を說かせられた時はまたこの『觀經』や、『阿彌陀經』や、『大無量壽經』を說かせられた時とは異なつて居ることである。かやうにそれ等の經典とこの『觀經』とが、その說かせられた時に異なりのあるのは、み敎を受ける相手が違ふからではないか。卽ちそれ等の經典は皆人や、天や、菩薩の解や、行を說かせられたものであり、この『觀經』は韋提希及び佛がおかくれになつた後の五濁と五苦に泥れて居る凡ての凡夫のために、定善と散善とをお說きになつたものである。そして世尊はこの『觀經』に於て、すべてそれ等の凡夫は極樂に往生することを證明せられたのである。だから自分は今、心ひとすぢにこの世尊のみ敎を信じ、決定して、敎のまゝに行めたてまつるのである。よつてたとひ、おん身等百千萬億のものが來つて、凡夫が往生することが出來ぬといつても、それは唯、自分の往生するといふ信心を增長し、成就するばかりにしか過ぎない」と。

また進んでかう說くもよからう。「おん身等、よく聽くがよい。自分は今おん身等のために、更に自分が如何に決定し、如何に信じて居るかといふことを說き聞かせるであらう。卽ちたとひこゝへ誇りに近い菩薩や、羅漢や、聲聞なども、十方世界に充ち滿つる程に集まり、經や論を證據にして凡夫の往生することはないことであると告げさせられても、自分は少しも疑ふやうな心を起さず、たゞ自分の淸淨かな心を增長し、成就するばかりである。なぜかといふに佛のお語は決定的に成就したる了らかな道理であるから、何ものゝためにも破壞せらるゝが如きことはないからである。おん身等よ、よく聽くがよい。今また誇りに入つた菩薩達が世界に滿ちわたり、聲をそろへて、みな釋尊か阿彌陀佛を讚めたゝへ、迷ひの世界をそしり、人々に對はせられて、心ひとすぢに佛を念じ、もろ〳〵の善事を行ふものは、次の世には必ず極樂に往生することが出來ると說いて人々を勸めさせられたのは、凡て悉く虛妄であるから、信じ依つてはならぬと告げさせられても、自分はまた露ばかりも疑ひを抱かぬのみか、信心を增長し、猶更それを成就するばかりである。な

ぜかこいふに佛のお語は眞實であつて、決定した明了な道理であるからである。實に佛は眞實を語り、眞實を解き眞實を見、眞實を誇らせられた方である。だからそのお語は菩薩のやうに疑惑の心から語り出されたものではなく、すべての菩薩の異なつた見や、異なつた解のために破壞せらるゝこいふこのないお語なのである。然し眞實の菩薩は佛の敎に違ふ語を述べさせられる筈がないから、若し佛の敎に違ふ語を述べさせられる菩薩があるこするならば、それは眞實の菩薩ではないのである。さてそれはさうこして置いて、またおん身等は更によく聽くがよい。たこひこゝに報佛や、化佛が見渡す限り充ち滿ちて、おの〳〵光を輝かし、世界を覆ふ程の舌を吐いて、みなそれ〴〵凡ての凡夫が心ひこすぢに阿彌陀佛を念じ、ほかの善をつこめ、阿彌陀佛に廻向けて往生を願ふならば、皆淨土に生れるこが出來るこいふ釋尊の敎說は全く虛妄であつて、決してさういふここはないものであるこ告げさせられたこしても、自分はそれに疑ひを起して、それでは極樂へ往生するこが出來ぬかこ畏れるやうなここは少しもないのである。何こなれば一人の佛がすべての佛であつて、あらゆる佛達はその智も、見も、解も、行も、證果も、果位も、大慈悲も、みな同じく、少しの差別もないから、一佛の禁ぜさせられるここは、すべての佛も同樣に禁ぜさせられるここなのである。たこへば前の佛が殺生等の十惡を數へて、それを禁じ、いつ〳〵迄もこれを犯さぬのを十善こ名づけ、またそれ等の惡を行はぬのを十善行こ名づけ、それが卽ち布施、持戒、忍辱、禪定、智慧、精進の六度の行であるこ說かせられたのを、後の佛が改めて、十惡を行ふのが十善行であるこ、惡行を勸めさせられるここがないやうに、諸佛はそのお語も行も少しの違ひがないのである。だから今、釋尊があらゆる凡夫に、身のあらむ限り、ひこへに阿彌陀佛を念じ、專ら淨土へ往生する行を修むれば、命終つてから必ずかの國へ生れるここが出來るこお勸めにならせられたので、十方の諸佛も亦同じやうに淨土を讚めたゝへ、同じやうに往生を勸め、同じやうに凡夫が往生のできるここを證明したまふたのである。これは全くいづれの佛も同一なる眞理から現はれ出でさせられたものであるばかりでなく、衆生もまた同一の眞理をそなへて居るものである。だから佛達は衆生の苦惱を、そのまゝ自分の苦惱こ思召し、大きな慈悲の心を以て衆生を敎化せらるゝ。よつて一佛の敎化があらゆる佛の敎化であり、從つてあらゆる佛の化益は一佛の化益こなるのである。こゝに於てか『阿彌陀經』の中には、初めに釋尊が極樂のいろ〳〵の莊嚴を讚めたゝへ、またすべての凡夫の一日乃至七日の間、ひこすぢに阿彌陀佛のみ名を稱ふれば、必ず往

生することが出來ることを勸めさせられたことが說き明され、次に恒河の砂の數ほどの多くの佛達が十方にましまして、一樣に釋尊が、五濁、卽ち惡い時、惡い世界、惡い衆生、惡い見、惡い煩惱に染まつた惡な無信者の盛んな時に於て、能く阿彌陀佛のみ名を讃めたゝへ、それを稱ふれば必ず往生することが出來るといふことを衆生に說き勵まされたものであるといふて、釋尊を讃ぜられたことが說き明されて居るのである。またその『阿彌陀經』には十方の諸佛が釋尊御一人の說では、衆生が信じないかも知れぬといふ畏れから、みな一樣に心をそろへ、三千世界を覆ひつくすやうな大きな舌を出して、『汝等衆生よ、汝等は宜しく今、釋尊が說き、讃め、證された所のこのみ法を疑ひなく信ずるがよい。すべての凡夫は心をひとすぢにして、一日なり、七日なり、或は一生涯なり、專ら阿彌陀佛のみ名を稱へるならば、罪と福との多少によらず、またみ名を稱へる時間の長短にかゝはらず、必ず往生することが出來る。そのことに少しの疑ひもない』と誡をこめて、釋尊の說の證明して居られるのである。かういふやうに一佛の說かせられたことをば、あらゆる佛達が證明なされるのを見ても、一佛の說はそのまゝすべての佛の說であるといふことがわかり、從つて一佛がそのまゝあらゆる佛でましますといふことをも明かになつてくるのである。それであるから自分はひとすぢに釋尊のみ教を信じて往生を願ふのである」と。

以上述ぶる所、これを人に就いて信心を立てるといふのである。次に行に就いて信心を立てることを述べよう。それに就て先づ行といふことから說明するに、行には正行と雜行との二つの種類がある。以下正雜二行の叙說は既に前の第二章に於て引用したものだから、こゝには繁を恐れて省略することゝする。

第三に廻向發願心とは昔から今まで、自分が身と口と意とに修めた世間一般の善や、出世間の宗教的な善及び他の人々のあらゆる善を隨喜ぶ善との、かゝる自他の善をば眞實に深い信仰心から阿彌陀佛に廻向けて、かのみ國へ生れたいと願ふのである。

所が廻向發願してかの國へ生れむとおもふものは、必ず阿彌陀佛が眞實心でもつて、廻向へて下される願心を受けたてまつらねばならぬのである。そしてその廻向へて下される願心はそのまゝ決定して衆生の心の中に、往生を遂げ得られるといふ確信となつてあらはれさせられるのである。この確信の深いことは金剛の如く、あらゆる異なつた見、異なつた學問、別な解、別な行をして居る人達が、どのやうに說きかけて來ても、そが動亂せられることも、破壞せらるゝこともなく、一すぢに決定して、すべてを阿彌陀佛にまかせ、正直に進んで、決してそれ等の人の言葉を聞いた

がためにためらふたり、怯えたり、氣をかねたりして、道を踏みはづし、往生の利益を取り失ふやうなことがないのである。

然しかうはいふものゝ若し解や行のちがつた邪雜な人が來て、信心の人を誘惑し、亂さうこと企て色々な往生に對する批難を試み、そが往生の出來ぬことを語り、「おん身達のやうに遠い〳〵昔から今に至るまで、身こ口こ意こで、一切の人々に對して犯した十惡、五逆、四重、謗法、無信、破戒、邪見等の罪を負ひ、今日未だその罪を除くことの出來ないものが、さうしてこの一生の間、行めた位の善行や、念佛で以て、かの漏れのない無生の國へ往生し、證悟を得ることが出來やうか。おん身達が造つたそれ等の罪は、實におん身達を三界の惡道へ引き込む網だといふことを知らないのか」と嚴しい語を以て突き込んで來たならば、どうそれに答へるべきであらうか。思ふに恁んなものに對しては次の如く答へたならばよいであらう。

「ぜんたい諸佛の教へさせられた行は塵砂の數ほどもあつて、みなそれ〴〵人々の生れつきに緣り悟に隨ふて說かせられたものであるから、一樣ではないのである。世間の人達の現に見て信じて居るものに就て考へても、明りは能く闇を破り、虛空は能く物を含み、大地は能く物を載せて養ひ、水は能く物を潤して芽を生ぜしめ、火は能く物を成熟せしめ、また能く破壞するといふやうに、この世のものはみなそれ〴〵のものに對して、それ〴〵の作用をもつてゐるのであつて、その作用はであるから、まして不思議な力用をそなへて居る佛法に、いろ〳〵の利益があるのは勿論のことゝ實に千差萬別なるものである。かやうにこの世の物ですらも、數限りのない作用をそなへて居るのいはれなければならぬ。實に佛法は一門を出づるに隨つて、一つの煩惱の門を出で、一門を入るに隨つて、一つの解脫の智慧門に入るのであるから、衆生はそれ〴〵の緣に隨うて、それ〴〵の佛法の門に入り、行を起し、おの〳〵解脫を求めたがよいのである。かやうなわけであるのに、おん身達は、私に緣のない所の行をもつて來て、何こか私を惑はし障げるのであるが。全體私の愛する所の法は私に緣のある行であつて、それはおん身達の求むる所のものではなく、おん身達の愛する所の法はおん身達に緣のある行であつて、それは私の求むる所のものではないのである。そして人おの〳〵が樂む所に隨ふて、行をえらび、それを修めさへすれば、それで必ず疾く解脫が得られるのではないか」と。

行者よ、恁んな點から考へて能く知つて置くがよい。若し道を學ばうと欲ふならば、凡夫の道か